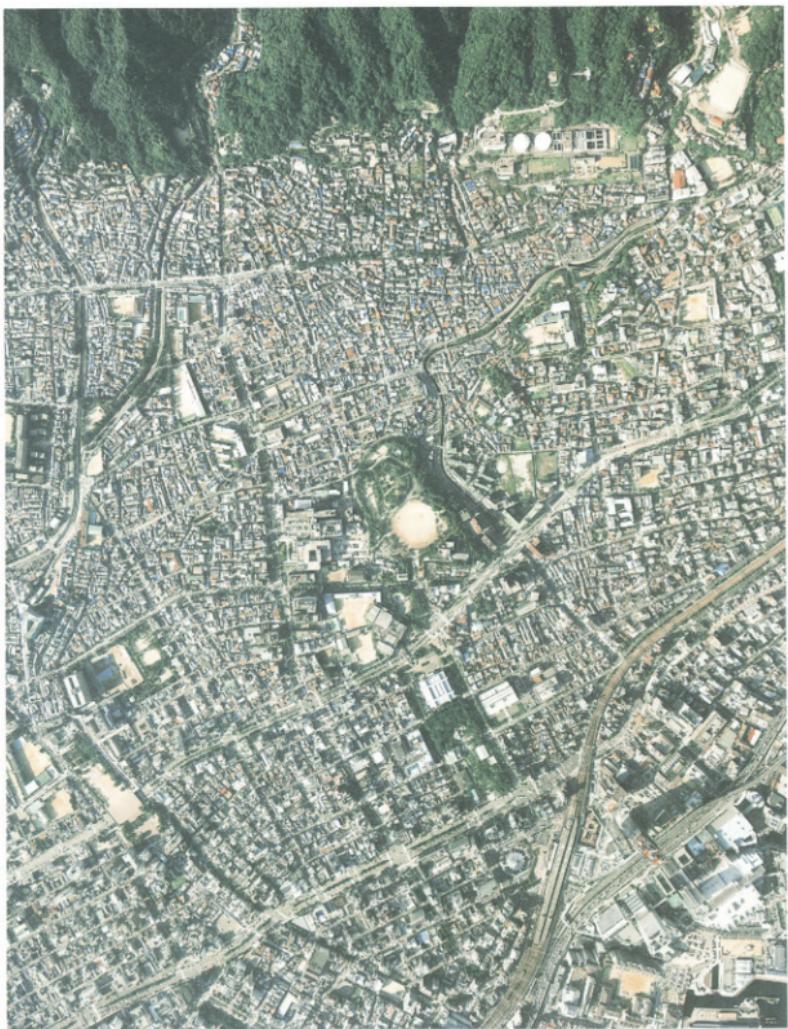


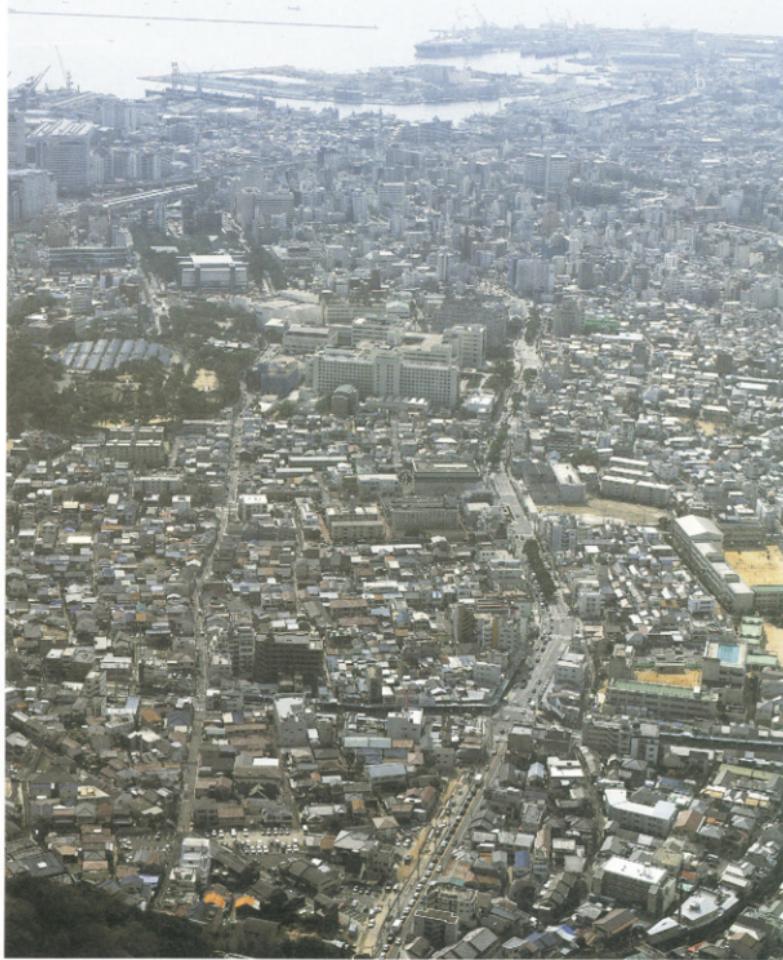
楠・荒田町遺跡

－神戸大学附属病院構内遺跡－

平成9年3月
兵庫県教育委員会



楠・荒田町遺跡周辺（1992年撮影）



楠・荒田町遺跡（平野方面から神戸港への眺望）



1985年度調査区遠景（北上方から）



1. 1987年度調査（A・B区）空中写真



2. 1992年度調査 第3面全景（西上方から）



1994年度調査 井戸（上：上面，中：掘り方中層，下：井側細部）

卷首圖版 六 遺物（二）



1. 1981年度調査



2. 1982年度調査



1. 1985年度調査



2. 1987年度調査（上：平安～鎌倉時代、下：近代）

卷首図版 八 遺物（三）



1. 1992年度調査（上：奈良～平安時代、下：鎌倉～室町時代）



2. 1994年度調査 井戸出土

例　　言

- 1 本報告書は、神戸大学医学部附属病院構内の施設新営工事に伴って実施した、神戸市中央区楠町に所在する楠・荒田町遺跡発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査及び整理作業は、神戸大学医学部の委託を受け、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。各年度の調査担当者については、本文中に一括して記載する。
- 3 本書で報告する本発掘調査は、昭和60年度、62年度、平成4年度、6年度に実施したものである。また、調査の成果を記載する必要から、神戸大学により実施された1981・82年度の調査についても、同大学の許可を得て概要を再録している。
- 4 遺跡の地形図及び遺構の実測図は、国土座標第V系を基準とし、実測図の方位は座標北を示す。また、標高は東京湾平均水準を基準としている。
- 5 本報告書の遺物番号は、調査年度別に付与し、土器・陶磁器・土製品の場合は数字のみで、石器・石製品の場合はSを、木器・木製品の場合はWを、金属器の場合はFをそれぞれ記載番号のはじめに付している。
- 6 出土品の整理作業は、埋蔵文化財調査事務所整理普及班が担当し、平成7年～8年度に実施した。
- 7 出土品のうち、金属器・木器の保存処理は、埋蔵文化財調査事務所整理普及班の、加古千恵子、藤田淳の指導の下に保存処理担当が実施した。
- 8 本報告書の編集は、埋蔵文化財調査事務所、岡田章一、久保弘幸、深江英憲がおこない、執筆は、前記三名と兵庫県教育委員会の長谷川眞がおこなった。
- 9 本報告書にかかる遺物・図面・写真等の資料は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所及び魚住分館に保管しており、広く活用に供することができる。
- 10 発掘調査及び整理作業にあたっては、以下の方々および関係機関からご教示、ご指導を得た。記して謝意を表したい。(五十音順、敬称略)
奈良国立文化財研究所、伊東隆夫(京都大学木質科学研究所)、喜谷美宣、高橋学(立命館大学教授)、森田稔

本文目次

第1章 調査の経緯	久保
第1節 1981・82年度調査（神戸大学）	1
第2節 兵庫県教育委員会による調査	2
第2章 遺跡の環境	久保
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 1985年度調査	岡田・長谷川
第1節 調査の概要	6
第2節 遺構	7
第3節 遺物	7
第4節 小結	9
第4章 1987年度調査	岡田・長谷川・久保
第1節 調査の概要	11
第2節 遺構	11
第3節 遺物	13
第4節 小結	16
第5章 1992年度調査	久保・深江
第1節 調査の概要	17
第2節 遺構	17
第3節 遺物	21
第4節 小結	28
第6章 1994年度調査	岡田・長谷川・久保
第1節 調査の概要	30
第2節 遺構	30
第3節 遺物	31
第4節 小結	34
第7章 まとめ	35

図 版 目 次

- 図版 1 調査区位置図
図版 2 1981・1982年度調査遺構図
図版 3 1981・1982年度調査出土遺物（1）
図版 4 1981・1982年度調査出土遺物（2）
図版 5 1985年度調査遺構図（1） 遺構全図
図版 6 1985年度調査遺構図（2） 土層と土坑
図版 7 1985年度調査遺構図（3） 柱穴群
図版 8 1985年度調査遺構図（4） 溝
図版 9 1985年度調査遺構図（5） 窒跡
図版 10 1985年度調査出土遺物（1）
図版 11 1985年度調査出土遺物（2）
図版 12 1987年度調査遺構図（1） 遺構全図
図版 13 1987年度調査遺構図（2） A区1面・2面遺構
図版 14 1987年度調査遺構図（3） 石垣
図版 15 1987年度調査遺構図（4） 井戸・溝
図版 16 1987年度調査遺構図（5） 井戸・土坑・溝
図版 17 1987年度調査遺構図（6） B区土層断面図
図版 18 1987年度調査遺構図（7） B・C区1面・2面遺構
図版 19 1987年度調査遺構図（8） B・C区3面・4面遺構
図版 20 1987年度調査遺構図（9） D区土層断面図・1面遺構
図版 21 1987年度調査遺構図（10） D区2面・3面遺構
図版 22 1987年度調査遺構図（11） D区4面・5面遺構
図版 23 1987年度調査出土遺物（1）
図版 24 1987年度調査出土遺物（2）
図版 25 1987年度調査出土遺物（3）
図版 26 1992年度調査遺構図（1） 第1面全体図
図版 27 1992年度調査遺構図（2） 第1面土坑・水琴窟
図版 28 1992年度調査遺構図（3） 第2面全体図
図版 29 1992年度調査遺構図（4） 第2面掘立柱建物
図版 30 1992年度調査遺構図（5） 第3面全体図
図版 31 1992年度調査遺構図（6） 第3面土坑・池状遺構
図版 32 1992年度調査遺構図（7） SB-05・06
図版 33 1992年度調査遺構図（8） SB-07
図版 34 1992年度調査遺構図（9） SB-08・09
図版 35 1992年度調査遺構図（10） SB-10・11

- 図版 36 1992年度調査遺構図（11） 調査区および調査区内トレンチ断面図
 図版 37 1992年度調査出土遺物（1）
 図版 38 1992年度調査出土遺物（2）
 図版 39 1992年度調査出土遺物（3）
 図版 40 1992年度調査出土遺物（4）
 図版 41 1992年度調査出土遺物（5）
 図版 42 1992年度調査出土遺物（6）
 図版 43 1992年度調査出土遺物（7）
 図版 44 1992年度調査出土遺物（8）
 図版 45 1992年度調査出土遺物（9）
 図版 46 1992年度調査出土遺物（10）
 国版 47 1994年度調査遺構図（1） 全体図・断面図・埋甕
 国版 48 1994年度調査遺構図（2） 井戸
 国版 49 1994年度調査出土遺物（1）
 国版 50 1994年度調査出土遺物（2）
 国版 51 1994年度調査出土遺物（3）
 国版 52 1994年度調査出土遺物（4）
 国版 53 1994年度調査出土遺物（5）
 国版 55 1994年度調査出土遺物（6）

写 真 図 版

図版 1	空中写真（1）	図版16	1987年度調査 遺構（6）D区
図版 2	空中写真（2）	図版17	1987年度調査 遺物（1）
図版 3	1981年度調査 遺物	図版18	1987年度調査 遺物（2）
図版 4	1982年度調査 遺物（1）	図版19	1987年度調査 遺物（3）
図版 5	1982年度調査 遺物（2）	図版20	1987年度調査 遺物（4）
図版 6	1985年度調査 遺構（1）	図版21	1987年度調査 遺物（5）
図版 7	1985年度調査 遺構（2）	図版22	1992年度調査 遺構（1）
図版 8	1985年度調査 遺物（1）	図版23	1992年度調査 遺構（2）
図版 9	1985年度調査 遺物（2）	図版24	1992年度調査 遺構（3）
図版10	1987年度調査 調査風景A・B区	図版25	1992年度調査 遺物（1）
図版11	1987年度調査 遺構（1） A区	図版26	1992年度調査 遺物（2）
図版12	1987年度調査 遺構（2） A区	図版27	1992年度調査 遺物（3）
図版13	1987年度調査 遺構（3） B・C区（1）	図版28	1992年度調査 遺物（4）
図版14	1987年度調査 遺構（4） B区（2）	図版29	1992年度調査 遺物（5）
図版15	1987年度調査 遺構（5） B・C区（3）	図版30	1992年度調査 遺物（6）

図版31	1992年度調査 遺物（7）	図版38	1994年度調査 遺物（2）
図版32	1992年度調査 遺物（8）	図版39	1994年度調査 遺物（3）
図版33	1992年度調査 遺物（9）	図版40	1994年度調査 遺物（4）
図版34	1992年度調査 遺物（10）	図版41	1994年度調査 遺物（5）
図版35	1992年度調査 遺物（11）	図版42	1994年度調査 遺物（6）
図版36	1994年度調査 遺構	図版43	1994年度調査 遺物（7）
図版37	1994年度調査 遺物（1）	図版44	1994年度調査 遺物（8）

表 目 次

第1表 調査の体制.....	3
第2表 1981・82年度調査の出土遺物	36
第3表 1985年度調査の出土遺物.....	37
第4表 1987年度調査の出土遺物.....	38
第5表 1992年度調査の出土遺物.....	40
第6表 1994年度調査の出土遺物.....	43

第1章 調査の経緯

第1節 1981・82年度の調査（神戸大学）

楠・荒田町遺跡は、神戸市兵庫区荒田町、向西上橋町、中央区楠町、西橋町にわたる範囲を占める、縄文時代～中世の遺跡である。遺跡が周知されたのは、古く、大倉山西麓で石器が採集されたことに端を発する。遺跡周辺は早くから市街化の進行がおこなわれた地域であり、遺跡の存在を示す表記は現在ではまったく見られなくなっている。しかしその後、神戸市営地下鉄建設に伴う発掘調査では、弥生時代前期～中期、中世の集落跡が検出されているほか、小規模ながら、住宅建設などに伴う発掘調査が実施され、縄文時代～明治時代の神戸鎮台に至る神戸の歴史を示す、代表的遺跡として知られている。

また、いわゆる「福原京」伝承地（平氏別邸群）の一部が、本遺跡内に包摂されることも著名であり、隣接する雪の御所町遺跡、平野祇園遺跡などとともに注目されてきた。

神戸大学医学部附属病院は、こうした背景をもつ楠・荒田町遺跡なかでも中心的な位置を占めると思われる、丘陵頂部の平坦面上に位置しており、「福原京」伝承地のなかでもっとも良好な立地条件をみせている。

神戸大学附属病院構内遺跡の調査は、兵庫県教育委員会が調査を受託する以前の1981・82年度に、神戸大学名誉教授多瀬敏樹氏による発掘調査に端を発する。多瀬名誉教授の調査も、病院建替え工事に伴うものであり、その成果の一部が報告されている。

それによれば、幅1.6～2 m、深さ約2 mを測る、二重の堀の一部と、大規模な掘立柱建物跡の一部が検出された。これらから出土した遺物には、12世紀後半～13世紀前半の時期を示すものが含まれている。神戸大学附属病院構内の地点は、「平家物語」に伝えられる平賴盛の邸跡伝承地である、荒田八幡神社の約200m東に相当することから、これらの建物跡との関連が指摘されている。

81・82年度の調査は、面積が狭小であったため建物跡の全体規模は不明であるが、この地域に、平安時代後期の大規模建物跡が存在することを示した、最初の例となった。

本報告書では、神戸大学および多瀬名誉教授のご厚意により、1981・82年度調査の出土遺物を再録させていただいた。その概要は、以下の通りである。

(1) 古代の土器

a 土師器

土師器には、製塙土器がある。砲弾状の器形を呈し、口縁部はやや外反する。成形・整形・調整技法は、体部内面は横方向のナデ調整で、体部外面には成形時の指オサエ痕が認められ、口縁部縁部はヨコナデ調整されている。

(2) 中世の土器・陶磁器

a 土師器

土師器には、皿・杯がある。

1) 皿

皿にはロクロ使用のものとロクロ未使用のものとがあり、小型品のみである。

ロクロ使用の皿は、糸切り底で、比較的深身のもの（1003・1007）と比較的浅身のもの（1004）とがあ

る。前者は口縁部端部が肥厚しながら丸く納まり、後者は口縁部端部がやや尖り気味に納まる。形態等の特徴から、前者は12世紀後半～13世紀前半の所産と考えられ、後者は13世紀代の所産と考えられる。

ロクロ未使用の皿は、形態的には、内縁気味の体部が底部から立ち上がり口縁部が外反するもの（1001・1002・1006・1008）と、底部から内縁気味に体部が立ち上がり口縁端部に面を持つもの（1005）、底部から比較的短い体部が立ち上がりそのまま口縁部にいたるもの（1099）とがある。

成形・整形・調整技法は、いずれも底部外面に整形時の指オサエ痕が確認でき、底部外面のナデ調整の後に口縁部内外面がヨコナデ調整され、調整の最終段階で底部内面がナデ調整される。

形態等の特徴から、口縁部が外反する皿は12世紀前半の所産と考えられ、口縁端部に面を持つ皿は12世紀後半の所産と考えられる。

2) 杯

杯（1010）は、ロクロ成形で、底部から内縁気味に体部が立ち上がり、口縁部は外反して端部は丸く納まる。底部にはヘラ切り痕が認められる。形態等の特徴から12世紀代の所産と考えられる。

b 瓦器

瓦器には椀（1014）がある。断面三角形状の高台をもち、内面に圓線状のミガキを施す。体部外面には指頭圧痕が認められる。尾上分類の和泉型瓦器椀Ⅲ～3期相当のもので13世紀前半の所産と考えられる。

c 須恵器

須恵器には鉢（1015）と甕（1016）がある。

鉢は体部は内縁し口縁部は水平に外方に折り曲げる。東播系神出窯の製品で11世紀前半～中葉の所産と考えられる。

甕は口縁部が外反し、端部が垂下しないタイプのもので、東播系の12世紀前半代の時期が考えられる。

c 陶器

陶器には褐釉の瓶（1020）がある。13世紀代の中国製の褐釉陶器の可能性が考えられる。

d 白磁（1019・1018）

1019・1018はいずれも碗である。1019は低く浅い高台を削り出すもので森田・横田分類の白磁碗IV類に相当する。1018は細く高い高台を持ち、口縁部は外反するもので、横田・森田分類の白磁碗V類に相当する。いずれも、12世紀前半～13世紀前半の時期が考えられる。

(3) 石器・石製品

S1001は、砾石である。上半を折損するが、全体に扁平な直方体状に整形されていたものであろう。表裏両面に、研磨痕をとどめるが、うち1面が著しい凹面に変形していることから、これが主たる使用面と思われる。

以上のような出土遺物からは、調査地点付近において12世紀後半～13世紀前半にわたり遺跡が形成されたと判断される。検出された遺構群は、一般集落とは規模が大きく異なることから、平氏別邸の一部である可能性が指摘されてきた。

第2節 兵庫県教育委員会による調査

今回報告する兵庫県教育委員会による調査は、前節のような成果を受け、神戸大学附属病院構内の医学部関連施設新営工事に伴い、同大学の依頼により兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した発掘

調査によるものである。

調査は1985年度から、99年度にかけて実施されたが、今回報告するのは、1985・87・92・94年度調査の成果である。各年度の発掘調査体制および調査担当者は、第1表に示したとおりである。

また、整理事業は平成7～8年度にかけて、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において、調査担当者を中心に、同事務所整理普及班が実施した。

年 度	調査担当者	調査面積
1985 調査番号 650055	兵庫県教育委員会社会教育・文化財課 技術職員 岡田章一 技術職員 長谷川眞	780m ²
1987 調査番号 870031	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 埋蔵文化財調査係 主　査 岡崎正雄 技術職員 村上賢治	1203m ²
1992 調査番号 920174	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 調査第1班 技術職員 久保弘幸 技術職員 澤江英憲	1251m ²
1994 調査番号 940257	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 調査第1班　主査 岡崎正雄 調査第3班　主査 吉田　昇 調査第2班　主査 水口富夫	392m ²

第1表 調査の体制

注

- 1 尾上実・森島康雄・近江俊秀 1995 「瓦器輪」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
- 2 横田賢次郎・森田勉 1978 「太宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4

第2章 遺跡をとりまく環境

第1節 地理的環境

西区・北区を除く神戸市の北側には、931.3mを最高峰とする六甲連山が東西に延び、そこから流下する多くの小河川が、海岸線との間に、深い開析谷とともに扇状地や緩やかに傾斜する沖積地を形成している。山裾から海岸線まではわずか数kmにすぎず、この間に海岸線に沿って、現在の神戸市中心領域が広がっている。六甲山系は、花崗岩を基盤としていることから浸食が顕著で、河川の氾濫に伴ってしばしば災害をもたらしてきた。このような平地の狭小さと、災害の発生は、おのずと本地域における遺跡の立地にも制約を与えていたものと思われる。

楠・荒田町遺跡は、神戸市兵庫区荒田町、同西上橋町、中央区楠町、西橋町にわたる、広い範囲を占めており、今回報告する神戸大学附属病院構内の地区は、神戸市中央区楠町に所在する。遺跡は、現在の海岸線から約2kmの地点に位置し、標高は約25mを測る。遺跡が立地する地点は、東舞を標高56mを最高点とする大倉山によって囲まれた、頂上部に比較的平坦な面をもつ丘陵上に位置している。「兵庫の地質」によれば、大倉山の基盤をなすのは花崗岩類である。大倉山の北東側には大倉山同様、花崗岩類を基盤とする細い尾根が延び、現在の諒訪山付近で六甲山系本体に接している。大倉山の東側は急峻な崖面となっているため、かつては大倉山山頂から大阪湾方面への眺望は極めて良好であったに違いない。

明治20年に刊行された、大日本帝国參謀本部陸軍部測量局地形図(1/20000)を見ると、遺跡付近は既に陸軍練兵場となっており、その西側に旧荒田村が広がっている。遺跡が立地する丘陵の中央には有馬街道が縱貫しているが、周辺の大部分は耕地であったようである。遺跡の北には、東西に延びる谷を堰き止めた、二つの溜池が描かれていることから、かつて、遺跡が立地する丘陵は大倉山から西向きに張り出ず、舌状を呈していたものと思われる。この谷を挟んだ六甲山麓には、派生した尾根の先端に開けた平野村がある。

楠・荒田町遺跡が立地する丘陵の西側には、10m程度の比高差をもって、湊川が流下している。湊川は、六甲山麓からほぼ南向きに流下した後、遺跡の立地する丘陵の西側で、南東方向に大きく屈曲して瀬戸内海に至っており、その流入する付近に兵庫港が開かれている。かつての湊川は屈曲せず、直線的に和田岬方向へ流下していたとする考えもあるが、これまでの発掘調査では検証されていない。

湊川を挟んで西側には、六甲山系から南東方向に派生する丘陵が延びており、大倉山、楠・荒田町付近の丘陵と相対して、かつては湊川を包み込むような景観を呈していたであろう。「福原京」と呼びならわされる平氏一門の別邸群は、この周辺の高台に広がっていたものと推定されている。

第2節 歴史的環境

1. 周辺遺跡の概要

楠・荒田町遺跡が位置する、神戸市中央区、兵庫区周辺には、湊川に沿った山麓・丘陵・扇状地頂部および海岸平野の微高地に、後期旧石器時代～中世に至る遺跡の分布が認められる。

楠・荒田町遺跡から、湊川を挟んだ西側の丘陵上に立地する、会下山遺跡では、国府型ナイフ形石器が採集されており²、隣接地域における最古の遺跡と言えよう。

兵庫県教育委員会で実施した、一連の発掘調査によって見いだされた最も古いと思われる遺物は、1992

年度の調査で出土した、縄文時代早期以前に属すると思われる、サヌカイト製の梯葉形尖頭器であろう。本遺跡の南東に隣接する宇治川南遺跡周辺では、縄文時代早期～晚期の遺物が出土しており³、また、楠・荒田町遺跡では、縄文時代後期の土坑の検出例があるという⁴。本地域においては、湊川が形成した段丘・山麓の扇状地上に、縄文時代を通じて、小規模な集落が断続的に営まれた可能性がある。

弥生時代以降は、楠・荒田町遺跡に安定した集落が形成されたと思われる。1978～79年の神戸市教育委員会による調査では、弥生時代前期～後期の土器が出土しており⁵、楠・荒田町遺跡は、本地域における中核的集落であったものと思われる。

古墳時代では、重列式神獣鏡を出土した、全長60mを測る前方後円墳の夢野丸山古墳、全長55mの前方後円墳会下山二本松古墳などが知られている⁶。

2. 「福原京」関連遺跡の分布

1180年に安徳天皇・高倉上皇らが、平氏邸宅群に入る。このいわゆる「福原京」については、さまざまな位置の推定がおこなわれている。しかし市街化が非常に早くからおこなわれた本地域では、多くの遺跡が調査をされないまま開発されたり、市街地の地下となつたため、調査可能な範囲がきわめて狭小であり、「福原京」中枢部についても不明な点が多い上、かつての景観を復原することも困難である。その中で、現在の雪御所町が『山桜記』⁷に「本皇居、禪門家雪御所北也」と記録された、清盛邸と古くから推定されており、明治年間には、工事に伴って多数の瓦・土器とともに礎石が発見されている。

また、「平家物語」に、平頼盛の邸宅が荒田村にあったと記され、現在、荒田八幡神社がその伝承地となっている。しかしこれらの推定は、偶発的発見によるわずかな物証を除けば、十分な考古学的成果に基づくものではなかった。

1981・82年に、多淵敏樹神戸大学名誉教授によって調査された、神戸大学附属病院構内の地点では、「平家物語」の記載を裏付ける可能性がある、大規模な二重堀とそれに囲まれた掘立柱建物跡の一部が検出されている⁸。また、1999年に神戸市教育委員会がおこなった、祇園平野遺跡の調査では、平安時代後期に属する庭園遺構が検出され、また多数の京都系土師器類が出土しており、「福原京」関連遺構の一部として、注目を集めることとなった⁹。兵庫県教育委員会が実施した楠・荒田町遺跡の発掘調査では、当該時期の遺物が断片的に検出されるのみであったが、1999年の調査で、大規模な堀が検出されている（兵庫県教育委員会 未報告）。また、平氏と関連の深い「大輪田泊」の位置については、現在までのところ検証にたえる考古学的証左は得られていない。

注

- 1 兵庫県土木部編 1996 『兵庫の地質』
- 2 喜谷美宣 1988 『最古の跡人たち』『新修 神戸市史』 神戸市
- 3 丹治康明・池野素子 1986 『宇治川南遺跡』『昭和58年度 神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
- 4 真野 修 1990 『楠・荒田町遺跡発掘調査概報－第5次－』 神戸市教育委員会
- 5 丸山 謙・丹治康明 1980 『楠・荒田町遺跡発掘調査報告書』 神戸市教育委員会
- 6 喜谷美宣 1988 『兵庫区の遺跡』『新修 神戸市史』 神戸市
- 7 内大臣中山忠親が著した日記。『福原京』に関する記述を含む。この他に、『福原京』を記録したものとして、『高倉院殿義御幸記』などがある。
- 8 兵庫生活文化大学（文化財講座）1985 『平清盛と福原京』 兵庫県教育委員会
- 9 神戸市教育委員会文化財課 2000 『祇園遺跡第5次発掘調査報告書』

第3章 1985年度の調査

第1節 調査の概要

1. 調査の概要

1985年度の調査は神戸大学医学部付属病院建設に伴って実施されたものである。従来からの当該遺跡の調査結果に基づき、県教委では病院建設予定地の一部430m²（以下A区）について全面調査を実施することとし、さらに北側の200m²（以下B区）については確認調査を行い、その結果に基づいて全面調査を行うことを前提として、調査を開始した。

調査の結果、A区では調査区の南西部で11世紀後半～12世紀前半の時期に属すると考えられる柱穴の点在が認められた。他には、調査区西側で南北に延びる石組遺構及び後世の擾乱坑が検出されたのみで、調査区の北東部分では遺構は全く検出されなかった。

1984年度調査で多量の遺物を出土したIV層シルト混じりの黒褐色砂層は重機掘削後の調査ではほとんど検出できなかった。また、調査前に行われた重機掘削の際、土層を観察するためのセクションが設定されていなかったため、A区に包含層が存在したか否かを検証することは不可能となった。

このため、重機掘削がまだ行われていなかったB区について、幅2m、長さ5mのトレーナーを南北に設定して断面観察を行った。その結果、西側に設定したトレーナーでは、III層暗灰色砂層の下に、IV層黒色シルト層、V層暗褐色シルト層、VI層黒褐色シルト層、VII層暗褐色シルト層の堆積が認められた。IV層黒色シルト層中からは太宰府編年のIV類白磁碗の半完形品が検出され、V層暗褐色シルト層上面ではビット群などの遺構が検出された。なお、IV層黒色シルト層はB区の北側、すなわちすでに工事が進行中の範囲にまで延びていることが確認できた。これらの結果に基づき、県教委ではB区約200m²およびさらに北側の包含層残存地約150m²（以下C区）の計350m²について全面調査の必要性を認め、大学との協議を行った。

協議の結果、工期の関係上A区の調査期間20日間の期限内に調査を終了することを前提として、約350m²について全面調査を行うことになった。

調査の結果、B区、C区ではIV層黒色シルト層上面で近世に属するロストルをもつ窯跡が、またV層暗褐色シルト層上面で柱穴群が検出された。

2. 層序

1984年度の調査から、当該調査地点の基本的な層序は、上層よりI層近代以降の盛土層、II層淡青灰色砂層、III層暗黄色砂層、IV層シルト混じり黒褐色砂層、V層小砾混じり黄褐色砂層の順に堆積していることが確認されている。

IV層シルト混じり黒褐色砂層中には多量の瓦器、土器、須恵器、貿易陶磁などの遺物が含まれ、下層のV層上面で建物跡、石組遺構などの遺構が検出されている。

このため、今回の調査ではIV層上面までを重機によって掘削し、以下は手掘りによることを前提として調査を実施した。なお、重機による掘削は工期の都合上、調査開始に先行してすでに行われていた。

第2節 遺構

前述したように、今回の調査で検出された遺構は調査面積に比べて非常に希薄であるが、以下主な遺構について概要を述べる。

(1) 柱穴（図版7）

図版7で示したものは、C地区西側で、今回の調査では比較的まとまって検出された柱穴群である。柱穴内からは土師器皿、須恵器碗、瓦器碗などが出土しており、これらの遺物から12世紀後半～13世紀前半代の柱穴群と考えられる。

柱穴の規模は径0.1～0.4m、深さは最も深いもので、確認面から0.7mを測る。

(2) 溝（図版8）

石組溝（SD1001）

A区のはば中央部で検出された南北方向に12mにわたって伸びる溝である。南側は調査区外に伸びるが、北側は途中で途切れる形となっている。規模は幅1.3～1.5m、深さは確認面から0.25～0.3mを測る。溝の東肩部には長さ0.1～0.4mの自然石を配している。所属時期は上層の包含層中の遺物及び溝内から僅かに出土した土師器片、須恵器片などから判断して13世紀前半～後半代と考えられる。

(3) 土坑（図版6）

SK1023

A区のはば中央で検出された楕円形状を呈する土坑である。西側は擾乱坑によって切られており、長軸約4m、短軸約3.1m、深さは確認面から約0.8mを測る。上層からの擾乱坑の可能性が高いが、埋土中から土師器皿片、須恵器碗片、瓦器碗片などが僅かに出土しているため、ここでは土坑として報告する。

(4) 近世窯状遺構（図版9）

C区の南西部で検出されたものである。長軸を南北方向にとり、規模は長軸約3.5m、短軸1.8mの比較的小規模な窯状遺構である。床面は中央部が破壊されているが、北側、南側は比較的良好に遺存している。また、南側ではロストルが一部遺存していた。床面から、近世後半に属する施釉陶器蓋などが検出されており、近世後半の陶器窯の可能性が考えらえるが、遺物の出土量は極めて少ない。

第3節 遺物

1. 土器・陶磁器

(1) 中世の土器・陶磁器

a 土師器（図版10）

土師器には、皿・鍋のほか、器種不明の底部がある。

皿

皿には、ロクロ使用のものとロクロ未使用のものがあり、大・小の規格がある。

ロクロ使用の皿（3005・3006）は小型品のみで、比較的深身の体部を持ち、口縁端部が肥厚しながら丸く納まり、糸切り底である。形態等の特徴から12世紀後半～13世紀前半の所産と考えられる。

ロクロ未使用の皿には、大型品と小型品の両者があり、形態的には、内縁気味の体部が底部から立ち上がり口縁部が外反するもの（3002）と、底部から内縁気味に体部が立ち上がり口縁部端部に面を持つもの（3007）、内縁気味の体部が底部から立ち上がり面を持つ口縁部端部がつまみ上げ気味に納まるもの（3004）、直線または外反気味の体部が底部から屈曲して立ち上がり口縁部端部が丸く納まるもの（3001・3011）、

底部から比較的短い体部が立ち上がりそのまま口縁部にいたるもの（3003・3010）とがある。口縁端部がつまみ上げ気味に納まる皿は大型品であるが、それ以外はいずれも小型品である。成形・整形・調整技法は、いずれも底部外面に成形時の指オサエ痕が確認でき、底部外面のナデ調整の後に口縁部内外面がヨコナデ調整され、調整の最終段階で底部内面がナデ調整される。

形態等の特徴から、口縁部が外反する皿は12世紀前半の所産、口縁部端部に面を持つ皿は12世紀後半の所産、口縁部端部がつまみ上げ気味に納まる皿は13世紀代の所産、口縁部端部が丸く納まる皿は14世紀前半の所産と考えられる。

鍋

鍋（3016）は、やや内擣気味に立ち上がる体部から外反気味に外傾する口縁部を持ち、3足を持つ可能性がある。調整技法は、内面の体部から口縁部にかけて横方向の刷毛目調整、体部外面は縱方向の刷毛目調整が施され、その後口縁部内外面はヨコナデ調整される。

形態等の特徴から、12世紀後半～13世紀前半の所産と考えられる。なお、3017は、3足鍋の脚部で、ナデによる面取りがされており、3016と同時期の所産と考えられる。

その他

器種不明の底部（3009・3014）は、底部糸切りで、3014の体部外面はナデ調整されている。

b 黒色土器（図版10 3012・3013）

3912・3013はいずれも黒色土器碗である。粘土紐巻き上げ成形の後、ヨコナデ調整を施し、内面にはミガキにより暗文を施す。3012・3013とも外面の体部と口縁部の界に1段の段をもつが、2は1に比べてやや不明瞭である。底部を欠くため詳細は不明であるが、11世紀後半代のものであろう。

c 須恵器（図版10 3015）

3015は須恵器碗の底部である。平底高台で、底部内面は円形にやや窪み、高台の側面は未調整である。東播系須恵器の神出窯産と考えられ、12世紀後半代の時期が与えられる。

d 緑釉陶器（図版10 3018）

3018は内外面に鉛釉を施釉し、黄緑色に発色する軟質の緑釉陶器の椀もしくは皿である。

e 白磁（図版10 3019・3021・3022）

3019・3021・3022はいずれも白磁碗である。3019は口縁部が玉縁状に肥厚する。内外面とも施釉し灰白色に発色する。3021は幅の広い高台を浅く削り出し、内面の体部と底部の界に一段段をもつ。内面は透明釉を施釉し灰白色に発色する。外面は露胎である。3022は底部は幅の広い高台を浅く削り出し、体部は僅かに内擣して斜め上方に延びる。口縁部は玉縁状に肥厚する。内外面とも施釉し、灰白色に発色するが、外面の体部下半以下は露胎である。いずれも横田・森田分類の白磁碗IV類に相当し、12世紀前半～13世紀前半の時期が考えられる。

f 青磁（図版10 3020）

3020は青磁碗である。体部外面に線描きの細蓮弁文を施す。上田分類のB～IV類に相当し15世紀後半代のものと考えられる。

（2）近世・近代の土器・陶磁器

a 陶器（図版11 3030）

陶器には、堺・明石産のものがあり、器種には擂鉢がある。

堺・明石産の擂鉢については、底部の内外面に焼台の使用痕を残し、体部外面がヘラケズリ整形される

点を共通点とする一方で、体部内面の擂目は、堺産がいわゆる「ウールマーク」を持ち、明石産擂鉢が「放射状」を呈する点に差異があるとされてきた。しかし、明石にもいわゆる「ウールマーク」の製品が存在することから、両产地の分別は困難である（稻原 2000）ので、ここでは堺・明石産と一括して扱う。

擂鉢（3030）は、外間に凹線状の沈線を2条有する縁帯状の口縁部で、口縁部内面上半には形骸化した凸帯を持ち、口縁部内面がわずかにくぼむ。整形技法は、体部外面はケズリ整形されている。形態等の特徴から、18世紀中葉～19世紀前葉の所産と考えられる。

b 土製品（図版10 3029）

3039は鳥形の土製品である。型造り成形で、接合部をナテ調整する。彩色の朱色が僅かに残る。馬笛と考えられる。

c 瓦（図版11 3023～3027）

瓦には巴文軒丸瓦（3023）、唐草文軒平瓦（3024・3025）、平瓦（3026、3027）があり、いずれも焼瓦で近世後半のものと考えられる。

2. 石器・石製品

サヌカイト製石器、砥石等が出土している。

a 砥石（図版11）

S3002は、包含層中より出土した砥石である。下半を折損するが、全体に扁平な直方体状に整形されている。折れ面を除く5面に、研磨痕をとどめるが、使用面は面積の広い2面であろう。長さ72.5mm、幅49mm、厚さ21.5mm。

b 削器（図版11）

S3003は、包含層中より出土したサヌカイト製の削器である。大型の剥片を素材とし、その打面部剥離辺に、背面側から丁寧な二次加工を施して、刃角45°前後の、弧状の刃縁を形成している。素材剥片の末端側は、折れ面となっている。図上面には自然面をとどめる。長さ102mm、幅51.5mm、厚さ18mm、重量130.4g。

第4節 小結

今回の調査は、重機掘削を調査前に実施し、土層観察用のセクションが一部ないという条件で行われたため、A区と1984年度の調査区及び確認調査後実施した地区（B区・C区）との層位関係が事実上つかみえなかった。ただし隣接する地区であるにもかかわらず、A区とB区・C区との間には遺構面が約1mの比高差をもって存在するという結果を生じている。

このことについては、遺構面が南から北に向かって傾斜をもって高くなっているのか、あるいは途中で段をもっていたのか不明であるが、いずれの場合でも一連の遺構面であったことは確實である。

しかし、調査区の東西、南北にわたるセクションが設定されていない以上、これを立証することは困難である。

また、遺物包含層が遺跡の南端と北端で検出され、中央では検出されないこと、遺構の広がりも同様であること、調査区東側では遺構面を形成する黄褐色砂層にかわって、花崗岩バイラン土の堆積が見られることなど不明な点が多い。

また、僅かに出土した遺物からは、時期別には福原京に先行すると考えられる11世紀後半～12世紀前半

代の土師器、須恵器、黒色土器、福原京の時期にほぼ該当すると考えられる12世紀後半代の土師器、瓦器、貿易陶磁、中世後半の14～15世紀代の貿易陶磁、近世後半の瓦、陶磁器などが検出され、それぞれの時期になんらかの形で土地利用がなされたことが窺われる。しかし、これらはいずれも、重機掘削後の遺構面直上で検出されているため、その出土層位は確認できていない。

注

- 1 横田賢次郎・森田勉 1978 「太宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』 4
- 2 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』 No.2 日本貿易陶磁研究会
- 3 福原昭嘉 2000 「明石撻鉢の編年について」『近世の実年代資料』 第12回関西近世考古学研究会資料集

第4章 1987年度の調査

第1節 調査の概要

1987(平成4)年度の調査は、福利厚生施設の建設に伴い、1987年7月22日～8月30日、および10月12日～16日に実施した。調査区は医学部図書館の南側にあたり、調査面積は1203m²である。

調査対象地には、かつて看護学校寄宿舎が設置されており、地中埋設管等が存在した。このため調査区はA～Dの4地区に分かれている。調査はまず重機により盛土・旧表土を除去する作業から着手した。複数の遺構面の存在が予測されたため、引き続いて調査区周辺に側溝を掘り下げ、断面精査により堆積と遺構面の確認を実施し、その後人力により、遺構面の検出に努めた。

調査着手時、調査区付近は平坦な地形となっていたが、これは旧地形を、第2次世界戦後に盛土で覆った結果である。遺構面には、近代以降の擾乱が多く見られた。

調査の記録は、国土座標を基準とした平面図の作成を行ったほか、航空写真的撮影を実施した。

第2節 遺構

A地区の遺構

1. 第1面(図版13)

第1面で検出されたのは、石垣および溝である。いずれも近世後半期以降に設営されたものと考えられる(図示されている井戸SE01は、第2面に相当する)。

(1) 石垣(図版14)

石垣は、調査区南東部に位置し概ね東西方向に延びる。延長約9.2mを、調査区内で検出することができた。溝状の掘り込み内に、多様な大きさの礫を用いて構築されたもので、相当程度破壊を受けており、最大でも3段、50cm程度が遺存していたのみである。石垣南側が、北側に対し高まりを見せ、さらに、石垣西端で石垣を構築している溝が、南に向かってほぼ直角に屈折することから、屋敷地の外周に構築された石垣であったものと思われる。石垣北側は整地層となっており、破壊された石垣の礫とともに、中世の土器類が多数出土した。

2. 第2面(図版13)

第2面では、井戸(SE01)・柱穴および溜池が検出されている。遺構は、鎌倉時代～室町時代に属するものであるが、溜池は江戸時代に開削されたものである。

(1) 溝(図版15)

溝は3条が検出された。いずれも南北方向に延びており、幅は50cm前後を測る。室町時代に属する。

(2) 井戸(図版16)

SE01

SE01は、石垣遺構の西に位置する。直径1m、検出面からの深さ約1.7mを測る、素掘りの井戸である。井戸の周辺には、上屋の存在を示すと思われる柱穴5基が検出されている。鎌倉時代に属するものと思われる。

(3) 溜池

SE01を削平して設けられている。江戸時代に開削されたものである。

3. 第3面

第3面では、調査区中央部を、南北に横断する溝が検出され、その東側で土坑・井戸・溝が、谷内とその西側で、柱穴が検出された。いずれも平安時代末～鎌倉時代に属する。

(1) 溝

溝は、調査区東部に集中する。いずれも東西方向に延びるが、極めて近接し、また重複する状況を見せる状況からは、企画性は看取されない。SD10より、瓦器甕が出土している。

(2) 土坑（図版16）

合計8基が検出された。土坑の一部は、底面が平坦で長方形状を呈することから、墓と推定される。

SK02 長径1.3m、短径1.1m、深さ0.25mを測る、不整長方形を呈する土坑である。土坑底面はほぼ平坦で、埋土中より瓦器甕・土師器皿が埋設された状況で出土しているため、墓であった可能性が高い。

SK03 長径1.1m、短径0.9m、深さ0.2mを測る、歪んだ梢円形を呈する土坑である。埋土中より土師器皿が出土している。

SK05 旧河道底に掘り込まれた土坑で、調査区内では全体を検出できなかったため、形状は不明である。埋土中より黒色土器が出土している。

(3) 井戸

SE05 直径約1.6m、検出面からの深さ約2.0mを測る、索掘りの井戸である。埋土中より、瓦器甕・土師器皿等が出土している。

B・C地区的遺構

B・C地区は隣接しており、遺構も連続するものが見られることから、一括して記載する。

1. 第1面（図版18）

近世水田面と畦が検出された。耕地を区画する大畦は、調査区東部に位置し、南北方向に延びている。その東側に沿って溝が設けられている。畠は東西方向に延び、幅は50～70cm程度を測る。畠は裏作の畑作時のものと推定される。

2. 第2面（図版18）

第2面は、中世の水田面である。南北方向の鶴跡と足跡が検出されたほか、溝（SD03・04・06）が検出されている。

(1) 溝

SD03・04 調査区東部で検出された、平行して延びる溝である。SD04には、石垣が設けられている。

SD05 調査区中央部に位置する、一群の溝の総称である。幅20cm～70cmの溝が南北に延びており、その状況から耕作に伴う鋤溝と考えられる。

SD06 調査区西部に位置する。最大幅70cmを測り、直線的に南北に延びている。SD06の縁に沿って、足跡が検出されている。

3. 第3面（図版19）

第3面は、平安時代末～鎌倉時代に相当する。柱穴および土坑1基が検出された。

(1) 柱穴

柱穴は調査区南西部に分布しているが、分布状況は散漫であり、建物跡等を復元することはできなかっ

た。

(2) 土坑

SK01 調査区西端に位置する。直径50cmほどの円形土坑である。

4. 第4面

第4面では、溝・柱穴が検出された。

(1) 柱穴

柱穴は、調査区全域に散漫な分布を見せ、建物跡を復元することはできなかった。

(2) 溝

SD16 調査区東端に位置し、南北方向に延びる。最大幅約1m、深さ50cmを測る。

SD17 調査区西端に位置し、東西方向に延びる。最大幅約1mを測る。

D地区の遺構

D地区の東半部は、大規模な搅乱のために遺構はほとんど認められなかった。遺構のほとんどは西半部で検出されたものである。

1. 第1面(図版20)

近世の水田面で、B・C地区の第1面に相当する。東西方向の溝(SD01・02)が検出されている。いずれも幅70cm前後を測る溝である。

2. 第2面(図版21)

やはり水田面である。東西方向の歓が4条検出された。歓は幅40cm前後を測り、最大で3mほどが認められた。水田面上に洪水砂が被覆していたため、遺存状況は良好である。

3. 第3面(図版21)

調査区北西部で、近接して平行に延びる溝2条が検出された。水田を区画する溝と推定される。

4. 第4面(図版22)

やはり耕作面である。南北方向に重複しつつ延びる鉢跡が検出された。

5. 第5面(図版22)

調査区南東部で、散漫に分布する柱穴5基、調査区中央部で、平行して南北に延びる溝3条が検出された。搅乱の影響で、遺構の状況が劣悪なため、建物跡の全容は明らかではない。

(1) 柱穴

いずれも直径20cm前後を測る、小型の柱穴である。建物跡または柵に伴うものであろうか。

(2) 溝(SD05・06・07)

それぞれ、延長3.5m～9mほどが遺存していた。ほぼ平行して南北方向に延びることから、やはり耕作関連施構かと推定される。鎌倉～室町時代に相当する面と推定している。

第3節 遺物

1. 土器・陶磁器

(1) 古代の土器

a 土師器(図版23)

土師器には壺(4013)がある。口縁部は頸部から緩やかに外反し、口縁部端部は尖り気味に納まる。成

形・整形・調整技法は、タタキ成形の後、体部内面に刷毛目調整が施され、調整の最終段階で口縁部内外面はヨコナデ調整される。なお、頸部内面には、粘土紐積み上げ時の指オサエ痕が残る。

(2) 中世の土器・陶磁器

a 土師器（図版23）

土師器には、皿・椀・鍋・羽釜がある。

皿

皿は、ロクロ未使用のもののみで、大・小の規格がある。

ロクロ未使用の皿には、大型品と小型品の両者があり、形態的には、内彎気味の体部が底部から立ち上がり口縁部が外反するもの（4048）と、底部から内彎気味に体部が立ち上がり口縁部端部に面を持つもの、内彎気味に体部が底部から立ち上がり面を持つ口縁部端部がつまみ上げ気味に納まるもの、底部から比較的短い体部が立ち上がりそのまま口縁部にいたるもの（4028・4023・4044）とがある。

規格は、口縁部が外反する皿は大型品のみであるが、口縁部端部に面を持つ皿には大型品（4013）と小型品（4045）とがあり、同様に口縁部端部がつまみ上げ気味に納まる皿にも大型品（4046・4047）と小型品（4029・4030・4040・4041）とがある。なお、体部の立ち上がりの短い皿は小型品のみである。

成形・整形・調整技法は、いずれも底部外面に成形時の指オサエ痕が確認でき、底部外面のナデ調整の後に口縁部内外面がヨコナデ調整され、調整の最終段階で底部内面がナデ調整される。

形態等の特徴から、口縁部が外反する皿は12世紀前半の所産、口縁部端部に面を持つ皿は12世紀後半の所産、口縁部端部がつまみ上げ気味に納まる皿は13世紀代の所産と考えられる。

椀

椀（4049）は、いわゆる「吉備系土師器椀」と呼称されるもので、底部から内彎気味の体部が外方に立ち上がり、口縁部端部は尖り気味に納まり、端面台形を呈する貼付高台を持つ。成形・整形・調整技法は、ロクロ成形の後、底部内面にナデ調整が施され、底部外面は指オサエ痕を消すようにナデ調整されている。形態等の特徴から、12世紀後半～13世紀前半の所産と考えられる。

鍋

鍋には、内彎気味に立ち上がる体部を呈し、口縁部が「く」の字状に外反するもの（4001～4004）と外反気味に外傾するもの（4035）とがあり、共に3足が付く。

成形・整形・調整技法は、いずれも成形時の指オサエ痕が外面の体部から頸部にかけて確認でき、脚部の貼付の後に体部内外面及び口縁部内面は刷毛目調整され、その後体部上面上半はナデ調整が行われ、調整の最終段階で口縁部内外面にヨコナデ調整が施される。なお、4001・4003は、体部内面の刷毛目調整の後、頸部内面にはナデ調整が認められる。また、4005は3足の脚部である。

形態などの特徴から、いずれも12世紀後半～13世紀前半の所産と考えられる。

羽釜

羽釜には、内彎気味の体部から口縁部が内彎・内傾して立ち上がるものと内彎気味の体部から口縁部が屈曲して直線的に立ち上がるものとがある。

前者には、鋤部が比較的長く断面形状が台形を呈するするもの（4007・4008）と断面長方形の比較的短い鋤部をもつもの（4006・4009）とがあり、いずれも鋤部は貼付成形である。4007・4008の成形・整形・調整技法は、いずれも成形時の指オサエ痕が体部外面に確認でき、体部外面のナデ調整及び内面の体部から口縁部にかけての刷毛目調整の後、調整の最終段階で口縁部内外面にヨコナデ調整が施される。4006・

4009の成形・整形・調整技法は、タタキ成形の後、内面の体部から口縁部にかけて刷毛目調整が、体部外面は刷毛目調整及びナデ調整が施され、調整の最終段階で口縁部内外面はヨコナデ調整される。

後者は（4010）は、断面長方形を呈する比較的長い錫部を体部上位に持ち、体部の錫部から上方には条線が施されている。成形・整形・調整技法は、タタキ成形の後、内面の体部から口縁部にかけてと外面の錫部以下に刷毛目調整が行われ、調整の最終段階で内面の口縁部から外面の錫部までヨコナデ調整される。

形態及び成形技法等の特徴から、4010は13世紀代、4007・4008は13世紀後半～14世紀前半の所産と考えられる。また、4006・4009は共に14世紀前半の所産と考えられるが、錫部及び口縁部の形状の差異から4009が形式学的には若干先行し、4006は14世紀中葉まで存続する可能性がある。

b 瓦器（図版23 4038・4039・図版24 4024・4025・4026・4018・4015・4016・4017・4032・4033・4017・4032・4033・4014・図版25 4034・4019・4050）

瓦器碗は底部まで残るものを見ると、器高の低平化が進み、内面の圓線ミガキも疎らで、高台の断面形状はU字形を呈する尾上分類の和泉型瓦器碗III-3期～IV-1期相当のもの（4024・4018・4015・4016・4017・4033）と高台が消失したIV-3期相当のもの（4014・4034・4019）がある。前者は13世紀前半～中葉、後者は13世紀後半～14世紀初頭の時期が考えられる。

c 須恵器（図版23 4036・4037）

4036は須恵器甕である。頸部は直立、口縁部は外反し、端部は下方につまみ出す。体部外面には斜め方向の平行叩き目が残る。東播系須恵器で12世紀後半～13世紀前半代の時期が考えられる。

4037は須恵器鉢である。体部は直線的に斜め上方に伸び、口縁部は僅かに玉縁状に肥厚する。東播系魚住窯の製品で13世紀後半の時期が考えられる。

4039は椀である。平底で、高台は消失している。13世紀中葉～後半の時期が考えられる。

d 無釉陶器（図版24 4055・4056・図版25 4061）

4055は体部が直線的に立ち上がり、口縁部は斜め方向に切る無釉陶器擂鉢である。内面には6条1単位の捺目を施文する。備前焼III期の製品で14世紀代の時期が考えられる。4061は口縁部が上下に拡張して縁帯をもつもので、備前焼IV期の製品で15世紀代の時期が考えられる。

4056は口縁部が「N」字状を呈する常滑焼の甕で、13世紀後半代に比定される。

e 白磁（図版25 4070・4071・4072・4074・4075）

4070・4071・4072は口縁部が外反する碗である。内外面とも施釉し、4072は灰白色、4071は焼成がややあまく、胎土、色調ともやや黄色味を帯びる。4070はヘラ状工具で体部内面に草花文を施文する。いずれも横田・森田分類の白磁碗V類もしくは畠類に相当するもので、12世紀前半～13世紀前半の時期が考えられる。

4074は口縁部が玉縁状を呈するIV類碗である。4075是比较的幅の広い高台を削り出し、底部内面の釉を蛇ノ目状にかきとする畠類碗である。いずれも12世紀前半～13世紀前半代の所産である。

f 青磁（図版24 4062・4063・図版25 4066・4069・4067・4076・4064・4065）

4063は外面に御描文、内面に御描雷光文を施文する同安窯系青磁で12世紀後半～13世紀前半の時期が考えられる

4066は口縁部が僅かに外反し端部は小さな玉縁状に整形する。青磁の碗もしくは皿であろう。4069・4067・4076は青磁の細片でいずれも龍泉窯系青磁と考えられる。4064は外面に鎌蓮弁文を、4068は鎌のない広形蓮弁文を施す。また、4065は外面に線彫の細蓮弁文を施す。いずれも龍泉窯系青磁である。所蔵時

期は4069・4067・4076・4064は13世紀前半～後半、4068は14世紀代、4065は15世紀後半にそれぞれ比定できる。

2 石器・石製品

本年度の調査では、サヌカイト製石器および砂岩・泥岩製の砥石類が出土している。前者はいずれも原位置を遺棄した資料であり、時期の限定は困難であるが、縄文時代～弥生時代に、後者は中世以降に属するものである。

(1) 石鎌 (図版25)

S4004は、旧耕土直下より出土した、サヌカイト製凹基無茎式石鎌である。全体に、ほぼ正三角形状を呈し、基部の抉りは、器長の1/5程度である。脚端部はまるみをおびる。長さ15mm、幅13mm、厚さ2mm、重量0.4g。

S4005は、第3遺構面検出作業時に出土した、サヌカイト製凹基無茎式石鎌である。均整のとれた二等辺三角形を呈し、基部の抉りはごく浅い。脚端部は鋭利に仕上げられている。長さ26mm、幅16mm、厚さ4mm、重量1.2g。

(2) 不明石器 (図版25)

S4006は、第2遺構面直上の砂層より出土したサヌカイト製石器である。剥片の一部に急斜度の二次加工を施しており、削器かとも思われるが、図左面の右側縁は著しく摩耗しており、本石器の使用方法として考慮せざるをえない。

(3) 砥石 (図版23)

S4001は、柱穴109より出土した砥石である。直方体状に整形されており、3面に研磨痕が観察されるが、研磨面の変形度は小さく、使用が進行しない状況で廃棄されたものであろう。長さ75mm、幅44.5mm、厚さ42.5mm。

S4002は、A地区第1面の、石垣北側より出土した砥石である。粗粒の砂岩を用いており、いわゆる荒砥に相当するものであろう。直方体状に整形されており、3面に研磨面をとどめる。長さ106mm、幅35mm、厚さ36mm。

S4003も、A地区第1面の、石垣北側より出土した砥石である。砂岩を用い、礫の原形をとどめたまま1面を研磨面としている。長さ160mm、幅80mm、厚さ56mm。

第4節 小結

今回の調査で検出された遺構は、基本的に3面に分けられる。第1面が江戸時代、第2面が鎌倉時代～室町時代に、第3面が平安時代末～鎌倉時代に相当する。D地区のみで、5面が検出されているが、最下層の第5面が、平安時代末～鎌倉時代に相当し、上位の第1面が近世末に相当しており、この間の3面は中世末～近世の間に形成されたものである。各遺構面の状況から、今回の調査区内では長期間にわたって、耕地としての土地利用が主体であり、建物等が設けられた痕跡は薄弱であると判断できる。

注

- 尾上実・森島康雄・近江俊秀 1995 「瓦器腕」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
- 横田賢次郎・森田勉 1978 「太宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4

第5章 1992年度の調査

第1節 調査の概要

1992(平成4)年度の調査は、神戸大学医学部臨床研究棟の建設に伴い、1992年7月7日～10月30日に実施した。調査区は医学部図書館の南側にあたり、調査面積は1251m²である。

調査はまず重機により盛土・旧表土を除去する作業から着手した。複数の遺構面の存在が予測されたため、引き続いて調査区周辺に側溝を掘り下げ、断面精査により堆積と遺構面の確認を実施し、その後人労により、遺構面の検出に努めた。遺構面には、多くの埋設管、廐棄坑等の搅乱が見られたが、全体としては比較的良好な遺存状況を示しており、一連の神戸大学医学部附属病院構内の調査で、最も遺構密度の高い状況を調査することができた。

調査着手時、調査区付近は平坦な地形となっていたが、これは棚田状の旧地形を、第2次世界戦後に厚い盛土で覆った結果である。調査区南東部約1/4程は、戦前に建築された建物の基礎によって遺構が破壊されており、遺物包含層も全く遺存していなかった。他の範囲では、遺物包含層およびその後に営まれた水田土壤も、盛土により保護された状況で遺存しており、遺構面3面を検出することができた。

第1面は中世後半期～近世（一部近代）に、第2・3面は中世前半期に相当する。調査地における堆積物は砂を主体としており、付近をしばしば洪水が襲ったことを示している。遺構面のうち第1面は12・19層上面、第2面は17層上面、最終検出面の第3面は21層上面に相当する。21層上面は緩やかな傾斜を示しており、調査区西側が高まる。第2面は、やや低い東側が平坦化する過程で形成されているため、面として識別可能なのは調査区東半の一部である。

調査の記録は、国土座標を基準とした平面図の作成を中心とし、遺構面の重複を考慮して、2回にわたり航空写真の撮影を実施した。また、調査途上で縄文時代の石器が出土したため、下層における遺跡の有無を確認することと、本地点における地形形成過程を明らかにするため、調査区中央部に東西および南北方向のトレンチ2本を設け、第3遺構検出面から-2mまで調査をおこなった。その結果、下層は完新世の堆積物であり、埋没河道とこれを覆う古土壤が検出されたが、遺構面・遺物は検出されなかった。なおトレンチ地層断面については、高橋学氏（現立命館大学教授）に観察をおこなっていただき、ご教示を得た。

第2節 遺構

1. 第1面の遺構（図版26）

第1面では、大別して3群の遺構群が検出された。

第1群は、等間隔に並んだ南北方向に延びる溝5条と、これと同方位を示す小規模な溝群である。遺構は調査区東半分に位置し、いずれも洪水砂によって同時に埋没している。洪水砂中より、18世紀後半以降の磁器碗類破片が出土している。

第2群は、溝埋没後に構築された小規模な掘立柱建物跡2棟と、これと同一方位を示す溝3条である。主要な遺構は、調査区中央から東部に分布するが、他に建物跡に復原できなかった多数の柱穴があつて、調査区の全域にわたって散漫な分布を示している。

第3群は調査区西端で検出された、壺破片を埋設する土坑である。16世紀代に属する遺構で、第1面で

は最も古い造構と思われる。

また調査区西端では、近代建築物の礎敷き基礎とともに水琴窟が検出されたため、これもあわせて調査した。

(1) 据立柱建物跡

SB01・02

SB01および02は、ともに1間×2間の東西棟である。柱間がともに2m前後を測り、同一の規模をもつことと、建物跡の縁辺が掘えられていること、2棟の間が、柱間の2間に等しい間隔であること等から、同時期に企画性をもって建築されたと判断できる。

柱穴の一部が、溝埋没後にその埋土上面から掘り込まれており、溝群以降に建築されたものと判断される。柱穴内からの出土遺物は僅少であるが、SB01の柱穴内より、鉄釘がまとまって出土している。

(2) 構

SB01・02の西側に、3条の構が検出された。SB01・02の長軸方向に対して、ほぼ正しく直交方向へ延びることから、据立柱建物跡と同時期に属する可能性が高い。

SA01

SA01は、SB02の西、約1mに位置する。6間分の柱穴が検出されているが、南北ともにさらに伸びていたものと思われる。柱間は1.8m前後を測り、よく揃っている。

SA02

SA02は、SA01の西17.6mに位置している。9間分の柱穴が検出されたが、やはりさらに延長部があるものと思われる。柱間は2.2~2.5mを測り、SA01に比べ、ややばらつきが見られる。

SA03

SA03は、SA02の西2~22mに位置している。7間分の柱穴が検出されており、柱間は1.8~2.1mを測る。柱間にややばらつきがあるように見えるが、実際には1.8m前後を測るもののが多数を占める。

(3) 溝

SD1~SD5

調査区中央から東部にかけて、概ね等間隔に設けられた南北方向に伸びる溝5条と、これに直交する溝1条、およびこれらと方位を同じくし、不均等な間隔で分布する小溝が検出されている。いずれも黄褐色~灰色を呈する粗砂により充填されていることから、洪水による同時埋没と判断された。溝内からは近世磁器碗の破片が出土しており、溝の埋没時期を判断できる。耕作の歴に伴う溝、および耕作痕（鋤痕）を示すものと思われる。

(4) 土坑（図版31）

SK01

丹波焼の甕（5110）を埋設した土坑で、調査区の西端に位置している。掘方はやや歪んだ円形を呈し、直径は75cm前後を測る。底面は椀底状を示し、検出面からの深度は32cm前後である。土坑内から、丹波焼甕の破片1個体分とともに、直径10~30cmの礎敷点が出土した。断面観察から、甕は破碎された状態で、甕とともに一括して埋められたものと判断された。

(5) 柱穴

調査区全域にわたり、散漫な分布を示す。直径20cm未溝~60cmに達するものまで規模も多様で、据立柱建物跡ないしは構に伴うものであろうが、柱穴相互に有意な関係を見いだすことができなかつた。

(6) 水琴窟（図版31）

調査区北西隅に位置する。近代のものと思われる、L字形に屈折する建築物の礎敷基礎の間に、底部に穿孔した人谷焼（？）の壺1点が、倒立状態で埋設されていた。内部の孔直下には、平瓦1枚が凸面を上に向けて置かれて、落下する水が当たる構造となっていた。

2. 第2面の遺構（図版29）

第2面は、調査区東部のみ検出された。これは調査地内の旧地形が、東側ほど低く堆積物が厚いため、結果的に調査区西部に比べて遺構面が細分されたのであって、所属時期は第3面の一部遺構に近い可能性がある。2棟の掘立柱建物跡が識別されたほか、多数の柱穴が検出されたが、建物跡を復原するには至らなかった。

(1) 掘立柱建物跡（図版29）

SB03・04

調査区東端で、2棟が検出された。いずれも調査区外へ延びているため、全体の規模は不明であるが、SB-3は、桁行2間である。柱穴には重複が認められ、SB-3の柱穴がSB-4の柱穴を切っている。柱穴の規模は、ともに40~60cmを測る。柱穴内からの出土遺物は僅少で、時期を特定できない。

(2) 柱穴

調査区東半で、多数の柱穴が検出されているが、建物跡を復原するには至らなかった。

3. 第3面の遺構（図版30）

第3面では、ほぼ調査区全域から掘立柱建物跡7棟・土坑・池状遺構などが検出された。建物跡の一部は少なくとも2時期の重複を示しており、出土遺物から、概ね13~14世紀代に属するものと思われる。池状遺構は掘立柱建物跡の一部に先行して掘削されたもので、その人为的埋没後に建物跡が建設されている。

調査区北西隅で検出された土坑（SK02）は、8世紀代後半に属し、今回調査された中では最も古い遺構である。また、第3面調査途中、包含層および検出面付近から、縄文時代に相当すると思われる、多数の石器が出土している。

奈良時代の遺構

(1) 土坑（SK02 図版31）

調査区北西隅に位置する。半ば以上が調査区外にあったが、隣接地に神戸大学医学部図書館があり、今後の調査が期待できないことから、可能な限り調査区壁面から傾方への掘削・調査を実施し、大半の遺物を回収するとともに、遺構の規模を把握することができた。

土坑は、概ね2.2m×2.8mを測る隅円方形を呈していたものと思われる。土坑内はややシルト質をおびた砂で充填されており、上下2面で、遺物が集中的に廃棄されたと思われる面が認められた。断面の検討から、人为的に埋められたものと思われる。

土坑内からは、土師器杯・盤・皿・土鍤・壺・製塙土器、須恵器杯・転用硯・短頸壺・四耳壺・壺等が出土している。

平安～鎌倉時代の遺構

(1) 掘立柱建物跡

SB05 (図版32)

2間（5.2m）×3間（5.7m）の、東西棟総柱建物跡である。梁行と桁行で柱間が異なり、梁行では2.4～2.8m、桁行では1.8～2.0mを測る。柱穴は直径25～35cmの円形を呈し、検出面からの深さは15～25cmを測る。

SB06 (図版32)

1間（2.0m）×3間（5.9m）が検出されたが、建物跡の南半が破壊されているため、規模は確定できない。東西棟総柱建物跡である。柱間はいずれもほぼ2.0mを測り、規格性が高い。柱穴は直径25～30cmの円形を呈し、検出面からの深さは15～30cmを測る。

SB07 (図版33)

3間（6.2m）×4間（8.0m）の規模をもつ、今回調査されたうちで最大の建物跡である。建物跡中央の柱穴群が、埋設管のため破壊されていたほか、一部の柱穴が認められなかったが、東西棟総柱建物跡と考えてよからう。柱間は、2.0～2.2mを測る。柱穴は直径30～長径60cmの円形ないしは梢円形を呈し、検出面からの深さは20～50cmを測る。

SB08・09 (図版34)

ともに2間×3間が検出されたが、建物跡の東および南側が調査区外にあたるため、さらに規模が大きいものか否かを判断することができなかった。また建物跡中央部に重複して搅乱坑があるため、柱穴が破壊されていたが、ほぼ同位置で重複する東西棟総柱建物跡である。

SB08では、梁行の柱間が1.8m、桁行の柱が2.0前後を測るのに対し、SB09では、梁行・桁行ともに1.8mと、ややことなった規格をみせる。柱穴は直径30～50cmの円形を呈し、検出面からの深さは25～35cmを測る。

SB10 (図版35)

遺構の南側が調査区外に延びるため、規模は確定できない。1間（6.2m）×3間（8.0m）までが検出されており、東西棟総柱建物跡と考えてよからう。柱間は、梁行で1.8m、桁行で2.0m前後を測る。柱穴は直径35～42cm前後の円形を呈し、検出面からの深さは15～30cmを測る。

SB11 (図版35)

SB07の東に隣接する、2間（4.0m）×3間（6.3m）の、東西棟総柱建物跡である。中央の柱穴が重複しているため、部分的な修築がおこなわれた可能性が考慮される。柱間は、梁行で1.9m～2.2m、桁行で1.8～2.0m前後を測るが、西端の桁行のみが2.5～2.6mと広くなっている。柱穴は直径40cm前後の円形を呈し、検出面からの深さは20～30cmを測る。

(2) 柱穴

掘立柱建物跡以外にも多数の柱穴が検出され、遺物を出土したものも見られたが、建物跡を復原することはできなかった。

(3) 土坑

規模・形態を異にする、十数基の土坑が検出されている。特に調査区北西部付近に、集中して分布する一群が見られるが、出土遺物に乏しく、機能等について論ずることはできない。

(3) 池状遺構（大型土坑 図版31）

調査区や西寄りに位置する、不整長方形を呈する大型土坑である。最大幅4.15m、残存長5.25m、深さ0.5mを測る。底面はほぼ平坦に仕上げられているが、土坑北側の底面中央に、直径約1.4mを測り一部に段

をもつ不整円形の掘りこみが見られた。遺構の規模から、調査時点で「池状遺構」と呼称したが、実体は大型の廐棄土坑であり、荒地の池ではない。西端を現代の埋設管設置時に破壊されていたが、その大部分を調査することができた。

土坑内は細砂を主体とする堆積で充填されていたが、遺物・礫の出土状況から、少なくともその上半の一部は人為的に埋められたものと思われる。

土坑内の東半には、拳大～直径60cmを超える花崗岩礫が多量に投入されており、これとともに土師器・瓦器などの遺物が多数出土している。花崗岩礫の中には、火熱のため赤褐色に変色したもの、破碎された状況を示すものが見られた。大型礫の一部は、平坦な面をもつことから、礫石として用いられたものと推定される。

遺構埋土中には、炭粒子が多数認められたが、遺構内の焚火を示す状況は認められず、火熱を受けたものが一括して廐棄された状況と判断された。

第3節 遺物

1. 土器・土製品・石製品（図版37～44 写真図版25～33）

(1) 古代の土器

8世紀後半代に属する遺物が、SK02から出土している。(5001～5053)

a 土師器

椀

5001～5003は土師器の丸底の椀である。5001は僅かに内擗する口縁部を持ち、端部外面には1条の沈線を施す。外内面は共にナデで、底部付近には指頭圧痕が残る。5002はやや外反する口縁部を持つ。体部外面はナデ、口縁部はヨコナデで、底部外面には指頭圧痕が残る。5003は比較的大型のものである。僅かに外反する口縁部を持ち、端部内面には1条の沈線を施す。体部外面は板ナデ、内面はヘラミガキで、口縁部付近はヨコナデである。

皿

5004～5006は土師器の皿である。5004はやや屈曲気味に外反する口縁部を持ち、端部内面には1条の沈線を施す。体部外内面はナデ、口縁部はヨコナデで、底部外面には指頭圧痕が残る。5005は僅かに肥厚しながら立ち上がる口縁部を持ち、端部外内面には其々1条の沈線を施す。体部外内面はナデで、口縁部はヨコナデである。5006は僅かに肥厚しながら立ち上がる口縁部を持ち、端部内面には1条の沈線を施す。体部外内面はナデで、口縁部はヨコナデである。

5009は比較的大型の土師器の皿である。外傾する体部を呈し、底部に低い高台を持つ。僅かに外反する口縁部を持ち、丸味を帯びた端部の内面には1条の浅い沈線を施す。体部内面にはヘラミガキの後に細かな斜行状及び不定方向の暗文を施す。体部外面はナデ及びヘラミガキで、口縁部はヨコナデである。本遺物は蓋とのセット関係が考えられるが、現況では確認していない。

壺

5007、5008は土師器の壺である。5007はやや屈曲気味に外反する口縁部を持ち、丸味を帯びた端部の内面には1条の沈線を施す。体部内面にはナデの後に渦巻き状及び斜行状の暗文を施す。体部外面はヘラケズリで、口縁部はヨコナデである。5008はやや屈曲気味に外反する口縁部を持ち、丸味を帯びた端部の内面には1条の沈線を施す。体部内面にはヘラミガキの後に変形気味の渦巻き状及び斜行状の暗文を施す。

体部外面は板ナデで、口縁部はヨコナデである。

5037は七飾器の壺である。形態は後述の須恵器壺Aに近似する。体部外内面はナデで、口縁部はヨコナデである。

鍋

5010、5011は土師器の鍋である。5010は残存する口縁部のみ図化した。5010はやや内壁気味に立ち上がる鉢状の体部を呈し、短く聞く分厚い口縁部を持つ。体部外面は上半部を縦方向、下半部を横方向のハケメで調整し、内面はナデで仕上げる。口縁部はヨコナデである。

土鉢

5012~5014は土鉢である。3点共に棒状の体部の両端に紐通し孔を横断させるもので、5012のみ完形である。

甕

5015~5023、5023、5026は土師器の甕である。5015はやや下膨の球形を呈する胴部に、緩い「く」の字状の口縁部を持つものである。端部は微妙につまみ上げる。胴部外面は縦方向のハケメを主体として、底部付近を横方向のハケメで仕上げる。胴部内面は横方向の板ナデで、口縁部は横方向のハケメの後ヨコナデである。5016は球形を呈する胴部の僅かに外反する「く」の字状口縁部を持つものである。端部はややつまみ上げる。胴部外面は縦方向のハケメを主体として、底部付近を横方向のハケメで仕上げる。胴部内面は板ナデで、口縁部はヨコナデである。5017は下半部が欠損するが球形を呈する胴部に屈曲の緩い「く」の字状口縁部を持つものである。端部は微妙につまみ上げる。胴部外面は下半部に横方向主体のハケメを施す。胴部内面も下半部を横方向のハケメで仕上げ、指頭圧痕が残る。口縁部はヨコナデである。5018は球形の胴部のみ図化した。外面は縦方向主体のハケメで、底部付近を横方向のハケメで仕上げる。内面はナデで、底部付近には指頭圧痕が残る。5019は小型のもので、球形に近い胴部の屈曲の緩い「く」の字状口縁部を持つものである。胴部外面は縦方向主体のハケメで、底部付近を横方向のハケメで仕上げる。胴部内面はナデで、粘土接合痕が明確に残る。口縁部はヨコナデである。5020はやや卵倒形に近い胴部に「く」の字状口縁部を持つものである。胴部外面は縦方向主体のハケメで仕上げ、内面は板ナデである。口縁部はヨコナデである。5021は下半部を欠損するが、やや下影れの球形を呈する胴部に僅かに外反する「く」の字状口縁部を持つものである。端部外面は強いナデにより1条の沈線を施す。胴部外面は縦方向主体のハケメで、胴部内面は横方向の板ナデで仕上げる。口縁部はヨコナデで仕上げるが、特に横方向のハケメが残る。5022は卵形状を呈する長胴のもので、強く外傾する「く」の字状口縁部を持つ。胴部外面は縦方向主体のハケメで、胴部内面はナデである。口縁部はヨコナデで仕上げるが、特に横方向のハケメが残る。5023は卵形状を呈する長胴のもので、強く外傾する「く」の字状口縁部を持つ。端部は強いヨコナデにより上下に拡張する。胴部外面は縦方向主体のハケメで、底部付近を横方向のハケメで仕上げる。胴部内面はナデである。口縁部はヨコナデで仕上げるが、特に横方向のハケメが残る。5025は球形の胴部に「く」の字状口縁部を持つものである。胴部外面は縦方向のハケメで、底部付近を横方向のハケメで仕上げる。胴部内面はナデであろう。口縁部はヨコナデで仕上げるが、特に横方向のハケメが残る。5026は球形の胴部に屈曲の緩い「く」の字状口縁部を持つものである。胴部上位の肩部には上方に内彎する耳状の把手を貼付する。胴部外面は縦方向主体のハケメで、上半部付近に横方向のハケメも施される。胴部内面はナデである。口縁部はヨコナデで仕上げるが、特に横方向のハケメが残る。

製塙土器

5027～5033は製塙土器である。その内5027から5029、5031、5032はやや内彌氣味に聞く鉢状のもので、ハケメ及びナデ等の器面調整を施すが、基本的には手捏ねであり、粘土接合痕も顯著に残る。5030は筒状の体部である。外面はナデで、内面は布目が残る。5033は筒状の体部で、口縁部付近で若干窄まる。外面はタタキの後にナデで、内面は横方向を主体とするハケメである。

器種不明の土器

5024は器種不明ながら、器台状を呈するものである。筒状の脚部に浅い皿状の体部が付く形に見て取れる。筒状の脚部には方形の透かしが付くよう、位置関係から3箇所の透かしに復元できる。皿状の体部の天部（内部）には謀と共に激しい二次焼成痕が残る。また、脚部と体部の境目には「コ」の字状の突帯を貼付する。外面は縱方向のハケメを主体とし、内面は板ナデだが粘土接合痕が顯著に残る。皿部及び突帯付近はヨコナデである。本遺物の用途については不明だが、皿の天部といった限定された部分のみ被熱しているため、焙烙あるいは火鉢のようなものを想定している。

b. 須恵器

坏

5034～5036は須恵器の坏で、底部に高台を持たない所謂坏Aと呼称するものである。3点共に短く外傾気味に立ち上がる体部に丸味を帯びた口縁端部を有するものあり、外内面を回転ナデ、底部をヘラ切りの後にナデで仕上げるものである。

5038～5042は須恵器の坏で、底部に高台を有する所謂坏Bと呼称するものである。その内5038～5041は比較的近似する形態を呈しており、前述の坏Aに高台を貼付したものである。体部外内面は回転ナデ、底部はヘラ切りの後にナデで仕上げる。5024は比較的大型のもので、体部はやや外反しながら立ち上がる。体部外内面は回転ナデ、底部付近外面を回転ヘラケズリで、底部はヘラ切りであろう。

5043～5047は須恵器の蓋で、坏Bとセットになるものである。5点共に浅い傘状の体部で、小さく屈曲する口縁端部を有し、やや扁平な宝珠ツマミを持つ。体部内面から口縁部付近は回転ナデ、体部外面を回転ヘラケズリで仕上げる。

短頸壺

5048～5050は須恵器の短頸壺である。5048は上位に最大径を持つ肩張りの体部から強く窄まり、短く直口の頸部を持つものである。口縁端部は内傾気味に面取りを施す。また、底部には低い高台を貼付する。体部外内面は回転ナデで、底部内面はナデで仕上げる。5049は上位に最大径を持つややひしゃげた球形の体部から強く窄まり、短く直口の頸部を持つものである。口縁端部は僅かに面取りを施す。また、底部には比較的高い高台を貼付する。体部外内面は回転ナデを主体として、下半部外面は回転ヘラケズリで仕上げる。5050は上半部のみを圓化した。肩張りの体部から強く窄まり、短く直口の頸部を持つものである。口縁端部はやや外傾気味に面取りを施す。外内面は回転ナデで仕上げる。

壺

5051は須恵器の壺である。平底で、体部は卵倒形を呈する。口縁部は強く窄まる頸部から大きくラッパ状に外反する。肩部には相対する位置に耳状の把手を持つ。体部は外内面共に回転ナデを主体とし、部分的に回転ヘラケズリで仕上げる。

甕

5052、5053は大型の甕である。5052は上半部のみの圓化である。肩張りの体部から強く窄まり、やや外反しながら短く聞く口縁部を持つ。胴部外面はタタキの後に5条程を数える平行カキメを施す。体部内面

には同心円のあて具痕が残る。口縁部は回転ナデである。5053は丸底で、体部は卵側形を呈する。口縁部は強く窄まる頸部から短く開く。体部は外面をタタキで、内面に同心円のあて具痕が残る。口縁部は回転ナデで、頸部付近には平行カキメを施す。

(2) 中世の土器・陶磁器

記載する遺物の大部分が、池状造構より出土したものである。以下、記載の便宜上、池状造構のみ一括して記述をおこなう。

池状造構出土の遺物（5054～5081）

a 土師器

皿

5054～5065は小皿である。基本的には手捏ねで、体部全体をナデ、口縁部をヨコナデで仕上げる。その内5054は底部中央を内へ窪ませる、所謂ヘソ皿を呈する。5055～5065は平底から短く立ち上がるものである。

5066～5071は前述の小皿よりもやや大きい、土師器の皿である。製作技法は小皿と同様で、全体に大ぶりになる分深くなる。

鍋

5075は鍋で、上位部分のみ圓化している。口縁部は屈曲の無い「く」の字状を呈し、端部は外側につまみ出して面をなす。胴部外面はタタキで仕上げ、煤の付着が顕著に見られる。胴部内面はナデで、口縁部はヨコナデである。

羽釜

5081は羽釜で、上位部分のみ圓化している。口縁部はほぼ直口し、端部にかけてやや肥厚する。口縁部付近には短い鈎を持つ。体部外面はタタキの後にナデ、内面はハケメの後にナデである。口縁部はヨコナデである。

b 須恵器

鉢

5072～5074は捏ね鉢である。5072は上半部のみの圓化である。体部は大きく笠状に開き、口縁部はやや上方に拡張して外端に面をなす。外内面は共に回転ナデである。5073も5072と同様の形態をなし、口縁端部は上下に拡張して面をなす。外内面は回転ナデである。5074も体部形態は同様である。口縁端部は上方に拡張して面をなす。また、口縁部は片口をなしている。体部外面から口縁部はナデで、体部内面は板ナデで仕上げる。

壺

5080は口縁部のみの圓化だが壺である。口縁部は短く大きく外反し、外端に面をなす。胴部外面には絞杉状のタタキを施し、内面はナデ、口縁部は回転ナデで仕上げる。

c 瓦質土器

5077は底部のみの圓化だが、壺であろう。外面には指頭圧痕が残り、底部付近にはケズリを施す。内面は継方向主体のハケメである。

d 陶器

5079は下半部を欠損するが備前焼の擂鉢である。碗状に立ち上がる体部で、口縁端部は僅かに拡張して

面をなす。外内面は回転ナデで仕上げ。内面にはオロシメを施す。

e 磁器

5078は口縁部のみの凶化だが、青磁綱である。僅かに外反しながら立ち上がる口縁部で、端部を丸くおさめる。外面には鎧蓮弁文を施す。

(3) 包含層出土の遺物

a 土師器

皿

5088~5090、5093、5094は土師器の小皿である。口縁部にかけて短く立ち上がる体部である。口縁部はヨコナデで仕上げ、体部は一部指圧痕が残るがナデで仕上げる。

5111は土師器の小皿である。体部は口縁部にかけて浅く短く立ち上がるものである。口縁部はヨコナデ、体部はナデで、底部には指圧痕が残る。

5112は土師器の中型の皿である。体部は口縁部にかけてやや開き気味に立ち上がるものである。口縁部はヨコナデ、体部外内面はナデで仕上げる。

5114、5115は土師器の中型の皿である。5114は口縁部にかけてやや開き気味に立ち上がり、口縁部付近でやや外傾する。口縁部は強いヨコナデ、体部はナデで仕上げる。5115は口縁部にかけてやや浅く立ち上がるものである。口縁部は丸くおさめるが、僅かにつまみ上げる。口縁部はヨコナデ、体部はナデで仕上げる。

5096~5098は土師器の皿で中型のものである。その内5097は口縁端部がつまみ上げる様な形態だが、製作技法等は小皿と同様である。

5113は土師器の小皿である。体部は口縁部にかけて短く立ち上がるものである。口縁部はヨコナデ、体部はナデで仕上げる。

5116は土師器の小皿である。体部は口縁部にかけて浅く短く立ち上がるものである。口縁部はヨコナデ、体部はナデである。

5117~5119は土師器の小皿である。5117、5118は口縁部にかけて短く立ち上がる体部を呈する。口縁部はヨコナデ、体部はナデで仕上げる。5119は底部中央に窪みを持つ所謂ヘソ皿である。

5121は土師器の中型の皿である。体部は口縁部にかけてやや開き気味に立ち上がるものである。口縁端部はやや肥厚しつつ丸くおさめる。口縁部はヨコナデ、体部外内面はナデで仕上げる。

5123は土師器の小皿である。体部は口縁部にかけて浅く立ち上がるもので、口縁部はやや肥厚する。口縁部はヨコナデ、体部はナデで仕上げる。

5120、5124は土師器の小皿である。体部は口縁部にかけて浅く短く立ち上がるもので、特に5124は非常に立ち上がりが浅い。口縁部はヨコナデ、体部はナデである。

5131は土師器の中型の皿である。体部はやや外傾気味に浅く立ち上がる。口縁部は強いヨコナデより外面に稜を持ち、口縁部はややつまみ上げる。口縁部から見込み部分はヨコナデで仕上げる。

5132、5133は土師器の中型の皿である。体部はやや外傾気味に浅く立ち上がる。5132の口縁部は強いヨコナデにより外面に稜を持ち、口縁部はつまみ上げる。口縁部はヨコナデで、体部はナデで仕上げる。

5133の口縁部は強いヨコナデにより外面に稜を持ち、口縁部はつまみ上げる。口縁部から見込みにかけてヨコナデだが、体部は庶減により調整不明である。

5129は小皿である。体部は口縁部にかけて浅く短く立ち上がるものである。口縁部はヨコナデ、体部はナデで仕上げる。

椀

5122は椀である。体部は僅かに外反しながら立ち上がり、口縁端部はつまみ出しによりやや上方に立ち上がる。口縁部はヨコナデ、体部はナデである。

5125は鏡である。剣部はやや肩張りのひしゃげた球形で、口縁部は「く」の字状を呈する。胴部は内面を斜方向のハケメで仕上げる。外面は廣誠により不明である。口縁部はヨコナデである。

土鍤

5103～5108は土鍤である。6点は共に中央がやや膨らむ棒状を呈し、上端から下端にかけて貫通する管状をなす。5103は中でも比較的大ぶりのものである。

b 須恵器

杯

5100は須恵器の杯である。底部に高台を有する所謂杯Bと呼称するものである。体部はやや開き気味に立ち上がり、口縁部は丸くおさめる。体部外内面は回転ナデを主体とし、内面中央をナデである。底部はヘラキリである。

鉢

5099は底部を欠損するが捏ね鉢である。体部は大きく開きながら立ち上がり、口縁部は上方に拡張して外端に面をなす。体部外内面はナデで、口縁部は回転ナデである。

c 瓦器

皿

5091, 5092, 5095は小皿である。5091, 5095は丸味を帯びた底部から緩やかに立ち上がる体部である。口縁部はヨコナデで仕上げ、体部はナデである。また底部外面には指頭圧痕が顕著に残る。5092は形態及び調整等が土師器小皿に近似するが、内面に僅かに暗文が見える。

椀

5130は椀である。底部が欠損するが高台を持つものと考えられる。体部は緩やかに内擣しながら立ち上がり、口縁部は丸くおさめる。体部外表面は下半部に指頭圧痕が残り、内面は口縁部にかけて横方向主体のヘラミガキを施す。

獸足土器

5109は瓦質の獸足土器の一部である。成形は手捏ねで、調整も指ナデであろう。全体の器形の想定は難しいが、脚の一部とみてよかろう。

d 瓦

5087は須恵質の軒平瓦である。瓦本体の残存は悪く、凹部に布目痕、凸部にタタキ痕が残る。瓦当部分は5割程度残っており、均整唐草文を施している。

5086は瓦質の丸瓦である。内面は布目痕が残り、端部は面取りを施す。また、一部に瓦釘の釘孔の痕跡が残る。

5127は須恵質の軒丸瓦で、瓦当部分の破片である。文様は複弁六葉蓮華文を施し、蓮弁・子葉は凸線で表現している。凸線で囲んだ中房は蓮子を持たず、やや球状に盛り上がる。

e 陶磁器

鉢

5084は上半部のみを図化したが、唐津焼の鉢である。大きく開く体部で、口縁部で「へ」の字状に屈曲する。内面にはラマ式蓮弁文、草花文等を象嵌し、後に白濁釉をハケメ状に塗る。

皿

5085は高台付底部のみ図化したが、伊万里焼の皿である。体部は外面共に明青灰色の釉を施し、高台部はケズリで仕上げる。また見込部分は所謂蛇目釉剥ぎを施す。SD01出土である。

瓶

5101は下半部が欠損するが灰釉陶器の瓶である。強く窄まる頸部から短く外反する口縁部を持つ。口縁部はやや肥厚する。外内面は回転ナデで仕上げ、体部外面から口縁部には釉を施す。

碗

5102は底部付近のみの図化だが、青磁碗である。底部には低い高台をつけ、体部は緩やかに立ち上がる。体部外内面は回転ナデで仕上げる。体部内面には草花文を施し、外面にはクシ描文も施す。また、高台裏部には墨書きが描かれるが、現状では判読に至っていない。

甕

5110は下半部を欠損するが、丹波焼の甕と考えられる。卵倒形を呈する強い肩張りの胴部で、強く窄まる頸部から短く外反する口縁部を持つ。口縁部は一度大きく外反したものを再び折り込む「N」字状に近い形態をなし、端部はやや肥厚する。胴部外反はナデ、胴部内面は板ナデで仕上げ、接合部付近には指頭圧痕も残る。口縁部はヨコナデで、肩部及び口縁部には灰かぶりが見られる。SK01出土である。

5126は丹波焼の甕の胴部であろう。外面には蘋杉状のタタキが残る。SK01出土である。

5134、5135は水琴窟を構成するセット関係にある。5134は陶器の甕である。大ぶりの平底で卵倒形の胴部を呈するものである。口縁部は内側に三角形状、外側に四角形状の抵抗を持ち、上端に面をなす。底部には水琴窟転用のための焼成後穿孔を施す。外内面は共に回転ナデで仕上げる。底部は未調整である。5135は平瓦である。水琴窟内部に置かれており、水落時の共鳴具としての機能があったと考えられる。

5136は丹波焼の醤油甕である。大ぶりの平底で卵倒形の胴部を呈するもので、口縁部は欠損する。底部付近には注ぎ口を設けており、底部には水琴窟転用の為の焼成後穿孔を施す。外内面は共に回転ナデで仕上げ、外面には鉄釉を施す。

f 弥生土器

5128は底部のみの図化だが、弥生土器の壺であろう。SK01への混入遺物と考えられる。底部は平底で、外面には縱方向のヘラミガキを施す。

2. 石器 (図版46 写真34)

今回の調査では、縄文～弥生時代に属する石器12点が出土している。石材は、特に記載しない限りサヌカイトである。

(1) 石鎌

S5003は、凹基無茎式石鎌である。表裏ともに粗雑な二次加工を見せ、片側側縁は大きく内湾しており、左右非対称形をなす。

(2) 石錐

S5004は、菱形のつまみ部をもつ石錐である。錐部は折損している。

S5005も、石錐であろうか。湾曲する平面形を見せ、下端部の両側縁には、二次加工が連続している。両端を折損するため、器種の認定に問題を残す。

(3) 尖頭器

S5006は、柳葉形の尖頭器である。表裏ともに丁寧な二次加工が施され、均整のとれた柳葉形を呈している。縄文時代早期以前の所産と思われる。第3遺構検出面に食い込んだ状況で検出された。

(4) 削器

S5007は、縱長剥片を素材とした削器である。剥片の打面部から末端部にかけて、背面側から二次加工が施され、やや凹凸のある刃部を形成している。

(5) 楔形石器

S5008は、剥片の両端から剥離がおこなわれた、楔形石器である。背面側と腹面側では剥離方向が対向していることから、素材剥片は、打面転移石核ないしは両設打面の石核から剥離されたものと考えられる。

S5009は、剥離が進行した楔形石器である。片側側面にいわゆる「截断面」が形成されている。

(6) 剥片

S5010はチャート製剥片である。背面は広く自然面に覆われている。打面部が折損しているほか、剥片の半ばが剥離軸に沿って折損していることから、本来の形態を推定するのは困難である。

(7) 石核

S5011は、チャート製石核である。僅かに調整された平坦な打面をみせ、側面からごく小型の剥片を剥離している。

(8) 磨石

S5012・5013は磨石である。ともに円礫を用いており、端部に僅かな磨痕が認められる。

(9) 石包丁

S5015は、粘板岩製石包丁と思われる。背部に接する縁辺に、僅かに研磨の痕跡をとどめるが、他は表裏両面とも剥離面で、研磨痕が切られている。また、二次加工を試みたと思われる剥離痕が認められるところから、石包丁製作途上での破損品か、再利用を試みたものである可能性を指摘しておきたい。

3. 金属器

F5001～5008・5010は、鉄釘である。いずれも方形断面をみせ、端部を折り曲げることによって、釘頭を形成している。

F5008・5009は鉄鎌であろう。いずれも鏽化した木質が遺存している。F5009は、茎部に棘状突起が認められる。

F5011は、棒状の鉄器である。短い基部に断面方形の身部を見せ、先端は直刃となっている。

F5012は鏟である。

第4節 小結

1992年度の調査で検出された遺構・遺物は、下記のように大別される。

第1期 縄文時代

第2期 弥生時代

第3期 奈良時代（8世紀）

第4期 平安時代末～鎌倉時代初頭（12世紀末～13世紀）

第5期 鎌倉・室町時代（13世紀末～14世紀）

第6期 近世後半～近代

第1期・第2期は、少數の出土遺物があるのみで、遺構は検出されていない。楠・荒田町遺跡では、これまで弥生時代の遺構・遺物は見いだされているものの、縄文時代早期に属する遺構は、近隣の調査では見いだされておらず、楠・荒田町遺跡で最も古い遺物として注目される。

第3期の遺構は、SK02のみである。出土遺物から、8世紀後半に属するものと判断された。これまでに神戸大学附属病院構内の調査で検出された遺構中、最も古い時期に相当しており、平安時代末期に、平氏別邸群が構築される以前の状況を示す資料として注目される。

第4期は、いわゆる「福原京」の時期を含むが、確実にこの時期に属する遺構は、検出されなかった。東播系須恵器、輸入磁器の一部がこの時期に相当する。また、東播系の須恵質軒丸・軒半瓦もこの時期に相当するが、出土数量が極少量であり、隣接地に瓦葺き建物が存在したとは認めがたい。

第5期は、第3検出面の掘立柱建物跡群を中心とする、集落遺跡がこれに相当する。いわゆる「福原京」以後、本地域が一般集落として利用されたことを示す遺構群である。

第6期は、第1面で検出された、畠作遺構および掘立柱建物跡がこれにあたる。また、近世末以降の構築と思われる水琴窟もこの時期に含めておく。

1992年度の調査で検出された遺構群および遺物は、「福原京」以前に、本地点周辺に有力な遺構群が形成されていた可能性を示すもの、「福原京」廃絶後、一般的な集落が形成されたことを示すものが中心であり、平氏別邸群が近隣に存在することを示す有力な資料は検出されなかった。

第6章 1994年度の調査

第1節 調査の概要

1994(平成6)年度の調査は、神戸大学医学部本館の建て替えに伴い、1994年10月24日～12月7日に実施した。調査対象地には、既存の医学部本館とこれに伴う地下構造物があって、すでに遺構が破壊されていると考えられたため、建物が存在しない部分についてのみ、本発掘調査を実施した。調査地点の標高は、23.5～25mを測る。

調査区は医学部本館の西および南側にあたり、幅4m前後のL字形を呈する。調査面積は392m²である。調査の便宜上、南側をA区、西側をB区と呼称した。

A区では調査範囲の西半分が、昭和30年代の本館建設時に大規模な搅乱を受けていたが、本来の地形が低かったことと、厚い盛土がおこなわれていたことから、搅乱部以外では厚さ80cm前後の遺物包含層下に遺構面を検出することができた。調査区の東側に中世の柱穴が集中し、中央部付近には木組み井戸およびや大型の柱穴が分布していた。西側は、医学部本館によって大きく搅乱を受けている。

調査区東側の遺構は、洪れ砂と厚い盛土によって覆われていたため、約80cmの遺物包含層とともに遺存状況は良好である。遺物包含層は、少なくとも3層に分層が可能であり、遺物は中層より上位で多く出土した。

西側のB区では、本来の地表面がA区よりも1.5m程度高く、遺跡の立地条件としては、A区よりも良好である。しかしこのために削平を受けやすく、遺物包含層は遺存していないかった。検出できた遺構も近代のもののみであった。

第2節 遺構

検出された遺構は、柱穴・溝・井戸である。調査範囲が狭小なため、建物跡等を復原することができず、遺構群の全容は不明といわざるを得ない。しかし、出土遺物から判断される遺構の時期が1992(平成4)年度の調査において検出された遺構群とはほぼ同時期であることから、これに類する内容をもつ遺構群であったものと推察される。

1. A区の遺構

(1) 柱穴

A区東側では、多くの柱穴が検出されたが、いずれも直径が30cm前後の小型の柱穴である。いくつかの柱列が復原できるが、調査区が狭小であるため全容を復原することはできなかった。A区中央部に位置する、やや大型の柱穴でも、1列が想定されるが建物跡の広がりについては不明である。

(2) 須恵器埋甕 (図版 47)

A区東側で検出された、須恵器埋甕である。検出された状況は、甕底部のみがわずかに埋設された状況に見えるが、胴部中位付近までが原形を保ち、上半部の破片が内部に落下していたことから、胴部中位付近まで埋設されていたものと判断される。本来、埋設坑が掘り込まれた面は、検出面よりも1層上位の遺物包含層上面と考えてよい。本例は、据立柱建物内で水甕等として設置されていたものが遺存したものであろうが、建物跡との関係の詳細は不明である。

(3) 井戸 (図版48)

A区中央部で検出された、横桟縦板組井戸である。板組の一辺は90cm、検出面からの深さは2.5mを測る。掘り方は不整円形を呈しており、その半ばが調査区外に広がるが、直径は3.5m前後と推定される。

横桟は3段が遺存しており、それぞれがほぞ穴によって組み合わされている。横桟の内法は75cmを測る。井戸内に桟の断片が落下していたことから、現存する部分よりも上位に、少なくともさらに1段が存在したものだろう。横桟を支える隅柱は、各段の桟を長さ45cm程の独立した支柱で支える構造になっている。横桟の外側は、各段とも幅30~40cmの板材で二重に覆われて、泥水の浸入を防ぐ構造となっている。

井戸の下半は、巨大な河川繩を含む土砂で人為的に埋められていたことから、井戸最上部に石組みが存在した可能性も考慮してよからう。出土遺物には、呪符木簡、漆塗椀のほか、多数の須恵器・土師器・輸入磁器があり、井戸の中位以上に集中して出土していることから、井戸を埋める行為に伴うものと思われる。

2. B区の遺構

(1) 溝

B地区南部で、東西方向に延びる溝1条が検出された。近代の遺構である。

第3節 遺物

1. 土器・陶磁器

(1) 中世の土器・陶磁器

a 土師器（図版49）

土師器には、皿・椀・鍋、ミニチュア土器のほか、器種不明の底部がある。

皿

皿には、ロクロ使用のものとロクロ未使用のものとがあり、大・小の規格がある。

ロクロ使用の皿は、小型品のみで、比較的深身のもの（6069）と比較的浅身のものとがある。前者は、ヘラ切り底で、口縁部端部が肥厚しながら丸く納まる。後者は、口縁部端部はやや尖り気味に納まり、糸切り底のもの（6058）とヘラ切り底のもの（6054・6057・6066・6068）との両者がある。なお、6058・6057・6068は、底部内面にナデ調整が認められる。形態等の特徴から、深身のものは12世紀後半~13前半の所産と考えられ、浅身のものは13世紀代の所産と考えられる。

ロクロ未使用の皿には、大型品と小型品の両者があり、形態的には、内彎気味の体部が底部から立ち上がり口縁部が外反するもの（6017）と、底部から内彎気味に体部が立ち上がり口縁部端部に面をもつもの、内彎気味の体部が底部から立ち上がり面を持つ口縁部端部がつまみ上げ気味に納まるもの、直線または外反気味の体部が底部から屈曲して立ち上がり口縁部端部が丸く納まるもの、底部から比較的短い体部が立ち上がりそのまま口縁部にいたるもの（6013・6020・6021・6062・6064・6065・6067・6070・6073・6076・6077・6079・6083）、いわゆる「コースター」形を呈するもの（6055）とがある。

規格は、口縁部が外反する皿と体部の立ち上がりの短い皿及びいわゆる「コースター」形を呈する皿は小型品のみであるが、口縁部端部に面を持つ皿には大型品（6025・6085）と小型品（6012・6016・6022・6059・6061・6074・6078・6080・6082）とがあり、口縁部端部が丸く納まる皿においても大型品（6026・6028・6029・6051・6084）と小型品（6002・6003・6023・6024・6048・6049・6050・6063・6081・6089）とが確認される。

いわゆる「コースター」形を呈する皿を除く皿の成形・整形・調整技法は、いずれも底部外面に整形時

の指オサエ痕が確認でき、底部外面のナデ調整の後に口縁部内外面がヨコナデ調整され、調整の最終段階で底部内面がナデ調整される。また、いわゆる「コースター」形を呈する皿の成形・整形・調整技法は、底部外面に成形時の指オサエ痕が確認でき、底部内外面のナデ調整の後に口縁部内外面がヨコナデ調整される。

形態等の特徴から、口縁部が外反する皿及びいわゆる「コースター」形を呈する皿は12世紀前半の所産、口縁部端部に面を持つ皿は12世紀後半の所産、口縁部端部がつまみ上げ気味に納まる皿は13世紀代の所産、口縁部端部が丸く納まる皿は、14世紀前半の所産と考えられる。

椀

椀（6088）は、半底の底部から内彎気味に体部が立ち上がり、ほぼ直立する口縁部の端部は面を持つ。成形・整形・調整技法は、底部内外面のナデ調整の後、外面の体部から口縁部にかけてヨコナデ調整が施される。

鍋

鍋には、内彎気味に立ち上がる体部から「く」の字状に外反する口縁部をもつものと、いわゆる「播丹型」と呼称されるものがある。

前者には、口縁部端部が丸く納まるもの（6030）と口縁部端部に凹線が形成されるもの（6031）とがあるが、成形・整形・調整技法は、いずれも成形時の指オサエ痕が確認でき、成形後に体部外面及び口縁部内面は刷毛目調整され、その後、体部外面上半はナデ調整が行われ、調整の最終段階で口縁部内外面にヨコナデ調整が施される。なお、6031は、体部内面の刷毛目調整の後、頸部内面にはナデ調整が認められる。形態等の特徴から、いずれも12世紀後半～13世紀前半の所産と考えられる。

後者（6090）は、体部から緩やかに外反する口縁部端部が断面三角形状につまみ出されるが、口縁部端部はやや丸みを持った形状を呈する。成形・整形・調整技法は、タタキ成形の後、体部内面はヘラナデ調整の後、ナデ調整で、調整の最終段階で外面共体部上端から口縁部にかけてヨコナデ調整される。形態等の特徴から、14世紀前半の所産と考えられる。

ミニチュア土器

ミニチュア土器（6019）は、羽釜形の器形を呈し、底部内外面のナデ調整の後、口縁部内外面のヨコナデ調整が施されている。

その他

器種不明の底部（6053）は、ロクロ成形で、貼付高台を持ち、底部内面にはナデ調整が施されている。

b 瓦器（国版49 6034～6039・国版50 6040～6042・国版51 6091～6099）

皿（6091～6096）

皿は平底で体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。いずれも内面にミガキ調整を加える。

椀（6034～6042・6097～6099）

椀には断面三角形状の高台をもち、内面に圓線状、底部内面に格子状のミガキを施すもの（6098・6099）、器高が低く、断面U字状の高台をもち、内面に圓線状のミガキを施すもの（6039・6042）、高台の消失したもの（6035・6036・6040）などがある。格子状のミガキをもつものは尾上分類と泉型瓦器編III-1期、U字状の高台をもつものはIII-1期～IV-1期、高台を消失するものはIV-3期に相当し、それぞれ12世紀後半～13世紀前半、13世紀中頃、13世紀後半～14世紀前半の時期が与えられる。

c 須恵器（国版50 6043・6044・6045・国版51 6100）

鉢（6043～6045）

6043～6045はいずれも須恵器鉢である。6043は平底で体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。口縁部は肥厚せず、僅かに内傾する。法量は径19cm、高さ7cmと小さい。東播系須恵器の最末期のもので14世紀後半代の時期が考えられる。6044は口縁部が僅かに肥厚するもので、13世紀中頃～後半の時期に比定される。

6100は須恵器甕である。丸底で体部は直線的に斜め上方に立ち上がり、体部上部で大きく内彎する。頸部は短く直立し、口縁部は大きく外反する。外面は頸部まで平行叩き目が残る。東播系須恵器で、12世紀後半～13世紀前半代の時期が考えられる。

椀

6102は東播系須恵器椀である。平底で体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。13世紀前半の時期が考えられる。

d 白磁（図版52 6104・6103・6105）

白磁はいずれも碗で、口縁部が玉環状に肥厚するIV類（6104）と高台が細く高く、口縁部が外反するV類（6105）、底部を欠失するが、口縁部が外反するV類もしくはⅥ類（6103）のものがある。いずれも12世紀前半～13世紀前半の時期が考えられる。

e 青磁（図版50 6046・図版52 6106・6107・6108・6109）

6046は外面に片切り彫りの鶴蓮弁文を施す龍泉窯系青磁碗である。13世紀中頃～後半の時期が考えられる。

6006、6007はいずれも碗で外面に櫛引き施文を行う同安窯系青磁碗である。12世紀後半～13世紀前半のものである。

6108は外面にヘラ彫りの広形連弁を施す碗である。龍泉窯系青磁で13世紀後半～14世紀前半代の時期が考えられる。6109は体部が内彎する小碗である。龍泉窯系青磁で13世紀代のものであろう。

2 石器・石製品

(1) 砥石

S6001は、井戸（SE-01）より出土した、砥石である。灰白色を呈する泥岩質の堆積岩を用いたものであるが、葉理に沿って剥落している。片面と片側面・上面が研磨されており、その形状から、本来は長方形であったものと思われる。長さ59mm、幅30mm、厚さ7mm、重量17.6g。

S6002も井戸（SE-01）より出土した、砂岩製砥石である。下半部を折損するが、表裏ともに船底形の深い研磨痕が認められるほか各側面も多面体状に研磨整形されている。長さ224mm、幅135mm、厚さ78mm。

S6003は包含層より出土した。小型の直方体状に整形された砥石である。片面に複数の深い傷が見られる。長さ44mm、幅25mm、厚さ20mm。

(2) 石鍋

S6004・6005は滑石製石鍋である。ともに外面に鶴をもつ羽釜形を呈しており、外面に縱方向、内面に横方向をそれぞれ主体とする工具痕が認められる。口縁端部は、ともに平坦面を形成する。

3 木製遺物

(1) 漆器椀

椀の内外面に、黒漆で下塗りをおこなった後、赤漆で、中央に花弁をあしらった亀甲文を施している。

比較的平坦な底面から、膨らみをもちつつ立ち上がる体部をみせる。高台は脱落している。

(2) 御敷

W6002・6003はいずれも御敷である。遺存状況が劣悪なため、全体の形状・大きさは明らかではないが、平面形態は長楕円形を呈するものであろう。

(3) 横

W6004は、スギ材を用いた横である。短辺は弧状を呈し、長辺は直線的に仕上げられている。中央部のほとんどを失っており、縁辺のみが遺存していた。厚板状の素材中央部を、彫り込んで構としている。

(4) 不明木製品

W6005・6は、円棒の一面を削って平坦な面を作出し、一端を三角形に尖らせ、さらに2条の溝を刻んだ木製品である。他の一端がいずれも折損しているため原形は不明である。用途・機能は不明である。

W6005は、シキミを素材としている。

(5) 木簡

井戸内より、6点の木簡が出土している。これらのうち4点については、水口富夫により、既に「木簡研究」誌上に報告されており、奈良国立文化財研究所（当時）の綾村宏氏、館野和己氏、古尾谷知浩氏による記述がなされている（水口 1996）。

W6007は、長さ287mm、幅28.5mm、厚さ3mmを測る、スギ製の呪符木簡である。

W6008は、長さ267mm、残存幅39mm、厚さ3mmを測る、ヒノキ製の呪符木簡である。縦方向に半折している。

W6009は前掲文献に収録されていない、残存長246mm、幅22mm、厚さ4mmを測る木簡であるが、文字は遺存していない。

W6010は、縦方向に半折した木簡で、長さ150mm、幅24mm、厚さ5mmを測る呪符木簡である。

W6011も前掲文献に収録されていない、残存長120mm、幅34mm、厚さ3mmを測る木簡であるが、文字は遺存していない。

W6012は、残存長154mm、幅25mm、厚さ3.5mmを測る呪符木簡である。

第4節 小結

1994年度の調査で検出された主要な遺構は、出土遺物から13世紀後半～14世紀に属するものと考えられる。また、12世紀後半～13世紀前半に属する遺物も多く認められることから、周辺に当該時期の遺構が分布していたものと考えられる。1992年度の調査においても、同様の時期の掘立柱建物群が検出されており、いわゆる「福原京」廢絶以降、室町時代前半期にかけて集落が形成されたのであろう。

注

- 1 尾上実・森島康雄・近江俊秀 1995 「瓦器碗」「概説 中世の土器・陶磁器」中世土器研究会
- 2 横田賢次郎・森田勉 1978 「太宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4
- 3 水口富夫 1996 「兵庫・神戸大学医学部附属病院構内遺跡」『木簡研究』第8号 木簡学会

木簡枳文

W 6 0 0 7 「八咄

(符) 山五鬼急々如律令」

W 6 0 0 8 「

談諭

W 6 0 1 0 「喝

(符) 急如□×」

W 6 0 1 2 「喝

(符) 天地逆」

第7章　まとめ

楠・荒田町遺跡（神戸大学附属病院構内）の調査により検出された遺物は、縄文時代早期～近世後期の間、断続的に残されたものである。それらのうち遺構を伴うのは、（1）奈良時代、（2）平安時代後期～鎌倉時代、（3）室町時代、（4）江戸時代後期の4時期を中心としている。

第1期の遺構は、1992年度調査の土坑（SK02）のみであるが、出土遺物は多様であり、相当規模の遺構が周辺に分布していたことを示唆している。ただし、これまでの周辺調査においても、当該時期の遺構は検出されておらず、奈良時代における楠・荒田町遺跡の実態は明らかではない。

第2期の遺構は、いわゆる「福原京」およびこれに後続するものである。今回報告した兵庫県教育委員会による一連の調査では、顕著な遺構を見いだすことができず、出土遺物も在地系の一般的な方を外れるものではない。当該時期の土器・陶磁器・瓦等も出土してはいるが、きわめて少数であり、隣接地に大規模な建物群が存在していたことへの検証にはきわめて不十分であるといわざるを得ない。1981・82年度に、神戸大学により実施された調査で検出されている、大規模な掘立柱建物および廻は当該時期に属し、その規模から平氏別邸群の一部である可能性も高いが、遺構全体からすればきわめて部分的な調査にとどまっているため、十分な検証にたえないのが現状である。

これまでの調査から判断するならば、楠・荒田町遺跡付近における「平氏別邸」遺構は、存在したとしても、相当程度観定された領域に分布しており、その周辺部における遺構分布は、希薄なものであった可能性が考慮しうる。

第3期の遺構は、1992年度の調査区を中心に分布する、掘立柱建物群を主体とする。その規模・出土遺物等から、当該期における一般的な集落と判断される。

第4期は、耕地遺構を中心となっている。畑作に伴う歴が1987・92年度の調査区で検出されているほか、ごく小規模な掘立柱建物跡も検出された。このほか1985年度調査で検出された空跡も、生産物は明らかではないが、本時期に含められる。総じて、第3期の集落廃絶以降は、顕著な遺構が認められないことから、耕地としての土地利用が主体となったと考えてよからう。

その他の時期の遺物は、遺構を見いだすことができなかつた。しかし、1992年度の調査区で検出された縄文時代の石器類は、楠・荒田町遺跡が縄文時代早期以降、集落として利用されていたことを明らかにした点で重要である。

私たちの調査区内では、これらの遺構や遺物の他に、第二次世界大戦時の爆撃に伴う廃棄物が多量に検出された。炭化した骨の上から見つかった、押しつぶされた貯金箱は、爆撃の苦烈さと人々の苦しみを想起させるに十分なものであった。普段忘れがちな、ごく近い過去のできごとが、地下に埋もれることも、忘れてはならないだろう。

昨年発生した阪神・淡路大地震は、6000人の生命を奪い、甚大な被害を与えた。一年が過ぎた今、改めて亡くなられた方々の冥福をお祈りしたい。発掘調査で得られた考古学的成果を、防災という視点で積極的に活用してゆくことも、私達にできる復興と防災への貢献であると考えている。

第2表 1981・82年度調査の出土遺物

回数	遺物番号	種別	種類	地区	地質	調査	層位	口径	底径	高さ	参考
1001	土師器	陶器	S1W1北側	S1W7	pH	pt.上部	—	9.3	7.2	1.8	
1002	土師器	陶器	S1W7	S1W7	pH	pt.上部	—	7.9	5.2	1.8	
1003	土師器	陶器	S1W7	S1W7	pH	pt.上部	—	8.8	6.6	1.5	
1004	土師器	陶器	S1W7	S1W7	pH	pt.上部	—	9.9	5.9	1.9	なくさん十個のあつたが
1005	土師器	陶器	S1W7	S1W7	pH	pt.上部	—	9.1	5.4	1.6	深いpt.
1006	土師器	陶器	S1W7	S1W7	pH	pt.上部	—	8.5	5.4	1.8	
1007	土師器	陶器	S1W2東側	S1W2	pH	pt.上部	(含土層)	9.1	7.6	2	地方の光輝
1008	土師器	陶器	S1W2の北側	S1W2	pH	pt.上部	—	9.3	7.3	1.4	
1009	土師器	陶器	S1W5の北側	S1W5	pH	pt.上部	—	10.8	8.5	3.6	pHの実測
1010	土師器	陶器	S1W5	S1W5	pH	pt.上部	—	8.2	—	—	
1011	土師器	陶器	S1W5	S1W5	pH	pt.上部	—	10.5	8.5	—	
1012	土師器	陶器	S1W5	S1W5	pH	pt.上部	—	10.5	8.5	—	
1013	土師器	陶器	S1W5	S1W5	pH	pt.上部	—	10.5	8.5	—	
1014	須恵器	陶器	S1W5	S1W5	pH	pt.上部	—	20.6	4.9	4.8	pHの実測
1015	須恵器	陶器	S1W5	S1W5	pH	pt.上部	—	3.6	—	—	
1016	須恵器	陶器	S1W5	S1W5	pH	pt.上部	—	16.6	6.5	6.6	黒系褐色土質内のpH
1017	須恵器	陶器	S1W5	S1W5	pH	pt.上部	—	6	—	—	北西隅
1018	須恵器	陶器	S1W5	S1W5	pH	pt.上部	—	—	—	—	
1019	須恵器	陶器	S1W5	S1W5	pH	pt.上部	—	—	—	—	
1020	須恵器	陶器	S1W5	S1W5	pH	pt.上部	—	—	—	—	
2001	土師器	陶器	S1W5	S1W5	pH	pt.上部	—	9	—	1.7	
2002	土師器	陶器	S1W5	S1W5	pH	pt.上部	—	8.8	—	1.6	
2003	土師器	陶器	S1W5	S1W5	pH	pt.上部	—	8.9	—	1.7	
2004	土師器	陶器	S1W5	S1W5	pH	pt.上部	—	8.9	—	1.5	
2005	土師器	陶器	S1W5	S1W5	pH	pt.上部	—	8.5	—	1.6	
2006	土師器	陶器	S1W5	S1W5	pH	pt.上部	—	9	—	1.5	猛烈
2007	土師器	陶器	S1W5	S1W5	pH	pt.上部	—	8.7	—	1.4	
2008	土師器	陶器	S1W5	S1W5	pH	pt.上部	—	—	—	—	把手形状
2009	土師器	陶器	S1W5	S1W5	pH	pt.上部	—	—	—	—	
2010	須恵器	陶器	S1W5	S1W5	pH	pt.上部	—	8.6	4.6	2.5	レンチ形底部分
2011	須恵器	陶器	S1W5	S1W5	pH	pt.上部	—	—	—	—	
2012	須恵器	陶器	S1W5	S1W5	pH	pt.上部	—	—	—	—	
2013	須恵器	陶器	S1W5	S1W5	pH	pt.上部	—	—	—	—	
2014	須恵器	陶器	S1W5	S1W5	pH	pt.上部	—	—	—	—	
2015	須恵器	陶器	S1W5	S1W5	pH	pt.上部	—	—	—	—	
2016	須恵器	陶器	S1W5	S1W5	pH	pt.上部	—	—	—	—	
2017	須恵器	陶器	S1W5	S1W5	pH	pt.上部	—	—	—	—	
2018	須恵器	陶器	S1W5	S1W5	pH	pt.上部	—	—	—	—	
2019	須恵器	陶器	S1W5	S1W5	pH	pt.上部	—	—	—	—	
2020	須恵器	陶器	S1W5	S1W5	pH	pt.上部	—	—	—	—	
2021	須恵器	陶器	S1W5	S1W5	pH	pt.上部	—	—	—	—	
2022	須恵器	陶器	S1W5	S1W5	pH	pt.上部	—	—	—	—	
2023	須恵器	陶器	S1W5	S1W5	pH	pt.上部	—	—	—	—	
2024	須恵器	陶器	S1W5	S1W5	pH	pt.上部	—	—	—	—	
2025	須恵器	陶器	S1W5	S1W5	pH	pt.上部	—	—	—	—	
2026	須恵器	陶器	S1W5	S1W5	pH	pt.上部	—	—	—	—	
2027	須恵器	陶器	S1W5	S1W5	pH	pt.上部	—	—	—	—	
2028	須恵器	陶器	S1W5	S1W5	pH	pt.上部	—	—	—	—	
2029	須恵器	陶器	S1W5	S1W5	pH	pt.上部	—	—	—	—	
2030	須恵器	陶器	S1W5	S1W5	pH	pt.上部	—	—	—	—	
2031	須恵器	陶器	S1W5	S1W5	pH	pt.上部	—	—	—	—	
2032	須恵器	陶器	S1W5	S1W5	pH	pt.上部	—	—	—	—	
2033	須恵器	陶器	S1W5	S1W5	pH	pt.上部	—	—	—	—	
S2001	石製品	石製品	—	—	—	—	—	—	—	—	

第3表 1985年度調査の出土遺物

通版	着地番号	種別	名種	地区	周辺	周位	口径	底径	高さ	備考
10	3001	土器	玉	C-3	-	-	8.1	8.1	1.6	
10	3002	土器	丸	F-3	-	金屬 漆付 内面瓦経	8.7	8.7	1.6	1.1
10	3003	土器	丸	D	-	-	14.6	14.6	2.8	
10	3004	土器	丸	-	-	-	-	-	-	
10	3005	土器	丸	F-4	SK1007 穴穴	金屬 漆付 内面瓦経	8.6	8.6	1.6	
10	3006	土器	丸	F-5	-	金屬 漆付 内面瓦経	8.8	8.8	1.7	黒色トレンチ
10	3007	土器	丸	C-4	SK1014	-	9.5	9.5	1.7	
10	3008	土器	丸	-	SK1011	金屬 漆付 内面瓦経	-	-	6.9	
10	3009	土器	丸	F-5	-	金屬 漆付 内面瓦経	7.7	7.7	1.2	黒色トレンチ
10	3010	土器	丸	F-5	-	金屬 漆付 内面瓦経	7.9	7.9	1.5	黒色トレンチ
10	3011	土器	丸	F-5	-	金屬 漆付 内面瓦経	15.6	15.6	4.1	
10	3012	四色土器	丸	-	-	-	14.8	14.8	4.6	
10	3013	白色土器	丸	-	塗装区間	-	-	-	13.8	
10	3014	土器	丸	Z-6	-	-	-	-	6	
10	3015	須生器	丸	-	塗装区間	黒色土	-	-	-	
10	3016	土器	丸	D-5	-	塗装区間	-	-	38.1	黒色トレンチ
10	3017	土器	丸	B-5	-	-	-	-	-	
10	3018	特殊陶器	丸	E-4	-	金屬 漆付 内面瓦経	-	-	-	黒色トレンチ
10	3019	白磁	丸	-	塗装区間	-	-	-	-	
10	3020	青磁	丸	-	SK1020	-	-	-	-	
10	3021	白磁	丸	E-5	-	-	-	-	-	
10	3022	白磁	丸	Z-4	-	黒色 漆付 内面瓦経	7	7	-	
11	3023	玉	丸	A-3	-	黒色 漆付 内面瓦経	16.3	16.3	-	
11	3024	玉	丸	A-3	黒色 漆付 内面瓦経	漆付 内面瓦経	-	-	6.6	黒色トレンチから落ち込み
11	3025	玉	丸	A-3	黒色 漆付 内面瓦経	漆付 内面瓦経	-	-	-	
11	3026	玉	丸	A-5	黒色 漆付 内面瓦経	漆付 内面瓦経	-	-	-	
11	3027	玉	丸	C-6	黒色 漆付 内面瓦経	漆付 内面瓦経	-	-	-	
10	3028	土器	丸	A-5	-	-	-	-	-	
11	3029	土器	丸	Z-2	-	-	-	-	-	
11	3030	石器	丸	B-4	-	黒色土上面(上層)	27.3	27.3	-	
11	3031	石器	丸	-	-	-	-	-	-	

第4表-1 1987年度調査の出土遺物

図版	遺物番号	種別	地区	遺構	層位	口径	底径	高さ	備考
23	4001	土器部	三足鍋	A	生石	—	—	2.5	焼成2.5
23	4002	土器部	三足鍋	A	生石	—	—	2.7	焼成2.7
23	4003	土器部	三足鍋	A	生石	—	—	2.7	焼成2.7
23	4004	土器部	四脚鍋	A	生石	—	—	2.5	焼成2.2
23	4005	土器部	四脚鍋	A	生石	—	—	2.5	—
23	4006	土器部	深盆	B	—	—	—	—	—
23	4007	土器部	深盆	A	生石	—	—	2.6	—
23	4008	土器部	深盆	A	生石	—	—	2.6	—
23	4009	土器部	深盆	A	生石	—	—	2.6	—
23	4010	土器部	深盆	A	生石	—	—	2.6	—
25	4012	土器部	深盆	A	生石	—	—	2.6	—
25	4013	土器部	深盆	A	生石	—	—	2.6	—
4014	E-53	核	核	A	SE05	下層	15.6	4.2	4.6
4015	E-53	核	核	A	SE05	上層	14.5	3.4	4.1
4016	E-53	核	核	A	SE05	上層	15	3.7	4.2
4017	E-53	核	核	A	SE05	上層	14.5	3.4	3.9
4018	E-53	核	核	A	SE05 SE02	黒帯付層	14.7	3.5	3.9
4019	E-53	核	核	B1	東側内丸子・丸城	黑	14.3	3.1	3.5
4020	E-53	核	核	A	SK02	上層	12.2	1.7	1.7
4021	E-53	核	核	A	SK02	上層	12.8	5.3	1.5
4022	E-53	核	核	A	SK02	上層	12.7	—	1.6
4023	E-53	核	核	A	SK02	上層	8	—	1.7
4024	E-53	核	核	A	SK02	上層	12.4	3.2	4.6
4025	E-53	核	核	A	SE05	中層	13.4	—	—
4026	E-53	核	核	A	SD10	中層	12.7	—	—
4027	E-53	核	核	A	SE05	中層	7.5	—	1.3
4028	E-53	核	核	A	SE05	中層	7.5	—	0.9
4029	土器部	土器部	土器部	A	SE05	中層	9.1	—	1.6
4030	土器部	土器部	土器部	A	SE05	中層	8.4	—	1.6
4031	土器部	土器部	土器部	A	SE05	中層	12.5	8	—
4032	土器部	土器部	土器部	A	SE05	中層	12.5	8	3.2
4033	土器部	土器部	土器部	A	SE05	中層	11.1	4.3	3.7
4034	土器部	土器部	土器部	A	SE05	中層	13	3	3.4
4035	土器部	土器部	土器部	A	SE05	中層	20.6	—	—
4036	鬼型鉢	鉢	鉢	A	瓶	—	—	鬼形	鬼形
4037	鬼型鉢	鉢	鉢	A	瓶	—	—	鬼形	鬼形
4038	土器部	土器部	土器部	A	瓶	—	—	—	—
4039	土器部	土器部	土器部	A	瓶	—	—	—	—
4040	土器部	土器部	土器部	A	瓶	—	—	—	—
4041	土器部	土器部	土器部	A	SK03	—	—	—	—
4042	黑色土器	鉢	鉢	A	SK04	—	—	—	—
4043	土器部	土器部	土器部	A	SK03	—	—	—	—
4044	土器部	土器部	土器部	A	—	—	9.7	—	—
4045	土器部	土器部	土器部	A	—	—	8.4	—	—
4046	土器部	土器部	土器部	B	柱穴0	黑色シルトル	8.8	—	1.1
4047	土器部	土器部	土器部	B	柱穴0	柱穴	13.7	—	2.5
4048	土器部	土器部	土器部	B	柱穴0	柱穴	13.5	—	2.7
4049	土器部	土器部	土器部	A	—	—	8.8	—	3.3
4050	玉器	玉器	玉器	—	—	—	12.6	—	—

第4表-2 1987年度調査の出土遺物

遺物 番号	種別	器種	地区	口径	底径	高さ	備考
4-051	須恵器	鉢	A	SD16	下盤	14.2	
4-052	須恵器	鉢	A	SK05	土	14	
4-053	灰陶瓦	輪	A	SX017(付)付	土	7.5	
4-054	陶瓦	輪	A C-7	地火・坑(SX01)	褐色シルト	5.7	
4-055	須恵器	平底鉢	B	SD07	土		
4-056	須恵器	鍵	B	SD16	土	11.8	南側軒溝東側
4-057	須恵器	鍵	A			12.2	南側軒溝東側
4-058	須恵器	鍵	A			9.9	南側軒溝東側
4-059	須恵器	鍵	A				A地区東方
4-061	須前焼	滑り鉢	A	第1水田面	上層土		
4-062	青磁	碗?	A	SD01	下層土(底)		
4-063	青磁	碗?	B	SD16	目土		
4-064	青磁	碗	A		褐色シルトより上の層		
4-065	青磁	碗	B		褐色シルト		
4-066	青磁	碗	A	第1水田面	上層土		△地区東方
4-067	青磁	碗	A	C-10付北側	褐色シルト		△地区東方
4-068	青磁	碗	B		土(平底丸足入)	16.7	
4-069	白磁	碗	B		褐色シルト		
4-070	白磁	碗	A	第1水田面	褐色シルト	18.6	
4-071	白磁	碗	A		褐色シルト	17.4	
4-072	白磁	碗	B		褐色シルト	15.8	
4-073	灰陶瓦	輪	A	第1水田面	褐色シルト		
4-074	白磁	碗	A		褐色シルトより上の層	17.2	
4-075	白磁	碗	A		褐色シルトより上の層	5.8	
4-076	白磁	圓子	A		褐色シルトより上の層		
4-078	白磁	碗	A	石組み	褐色シルト	t=1.3	
4-079	白磁	平底	A	あわ3	褐色シルト		
4-080	白磁	平底	A		褐色色		
						b=39	

第5表-1 1992年度調査の出土遺物

図版	通称番号	種別	地区	断面	測線	口径	基高	備考
5001	十郎山	棒	SK02	下層	13.1	—	3.8	SK02c
5002	十郎山	棒	SK02	下層	14.1	—	3.3	SK02n
5003	十郎山	棒	SK02	下層	15.3	—	4.8	SK02m
5004	十郎山	目	SK02	下層	15.8	12.1	2.5	SK02m
5005	十郎山	目	SK02	下層	17.8	—	2.8	—
5006	十郎山	目	SK02	下層	15.6	—	2.6	—
5007	十郎山	丸	SK02	上層・下層	18.4	—	4	SK02g,b
5008	十郎山	丸	SK02	上層・下層	18.3	—	3.6	—
5009	十郎山	丸	SK02	土	27.2	—	3.1	SK02g
5010	十郎山	丸	SK02	土	38.8	—	—	—
5011	十郎山	丸	SK02	下層	9.4	—	17.2	—
5012	十郎山	丸	SK02	下層	1-4	—	—	—
5013	十郎山	丸	SK02	上層	—	—	—	—
5014	十郎山	丸	SK02	下層	17.2	1.4	1.2	—
5015	十郎山	丸	SK02	下層	17.2	1.3	1.4	—
5016	十郎山	丸	SK02	下層	17.2	16.4	13.8	SK02g
5017	十郎山	丸	SK02	下層	16.5	—	—	—
5018	十郎山	丸	SK02	上層	—	—	—	—
5019	十郎山	丸	SK02	上層	13.2	—	—	—
5020	十郎山	丸	SK02	上層・下層	15	—	6	SK02f
5021	十郎山	丸	SK02	下層	20.3	—	—	—
5022	十郎山	丸	SK02	下層	23.4	—	—	SK02b
5023	十郎山	丸	SK02	下層	24.9	—	—	SK02c
5024	十郎山	丸?	SK02	上層・下層	36.3	—	—	—
5025	十郎山	丸	SK02	下層	1.9	20.1	19.1	—
5026	十郎山	丸	SK02	下層	22.6	—	21.9	SK02e,h
5027	十郎山	丸	SK02	下層	1.5	—	—	—
5028	十郎山	丸	SK02	下層	16.4	—	—	—
5029	十郎山	丸	SK02	下層	16.1	—	—	—
5030	十郎山	丸	SK02	下層	1.0	—	—	—
5031	十郎山	丸	SK02	下層	1.6	—	—	—
5032	十郎山	丸	SK02	上層・下層	17.2	—	—	SK02d,t
5033	十郎山	丸	SK02	上層	9.7	—	—	—
5034	須恵器	杯	SK02	下層	15.6	9.2	3.4	—
5035	須恵器	杯	SK02	下層	1.2	9.1	2.8	SK02b
5036	須恵器	杯	SK02	下層	11.9	—	3	SK02w
5037	須恵器	杯	SK02	上層	12.2	—	3.2	SK02w
5038	須恵器	杯	SK02	下層	13.3	9.8	3.5	SK02c
5039	須恵器	杯	SK02	下層	13.5	8.3	3.7	SK02b
5040	須恵器	杯	SK02	下層	13.3	9.6	3.5	SK02mの下
5041	須恵器	杯	SK02	下層	13.3	9.6	3.3	—
5042	須恵器	杯	SK02	下層	20	13.4	6.2	—
5043	須恵器	杯	SK02	下層	15.6	—	2.5	—
5044	須恵器	杯	SK02	上層	13.4	—	2.3	—
5045	須恵器	杯	SK02	上層	1.4	—	—	—
5046	須恵器	杯	SK02	上層	11.6	—	—	—
5047	須恵器	杯	SK02	土	13.3	—	—	—
5048	須恵器	杯	SK02	下層	9.9	11	2	■ = 20.3 SK02b
5049	須恵器	短筒盃	SK02	下層	12.5	1.3	17.4	■ = 24.0 SK02g

第5表-2 1992年度調査の出土遺物

図版	通号	種類	地区	遺構	層位	口径	底径	高さ	摘要
5050	切妻型 瓦葺き	瓦	SK02 T字地 下窓	7.7cm	7.7cm	9.9	9.9	SK02 地、T9 SK02	
5051	切妻型 瓦葺き	瓦	SK02 T字地 下窓	7.7cm	7.7cm	9.9	9.9	SK02 地、T9 SK02	
5052	切妻型 瓦葺き	瓦	SK02 T字地 下窓	7.7cm	7.7cm	9.9	9.9	SK02 地、T9 SK02	
5053	切妻型 瓦葺き	瓦	SK02 T字地 下窓	7.7cm	7.7cm	9.9	9.9	SK02 地、T9 SK02	
5054	土師器	土器	排水溝	排水溝	排水溝	6.5	6.5	2.7	排水溝
5055	土師器	土器	排水溝	排水溝	排水溝	7.2	7.2	5.5	排水溝
5056	土師器	土器	排水溝	排水溝	排水溝	8.2	8.2	5.1	排水溝
5057	土師器	土器	排水溝	排水溝	排水溝	7.9	7.9	6.5	排水溝
5058	土師器	土器	排水溝	排水溝	排水溝	7.7	7.7	4.3	排水溝
5059	土師器	土器	排水溝	排水溝	排水溝	7.9	7.9	4.7	排水溝
5060	土師器	土器	排水溝	排水溝	排水溝	8.2	8.2	4.7	排水溝
5061	土師器	土器	排水溝	排水溝	排水溝	8.3	8.3	5.8	排水溝
5062	土師器	土器	排水溝	排水溝	排水溝	8.6	8.6	4.5	排水溝
5063	土師器	土器	排水溝	排水溝	排水溝	8.2	8.2	6.8	排水溝
5064	土師器	土器	排水溝	排水溝	排水溝	8.8	8.8	5.6	排水溝
5065	土師器	土器	排水溝	排水溝	排水溝	6.5	6.5	4.4	排水溝
5066	土師器	土器	排水溝	排水溝	排水溝	10.8	10.8	7.4	排水溝
5067	土師器	土器	排水溝	排水溝	排水溝	11.1	11.1	9.3	排水溝
5068	土師器	土器	排水溝	排水溝	排水溝	11.1	11.1	7.1	排水溝
5069	土師器	土器	排水溝	排水溝	排水溝	11.1	11.1	6.8	排水溝
5070	土師器	土器	排水溝	排水溝	排水溝	10.6	10.6	5.2	排水溝
5071	土師器	土器	排水溝	排水溝	排水溝	11	11	6	排水溝
5072	瓦葺き	瓦	排水溝	排水溝	排水溝	24.6	24.6	-	排水溝
5073	瓦葺き	瓦	排水溝	排水溝	排水溝	27.6	27.6	-	排水溝
5074	瓦葺き	瓦	排水溝	排水溝	排水溝	30.2	30.2	-	排水溝
5075	土師器	土器	排水溝	排水溝	排水溝	19.6	19.6	-	排水溝
5076	土師器	土器	排水溝	排水溝	排水溝	19.6	19.6	-	排水溝
5077	土師器	土器	排水溝	排水溝	排水溝	11.6	11.6	-	瓦葺き
5078	青磁	陶器	排水溝	排水溝	排水溝	15.5	15.5	-	排水溝
5079	滑り鉢	陶器	排水溝	排水溝	排水溝	35.5	35.5	-	排水溝
5080	土師器	土器	排水溝	排水溝	排水溝	31.2	31.2	-	排水溝
5081	土師器	土器	排水溝	排水溝	排水溝	18.6	18.6	-	排水溝
5082	磨光器	土器	SD105	SD105	SD105	35.6	35.6	4.5	SD105
5083	丸瓦	瓦	排水溝	排水溝	排水溝	13.1	13.1	9.5	排水溝
5084	丸瓦	瓦	排水溝	排水溝	排水溝	13.1	13.1	9.5	排水溝
5085	丸瓦	瓦	排水溝	排水溝	排水溝	13.1	13.1	9.5	排水溝
5086	丸瓦	瓦	排水溝	排水溝	排水溝	13.1	13.1	9.5	排水溝
5087	丸瓦	瓦	排水溝	排水溝	排水溝	13.1	13.1	9.5	排水溝
5088	土師器	土器	排水溝	排水溝	排水溝	8.5	8.5	4.6	排水溝
5089	土師器	土器	排水溝	排水溝	排水溝	8.6	8.6	5.1	排水溝
5090	土師器	土器	排水溝	排水溝	排水溝	8.8	8.8	5.4	排水溝
5091	土師器	土器	排水溝	排水溝	排水溝	8.2	8.2	2.7	排水溝
5092	土師器	土器	排水溝	排水溝	排水溝	8.7	8.7	1.6	排水溝
5093	土師器	土器	排水溝	排水溝	排水溝	8.6	8.6	5.3	排水溝
5094	土師器	土器	排水溝	排水溝	排水溝	9.2	9.2	6.7	排水溝
5095	瓦葺き	瓦	排水溝	排水溝	排水溝	9	9	-	排水溝
5096	土師器	土器	排水溝	排水溝	排水溝	13.8	13.8	2	排水溝
5097	土師器	土器	排水溝	排水溝	排水溝	12.2	12.2	2.9	排水溝
5098	土師器	土器	排水溝	排水溝	排水溝	13.8	13.8	2.2	排水溝
5099	瓦葺き	瓦	排水溝	排水溝	排水溝	34.4	34.4	2.8	排水溝
5100	瓦葺き	瓦	排水溝	排水溝	排水溝	13.1	13.1	3.6	排水溝

第5表-3 1992年度調査の出土遺物

図版	遺物番号	種類	器種	地区	差異	層位	口径	底径	高さ	備考
	5101	灰釉?	壺	坂		鉢輪～縁各部 砂輪～縁2次旋出面	3.9	5		通A1-No.3-No.4
	5102	灰陶	壺	坂		砂輪～縁1次旋出面	1=7.6	w=3.3		通A1-No.1-No.2
	5103	土師器	土瓶	坂		砂輪～縁1次旋出面 馬蹄形				通A1-No.2-No.4
	5104	土師器	土瓶	坂		馬蹄形				通A1-No.2-No.4
	5105	土師器	土瓶	坂		馬蹄形				通A1-No.2-No.4
	5106	土師器	土瓶	坂		馬蹄形				通A1-No.2-No.4
	5107	土師器	土瓶	坂		馬蹄形				通A1-No.2-No.4
	5108	土師器	土瓶	坂		馬蹄形				通A1-No.1-No.2
	5109	?	壺	坂		砂輪～縁1次旋出面	1=7.6	w=3.3		通A1-No.1-No.2
	5110	丹波焼	壺	坂		砂輪～縁1次旋出面	44.6	w=78.8	50.9	十勝留め土焼
	5111	土師器	壺	坂		砂輪～縁1次旋出面	8.6	1.2		
	5112	土師器	壺	坂		砂輪～縁1次旋出面	1.1		3	
	5113	土師器	壺	坂		砂輪～縁1次旋出面	7.8		1.8	
	5114	土師器	壺	坂		砂輪～縁1次旋出面	13.9		2.6	
	5115	土師器	壺	坂		砂輪～縁1次旋出面	13.5		2.6	
	5116	土師器	壺	坂		砂輪～縁1次旋出面	7.8		1.1	
	5117	土師器	壺	坂		砂輪～縁1次旋出面	8.4		1.4	
	5118	土師器	壺	坂		砂輪～縁1次旋出面	8		1.6	
	5119	土師器	壺	坂		砂輪～縁1次旋出面	7.7		1.9	
	5120	土師器	壺	坂		砂輪～縁1次旋出面	7.3		1.4	
	5121	土師器	壺	坂		砂輪～縁1次旋出面	13.1		2.8	
	5122	土師器	壺	坂		砂輪～縁1次旋出面	11.8			
	5123	土師器	壺	坂		砂輪～縁1次旋出面	8.8		1.3	
	5124	土師器	壺	坂		砂輪～縁1次旋出面	8.7		1.3	
	5125	土師器	壺	坂		砂輪～縁1次旋出面	25.3	w=23.8		
	5126	?	壺	坂		砂輪～縁1次旋出面				
	5127	?	壺	坂		砂輪～縁1次旋出面				
	5128	?	壺	坂		砂輪～縁1次旋出面				
	5129	?	壺	坂		砂輪～縁1次旋出面				
	5130	瓦	瓦	坂		砂輪～縲合部				
	5131	土師器	壺	坂		砂輪～縲合部				
	5132	土師器	壺	坂		砂輪～縲合部				
	5133	土師器	壺	坂		砂輪～縲合部				
	5134	陶管	管	坂		砂輪～縲合部				
	5135	瓦	瓦	坂		砂輪～縲合部				
	5136	陶管	管	坂		砂輪～縲合部				
	5137	陶管	管	坂		砂輪～縲合部				
									50	

第6表-1 1994年度調査の出土遺物

区分	遺物番号	絞り	地区	差種	遺構	層位	口径	底径	高さ	備考
6001	6001	土師器	里	A	S201	茶葉地	8.6	6.6	1.5	井戸内方上層
6002	6002	土師器	里	A	S201	茶葉地	8.3	6.7	1.5	井戸内方上層
6003	6003	土師器	里	A	S201	茶葉地	8.5	6.4	1.4	井戸内方上層
6004	6004	土師器	里	A	S201	茶葉地	8.1	6.1	2.4	井戸内方上層・堀裏裏手・西面-60~-140
6005	6005	瓦	外	A	S201	茶葉地	8.1	6.1	2.4	井戸内方下層・井戸内方上層
6006	6006	瓦	外	A	S201	茶葉地	8.1	6.1	2.4	井戸内方下層・井戸内方上層
6007	6007	土師器	里	A	S201	瓦色土	8.5	7.7	1.5	井戸内方下層・井戸内方上層
6008	6008	土師器	里	A	S201	瓦色土	8.5	7.7	1.5	井戸内方下層・井戸内方上層
6009	6009	瓦	外	A	S201	瓦色土	8.1	6.1	2.4	井戸内方下層・井戸内方上層
6010	6010	瓦	外	A	S201	瓦色土	8.1	6.1	2.4	井戸内方下層・井戸内方上層
6011	6011	土師器	里	A	S201	瓦色地	7.8	7	1.4	井戸内方下層
6012	6012	土師器	里	A	S201	瓦色地	8.3	7.3	1.2	井戸内方下層
6013	6013	土師器	里	A	S201	瓦色地	7.8	6.8	1.2	井戸内方下層
6014	6014	土師器	里	A	S201	瓦色地	9.1	7.8	1.5	井戸内方下層
6015	6015	土師器	里	A	S201	瓦色地	7.9	7	1.6	井戸内方下層
6016	6016	土師器	里	A	S201	瓦色地	8.1	6.8	1.6	井戸内方下層
6017	6017	土師器	里	A	S201	瓦色地	8.1	6.1	1.7	井戸内方下層
6018	6018	土師器	里	A	S201	瓦色地	8.1	6.1	2.1	井戸内方下層
6019	6019	土師器	里	A	S201	瓦色地	8.6	7.1	2.7	ミニチュア上層
6020	6020	土師器	里	A	S201	井戸内方色土	8.9	8.1	1.2	井戸内方下層
6021	6021	土師器	里	A	S201	井戸内方色土	8.2	7.2	1.3	井戸内方下層
6022	6022	土師器	里	A	S201	井戸内方色地	8.4	4.1	1.5	井戸内方下層
6023	6023	土師器	里	A	S201	井戸内方色地	8.5	6.8	1.7	井戸内方下層
6024	6024	土師器	里	A	S201	井戸内方色地	8.8	4.8	1.5	井戸内方下層
6025	6025	土師器	里	A	S201	井戸内方色地	11.3	7.2	2.2	井戸内方下層
6026	6026	土師器	里	A	S201	井戸内方色地	11.1	7.1	2.4	井戸内方下層
6027	6027	土師器	里	A	S201	井戸内方色地	11.6	7.3	2.5	井戸内方下層
6028	6028	土師器	里	A	S201	井戸内方色地	11.7	7.8	2.5	井戸内方下層
6029	6029	土師器	里	A	S201	井戸内方色地	10.9	7	2.6	井戸内方下層
6030	6030	土師器	里	A	S201	井戸内方色土	10.4	7	2.6	井戸内方下層
6031	6031	土師器	里	A	S201	井戸内方色地	20.1	—	—	井戸内方下層
6032	6032	須恵器	里	A	S201	井戸内方色地	12.2	—	—	井戸内方下層
6033	6033	須恵器	里	A	S201	井戸内方色地	12.2	—	—	井戸内方下層
6034	6034	瓦	外	A	S201	井戸内方色土	31	—	—	井戸内方下層
6035	6035	瓦	外	A	S201	井戸内方色土	35.4	—	—	井戸内方下層
6036	6036	瓦	外	A	S201	井戸内方色土	10.4	—	—	井戸内方下層
6037	6037	瓦	外	A	S201	井戸内方色地	11.3	—	—	井戸内方下層
6038	6038	瓦	外	A	S201	井戸内方色地	11.6	—	—	井戸内方下層
6039	6039	瓦	外	A	S201	井戸内方色地	11.7	—	—	井戸内方下層
6040	6040	瓦	外	A	S201	井戸内方色地	11.7	—	—	井戸内方下層
6041	6041	瓦	外	A	S201	井戸内方色地	11.9	—	—	井戸内方下層
6042	6042	瓦	外	A	S201	井戸内方色地	12	—	—	井戸内方下層
6043	6043	瓦	外	A	S201	井戸内方色地	12.2	—	—	井戸内方下層
6044	6044	須恵器	外	A	S201	井戸内方色地	12.9	—	—	井戸内方下層
6045	6045	須恵器	外	A	S201	井戸内方色地	13.1	—	—	井戸内方下層
6046	6046	土師器	里	A	S201	井戸内方色地	14.3	—	—	井戸内方下層
6047	6047	土師器	里	A	S201	瓦	8	—	1.6	井戸内方下層
6048	6048	土師器	里	A	S201	瓦	8.7	—	1.3	井戸内方下層
6049	6049	土師器	里	A	S201	瓦	9.3	—	1.4	井戸内方下層

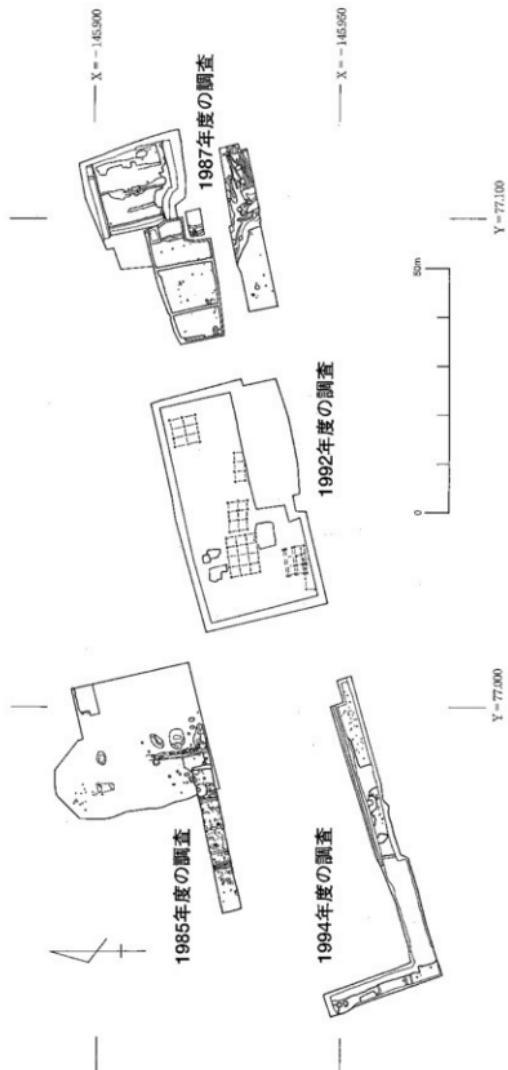
第6表－2 1994年度調査の出土遺物

図版	遺物番号	種別	地区	遺構	層位	断面	直径	高さ	備考
				P=20	海方				
6050	土師甕	直	A	A	pit		9.5	5.8	柱穴 天井丸の面一折
6051	土師甕	桶	A	A	pit		12.4	8	柱穴 人頭土坂の面一折
6052	土師甕	鉢	A	A	pit		14	8.3	柱穴
6053	土師甕	鉢	B			柱穴	7.4	7.4	柱穴
6054	土師甕	直				柱穴	7.5	8.2	
6055	土師甕	直				柱穴	8.2	7.2	
6056	土師甕	直				柱穴	8.3	7.2	
6057	土師甕	直				柱穴	8.4	6.6	
6058	土師甕	直				柱穴	8.4	6	
6059	土師甕	直				柱穴	8.5	3.5	
6060	土師甕	直				柱穴	8.6	6.7	
6061	土師甕	直				柱穴	8.8	6.9	
6062	土師甕	直				柱穴	8.8	7.5	
6063	土師甕	直				柱穴	8.8	7.5	
6064	土師甕	直				柱穴	9.2	7.7	東側入り口部
6065	土師甕	直				柱穴	9.4	6	鳥山石の危合層
6066	土師甕	直				柱穴	8.1	6.5	
6067	土師甕	直				柱穴	8.1	6.5	
6068	土師甕	直				柱穴	8.3	7.1	
6069	土師甕	直				柱穴	6	1.6	
6070	土師甕	直				柱穴	8.4	5.3	
6071	土師甕	直				柱穴	8.6	7.1	
6072	土師甕	直				柱穴	8.7	4.9	
6073	土師甕	直				柱穴	8.8	7.8	
6074	土師甕	直				柱穴	8.9	7.5	
6075	土師甕	直				柱穴	8.5	5.8	
6076	土師甕	直				柱穴	9.2	8.4	
6077	土師甕	直				柱穴	9.5	8.5	
6078	土師甕	直				柱穴	9	7.2	地山直上の危合層
6079	土師甕	直				柱穴	9	4.4	
6080	土師甕	直				柱穴	9.1	3.5	
6081	土師甕	直				柱穴	9.2	1.9	
6082	土師甕	直				柱穴	9.3	8.2	
6083	土師甕	直				柱穴	9.3	7.3	
6084	土師甕	直				柱穴	13.0	7.3	
6085	土師甕	直				柱穴	13.2	7.3	
6086	土師甕	直				柱穴	14.9	10.4	
6087	土師甕	直				柱穴	14.3	10.1	
6088	土師甕	直				柱穴	13.2	7.3	
6089	土師甕	直				柱穴	8.2	7.1	
6090	土師甕	直				柱穴	2.2	1.8	
6091	瓦器	直				柱穴	8.3	3.6	
6092	瓦器	直				柱穴	8.5	7.2	
6093	瓦器	直				柱穴	8.6	6.5	
6094	瓦器	直				柱穴	8.7	6.7	
6095	瓦器	直				柱穴	8.8	6.8	
6096	瓦器	直				柱穴	8.8	4.9	
6097	瓦器	直				柱穴	13.4	4.9	
6098	瓦器	直				柱穴	14.2	4.4	

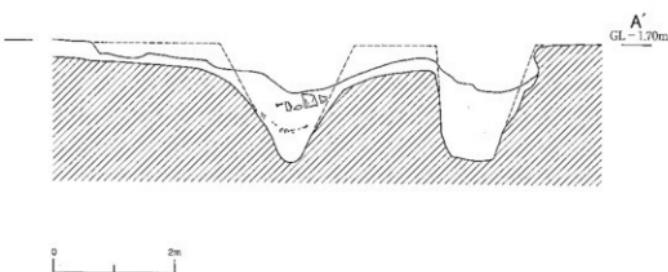
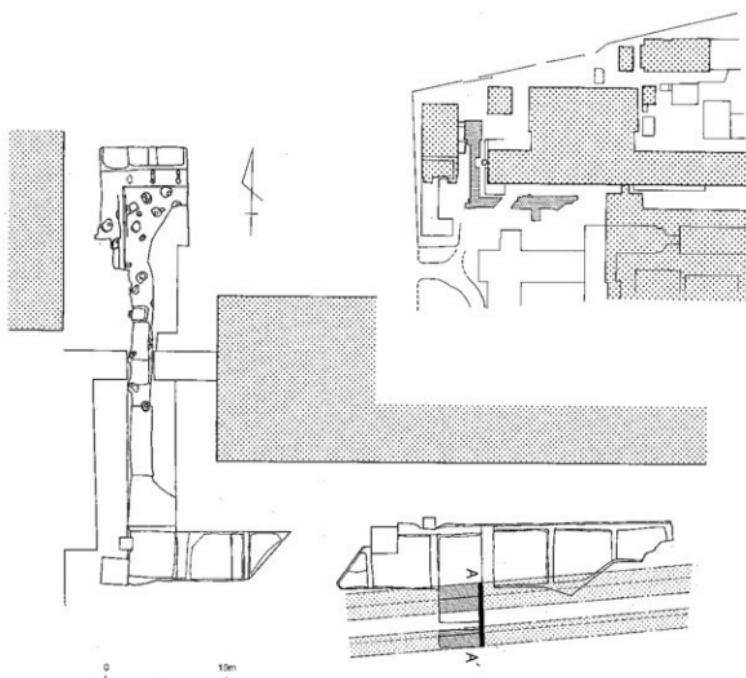
第6表-3 1994年度調査の出土遺物

区分	遺物番号	種別	属性	地区	通航	出土遺物			備考
						口座	窓口	層位	
IV-A	60009	丸型	鉄	東	通航	窓口	層位不明	15.1	4.8
	61000	丸型	銅	東	通航	窓口	層位不明	36.7	63
	6101	丸型	銅	東	通航	窓口	層位不明	16.1	4.5
	6102	丸型	銅	東	通航	窓口	層位不明	16.1	5.1
	6103	白磁	陶	西	通航	窓口	層位不明	6.2	4.6
	6104	白磁	陶	西	通航	窓口	層位不明	17.4	
	6105	白磁	陶	西	通航	窓口	層位不明	17.4	6.8
	6106	青磁	陶	西	通航	窓口	層位不明	15.9	
	6107	青磁	陶	西	通航	窓口	層位不明	15.8	
	6108	青磁	陶	西	通航	窓口	層位不明	16.2	
	6109	青磁	陶	西	通航	窓口	層位不明	15.3	3.2
	6113	小動物	土器	西	通航	窓口	層位不明	1.35	4.7
	6114	瓦	特平瓦	西	通航	窓口	層位不明	1.1	
	S0004	石製品	陶	西	通航	窓口	層位不明	30.1	
	S0005	石製品	陶	西	通航	窓口	層位不明		

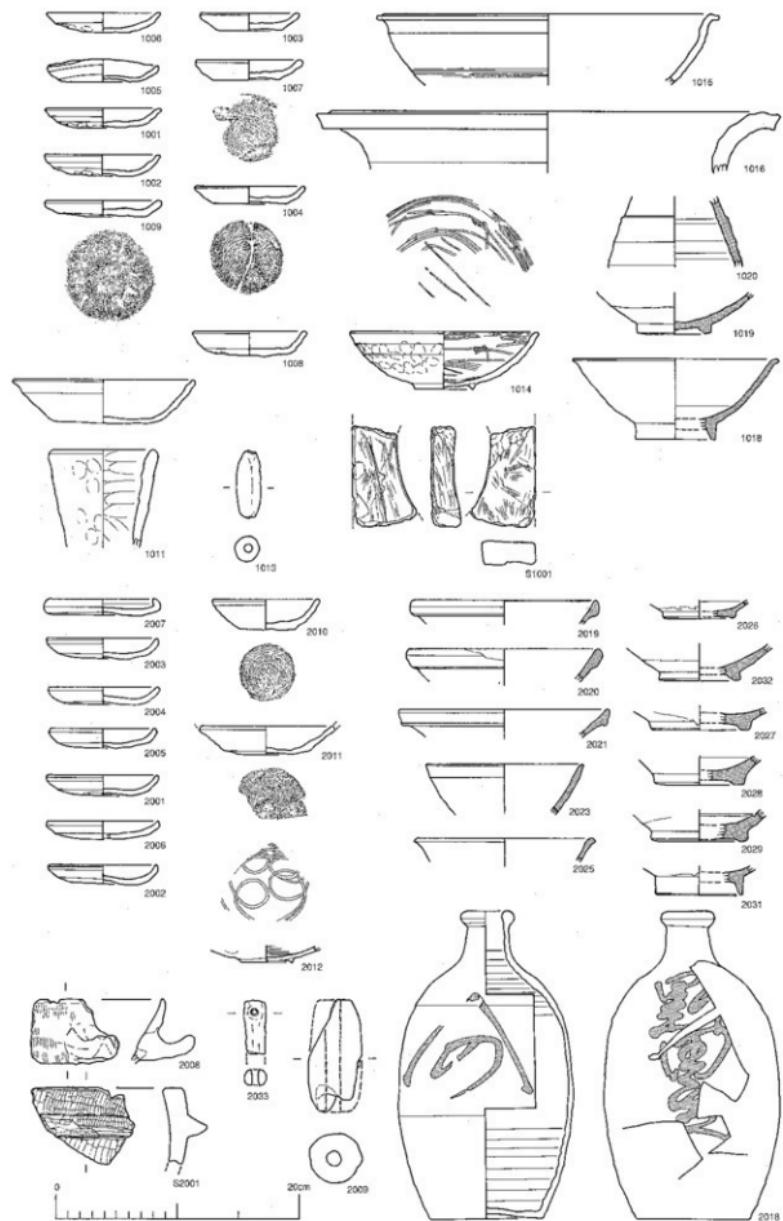
図版



調査区位置図 (1985~1994年)

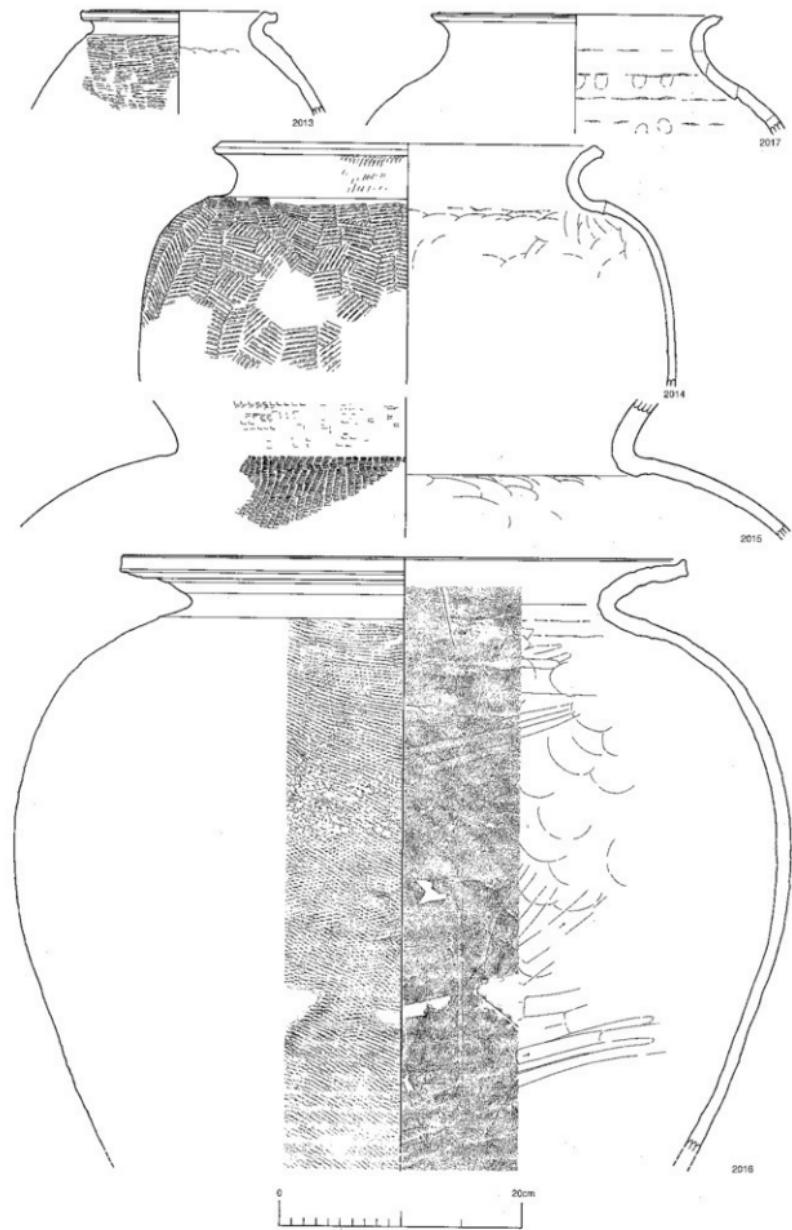


1981・1982年度調査遺構図

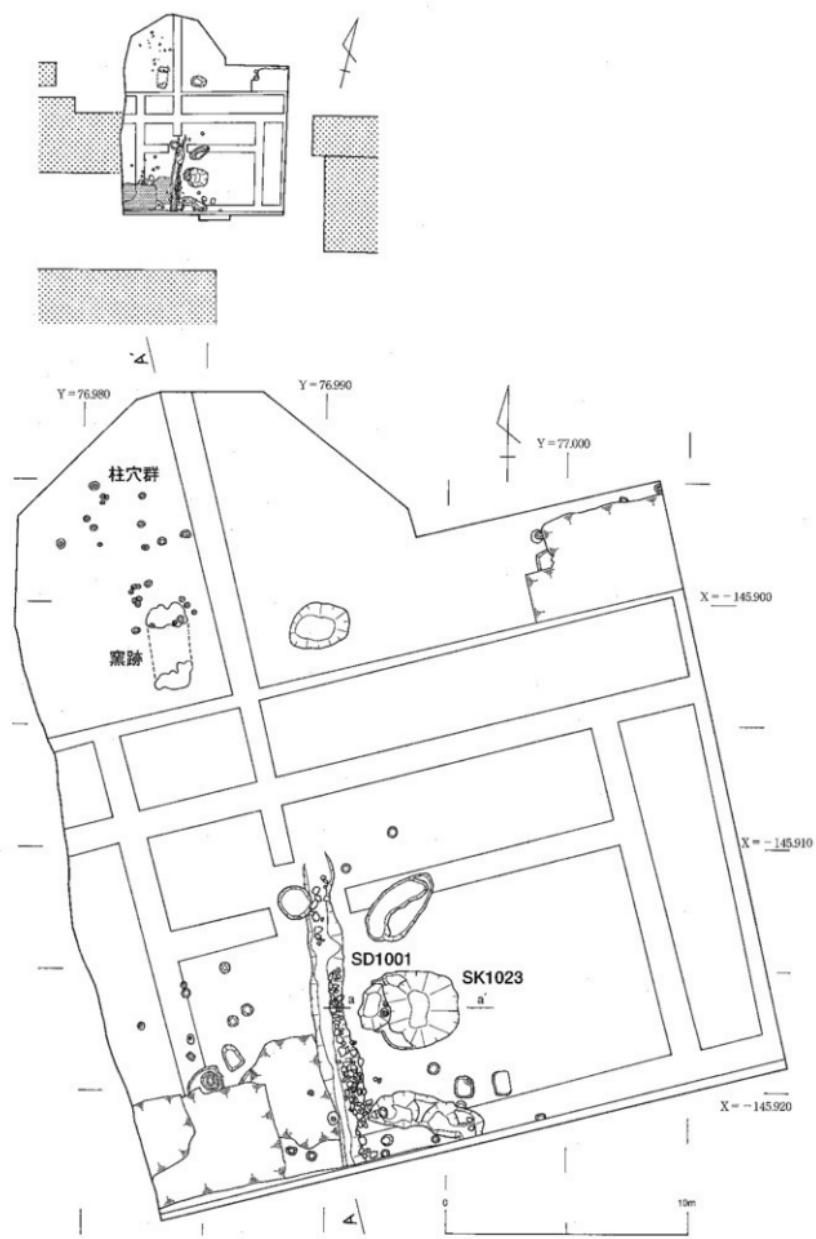


1981・1982年度調査出土遺物(1)

図版
四

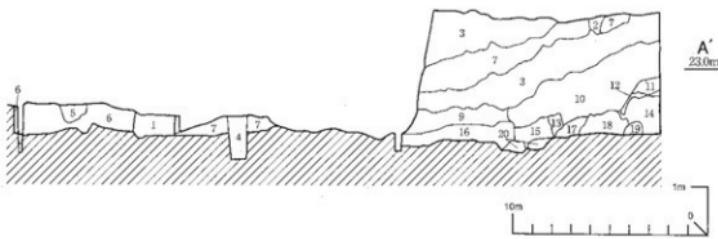


1981・1982年度調査出土遺物(2)

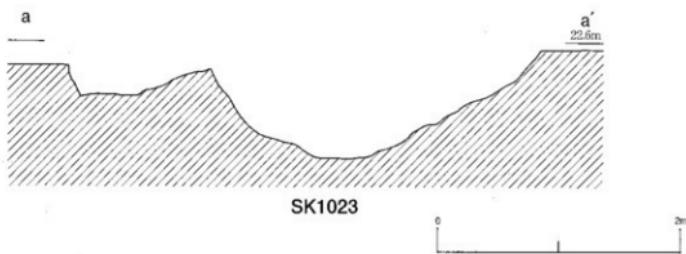
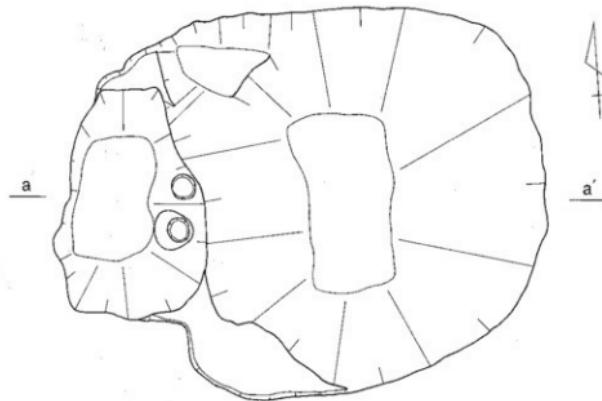


1985年度調査遺構図(1) 遺構全図

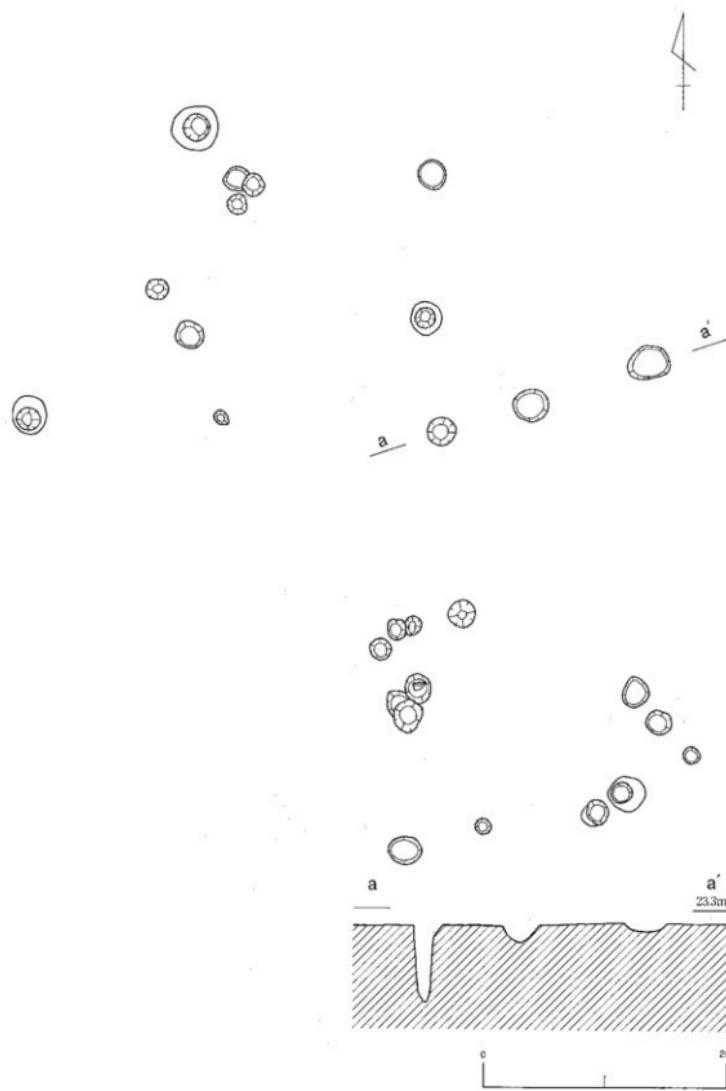
図版
六



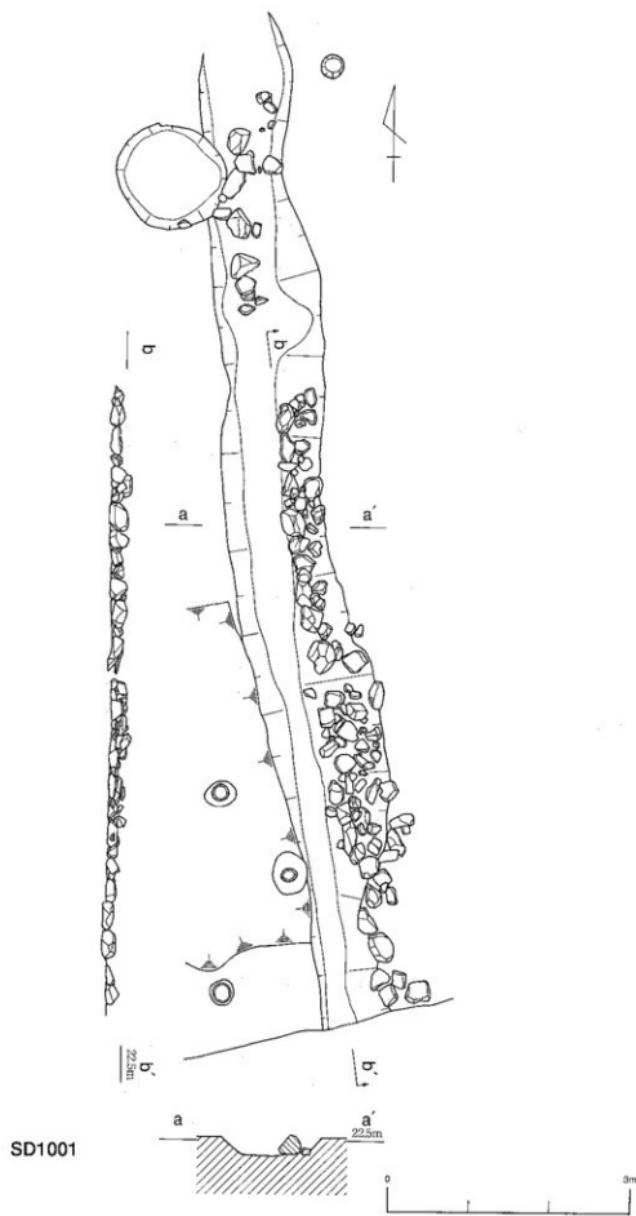
- 1. 茶由表面時の標めどし土
- 2. 明褐色シルト
- 3. 黒褐色シルト 遺物包含層
- 4. 黑色シルト ブロック状に黄色の風化した花コウ岩を含む
- 5. 黑色砂質シルト
- 6. 黑色シルト SD1001の埋土
- 7. 暗褐色シルト 風化した花コウ岩を含む
- 8. 暗褐色シルト
- 9. 暗褐色シルト
- 10. 暗褐色シルト 8に比し蓝色味が強い。
- 11. 明褐色砂 花コウ岩の風化土。
- 12. 暗褐色シルト 花コウ岩の風化土
- 13. 明褐色シルト 風化した花コウ岩を含む
- 14. 暗褐色シルト 11よりやや緑味が強い。
- 15. 暗褐色シルト 風化した花コウ岩を大量に含む
- 16. 明黒褐色シルト
- 17. 明黒褐色砂 花コウ岩の風化土
- 18. 暗褐色シルト
- 19. 暗黒褐色砂 11より黒味が強い
- 20. 明褐色シルト



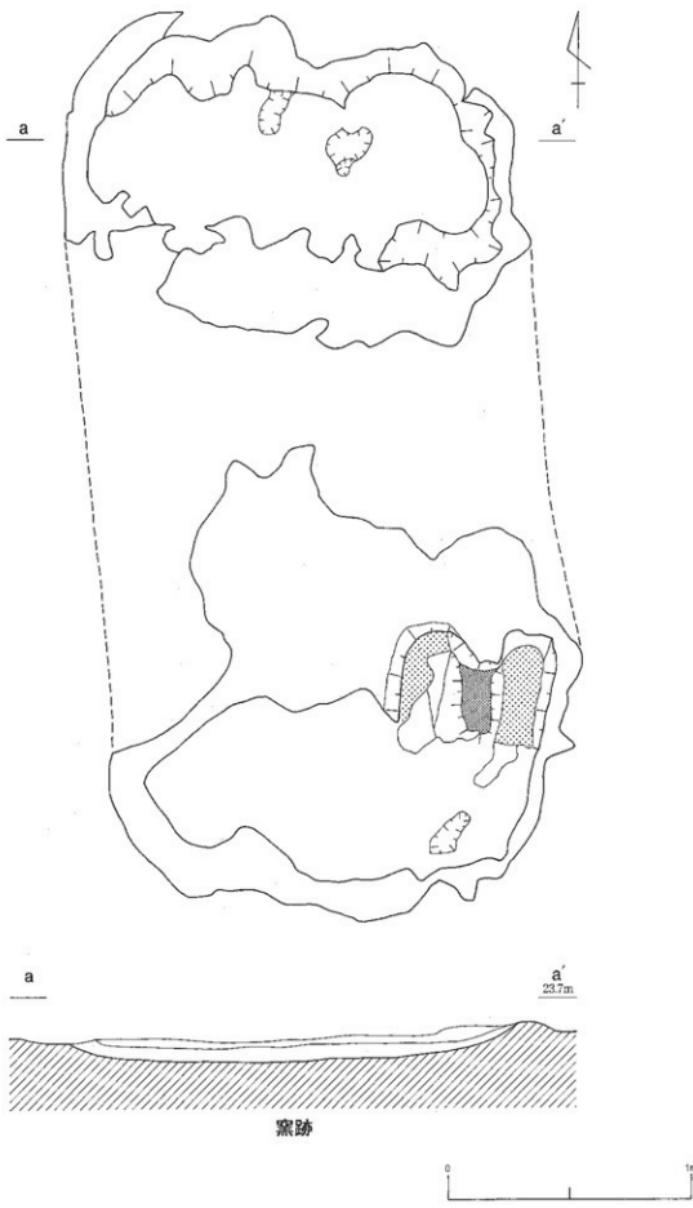
1985年度調査遺構図(2) 土層と土坑



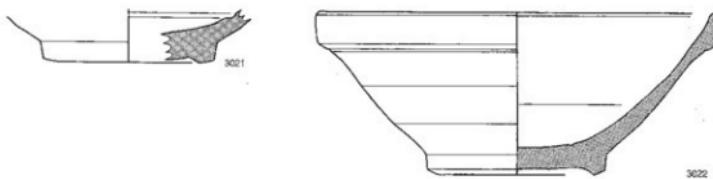
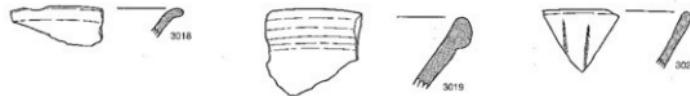
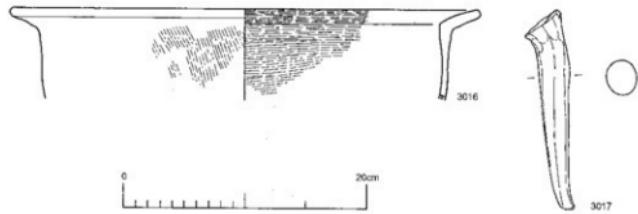
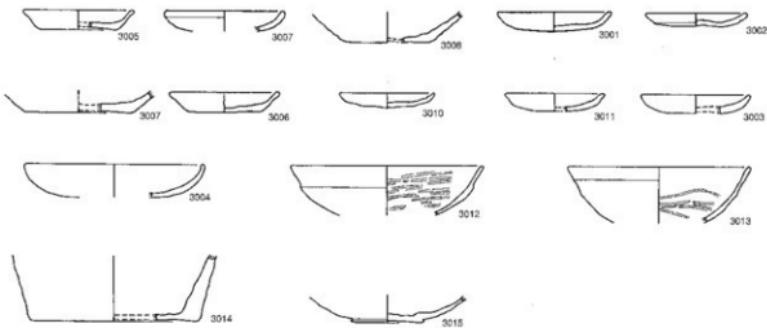
1985年度調査遺構図(3) 柱穴群



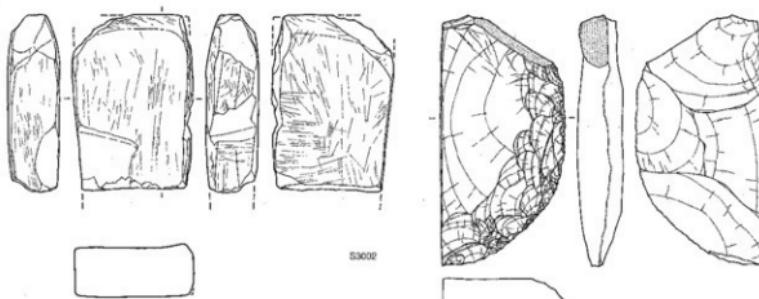
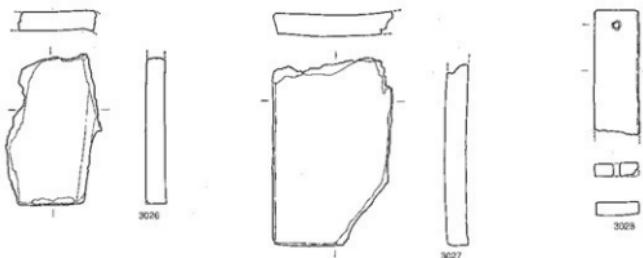
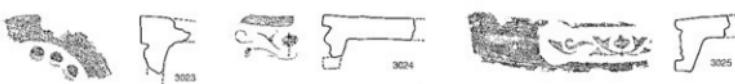
1985年度調査遺構図(4) 溝

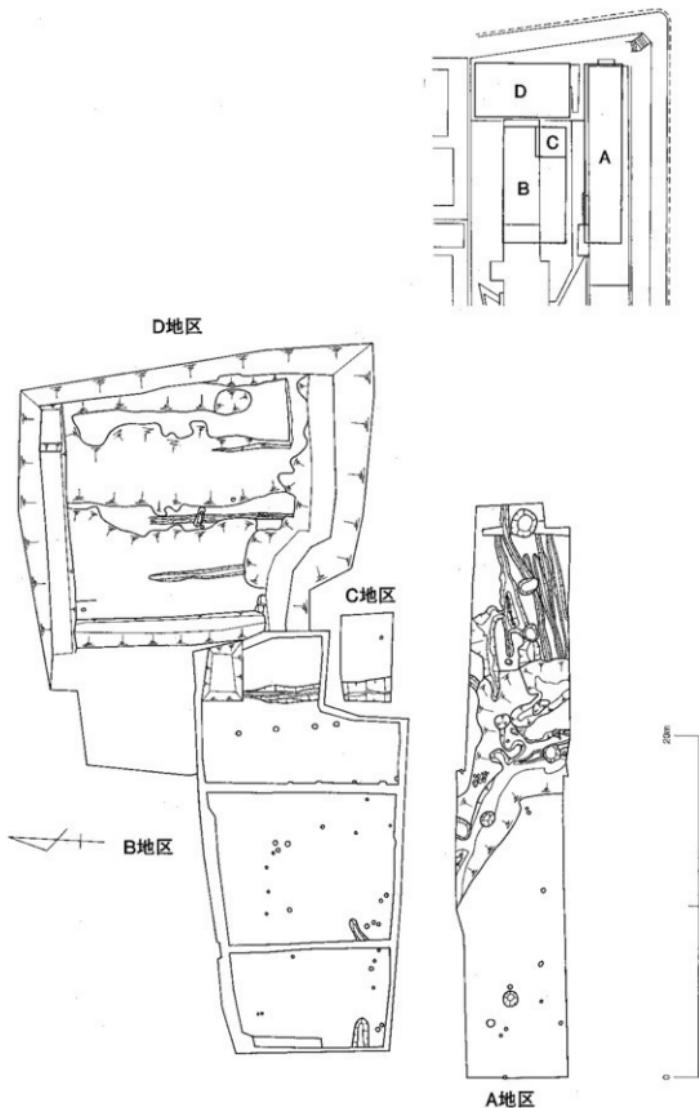


1985年度調査遺構図(5) 窯跡

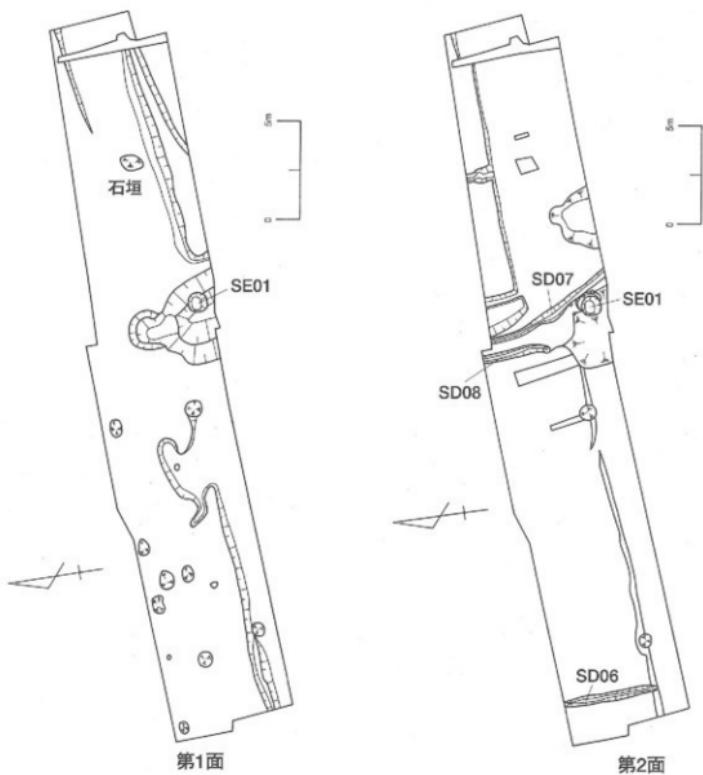
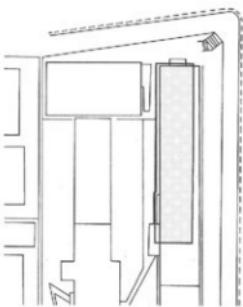


1985年度調査出土遺物(1)

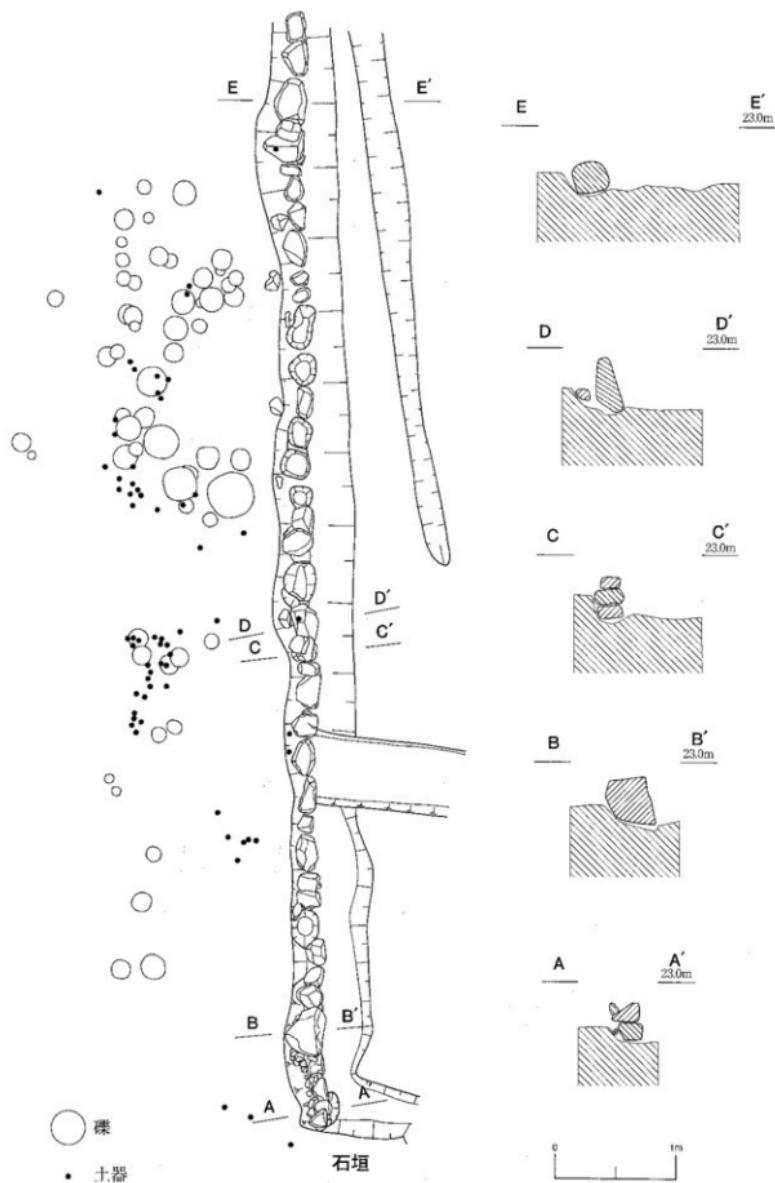




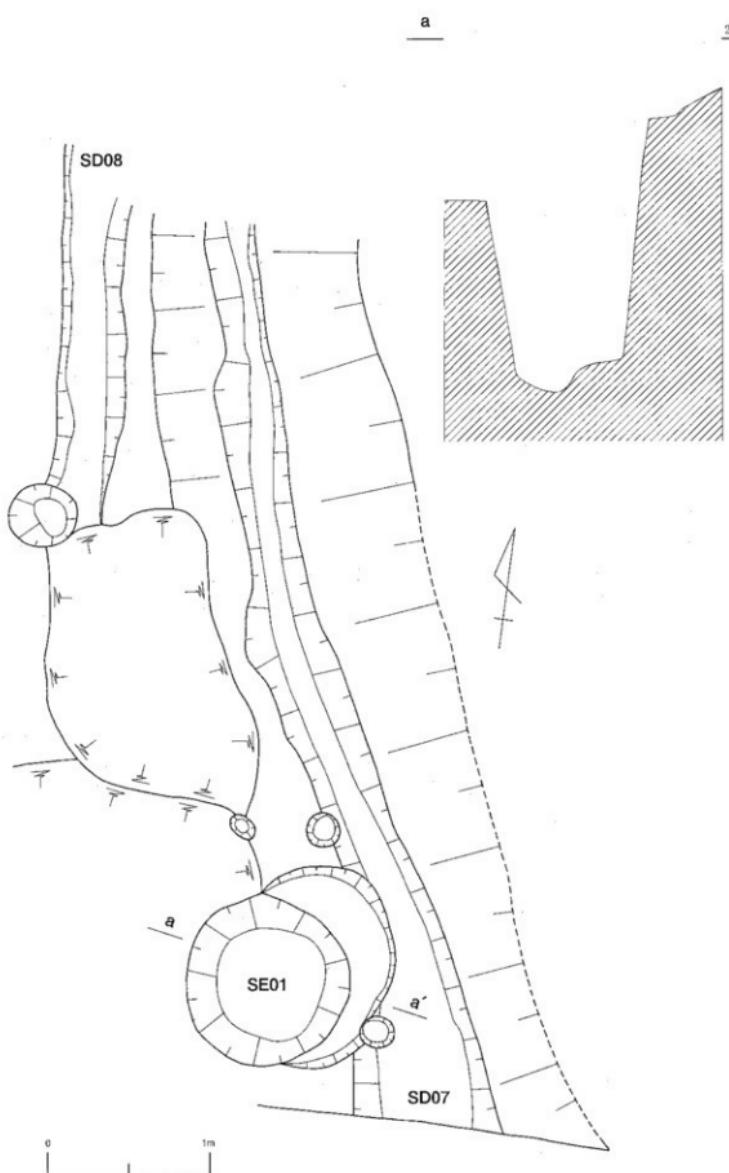
1987年度調査遺構図(1) 遺構全図



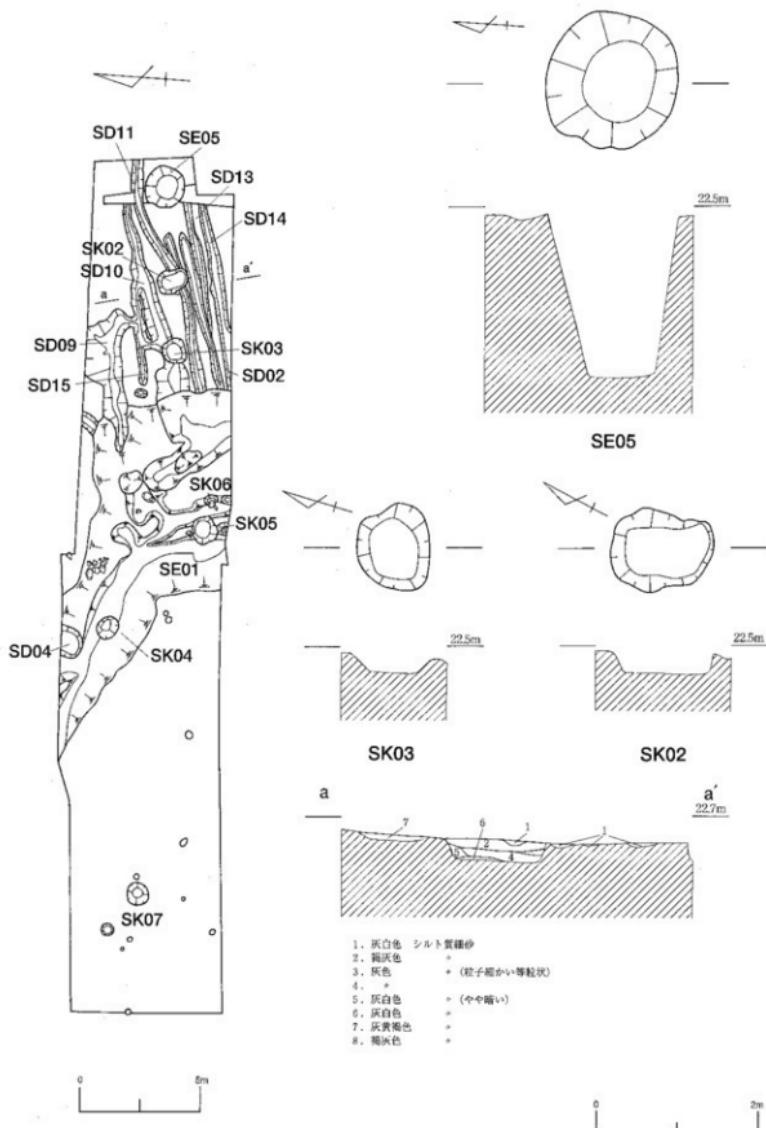
1987年度調査遺構図(2) A区1面・2面遺構



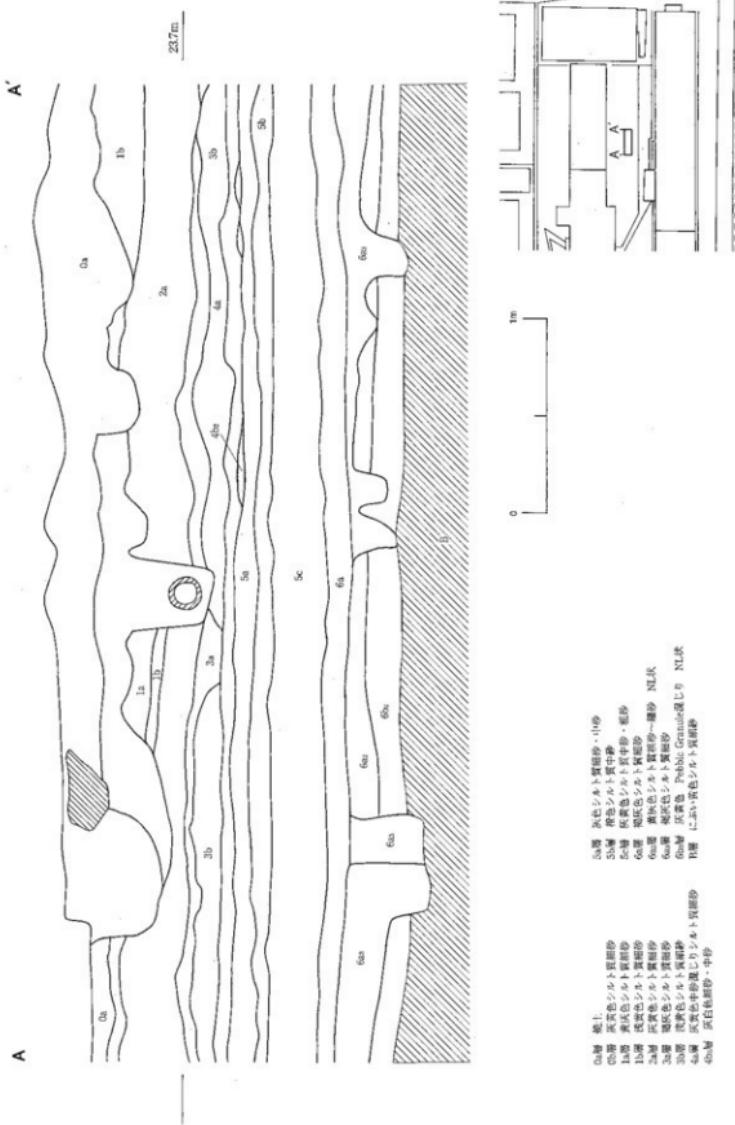
1987年度調査遺構図(3) 石垣



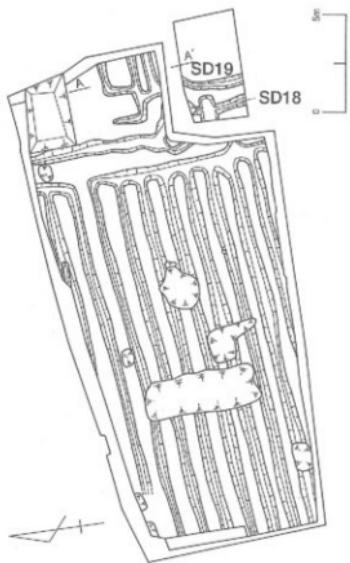
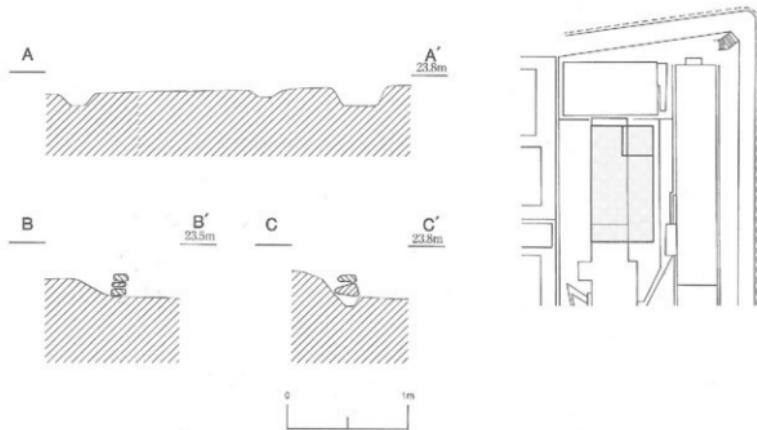
1987年度調査遺構図(4) 井戸・溝



1987年度調査遺構図(5) A区3面井戸・土坑・溝



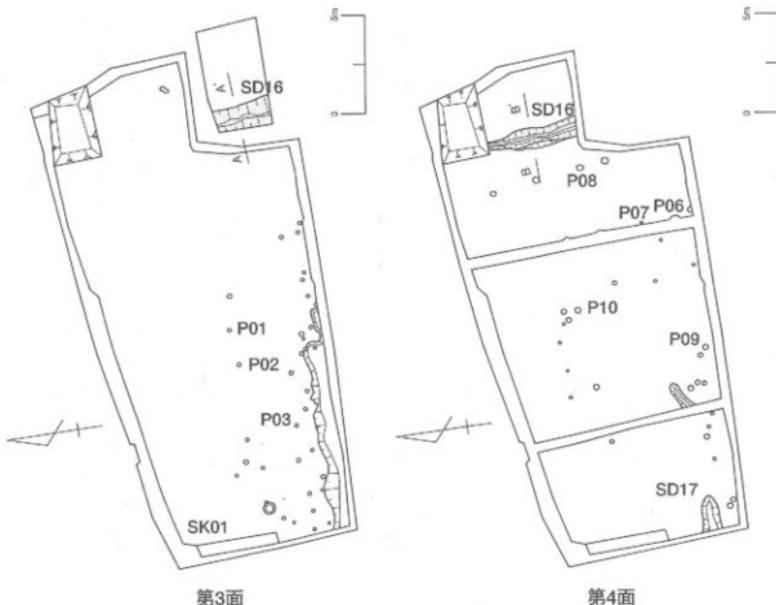
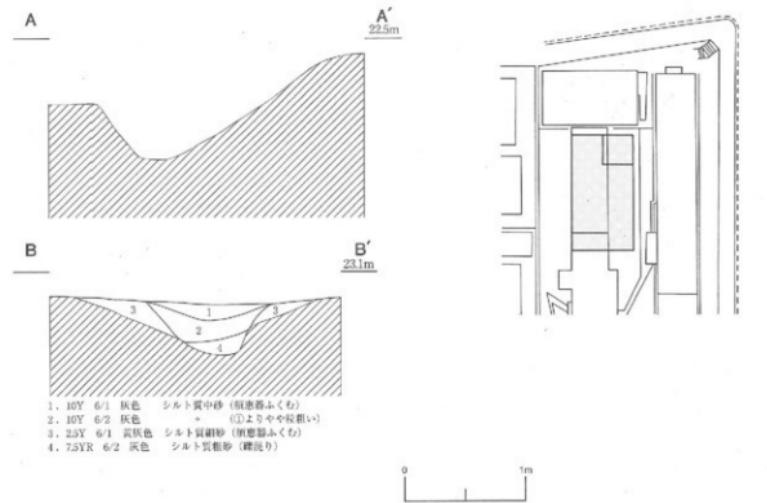
1987年度調査遺構図(6) B区土層断面図



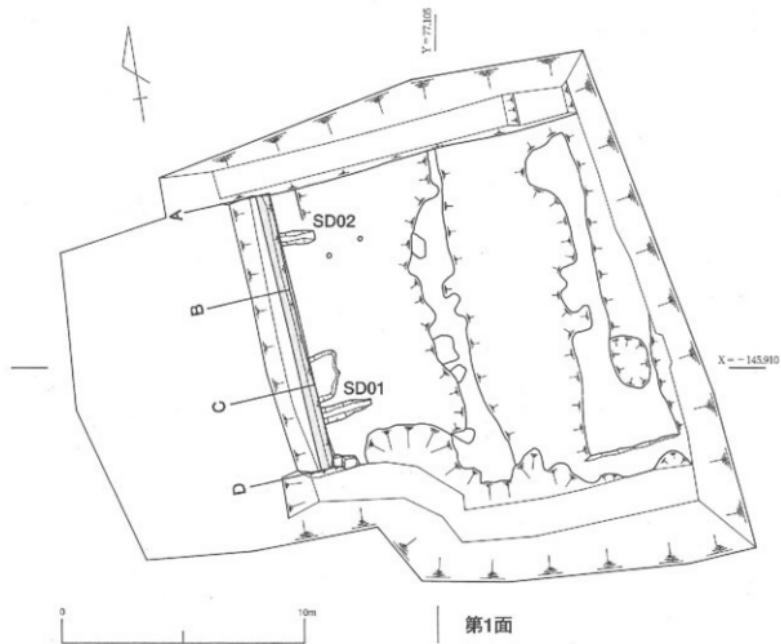
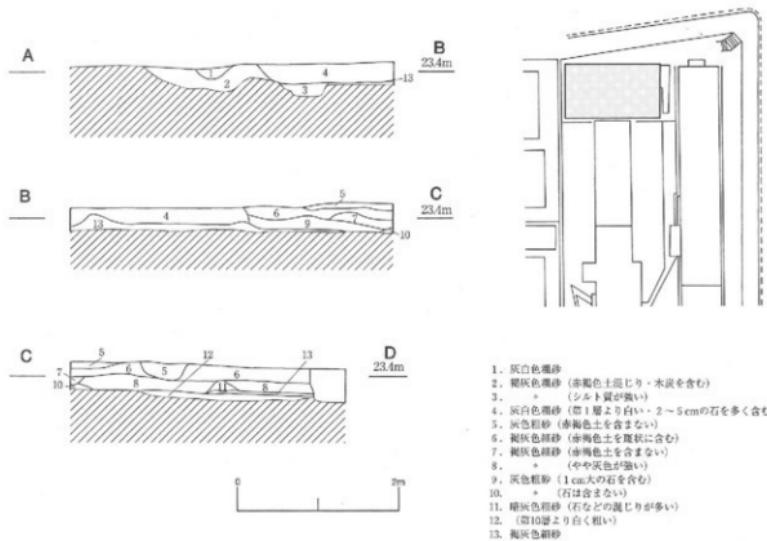
第1面



第2面

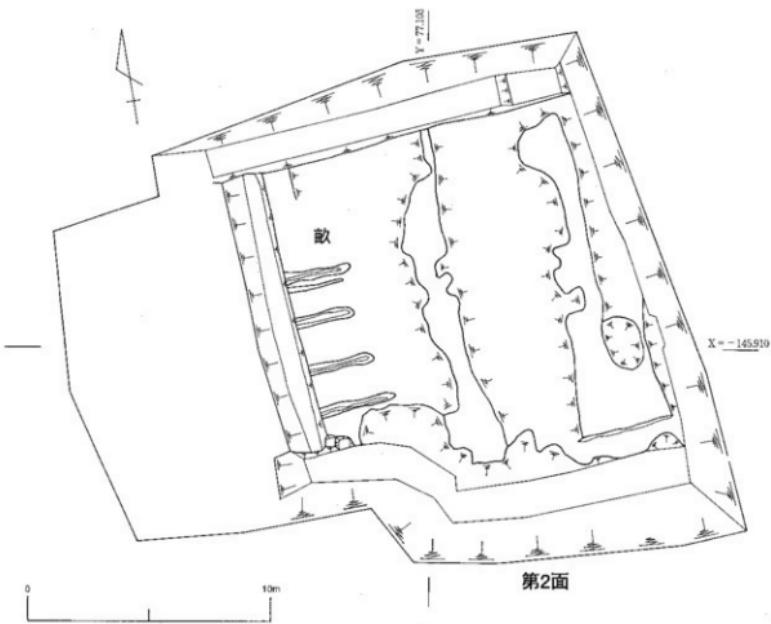


1987年度調査遺構図(8) B・C区3面・4面遺構

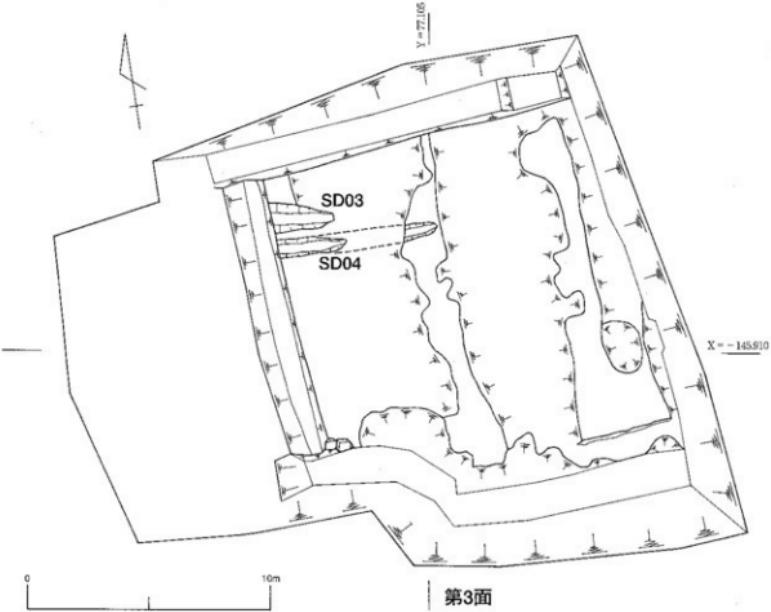


第一面

1987年度調査遺構図(9) D区土層断面図・1面遺構

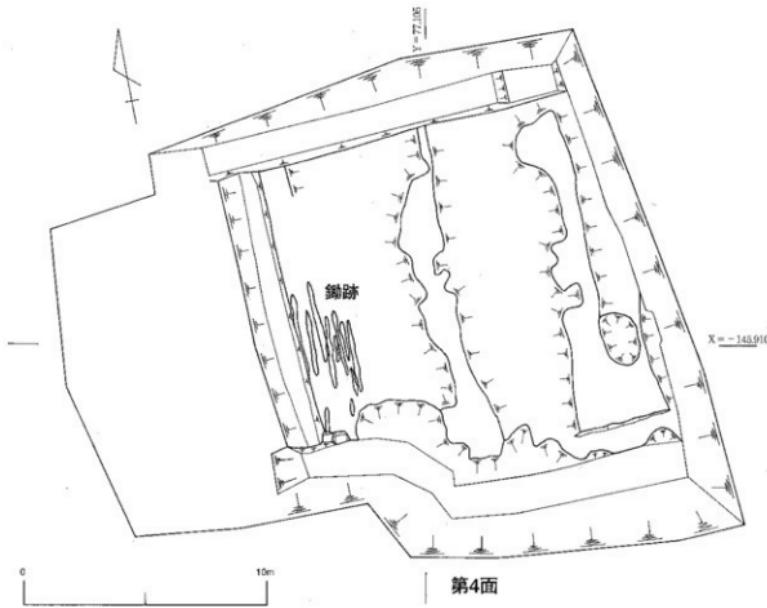


第2面

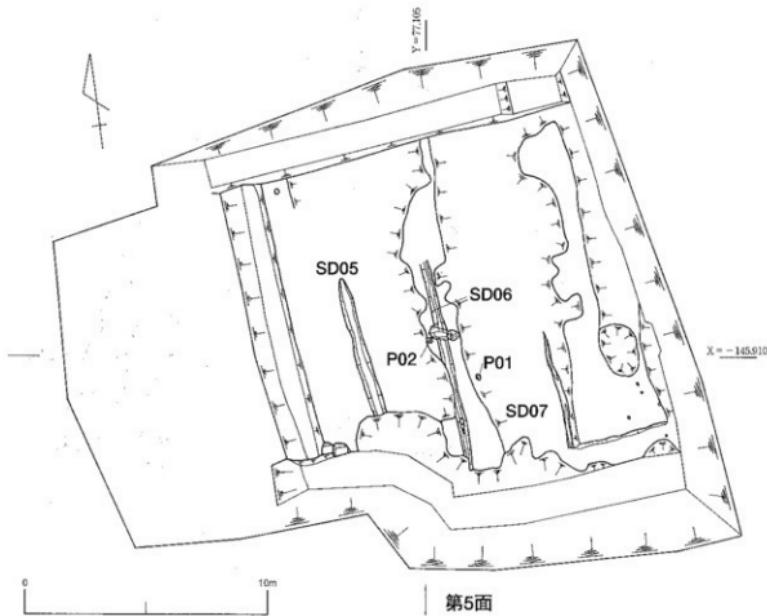


第3面

1987年度調査遺構図(10) D区2面・3面遺構

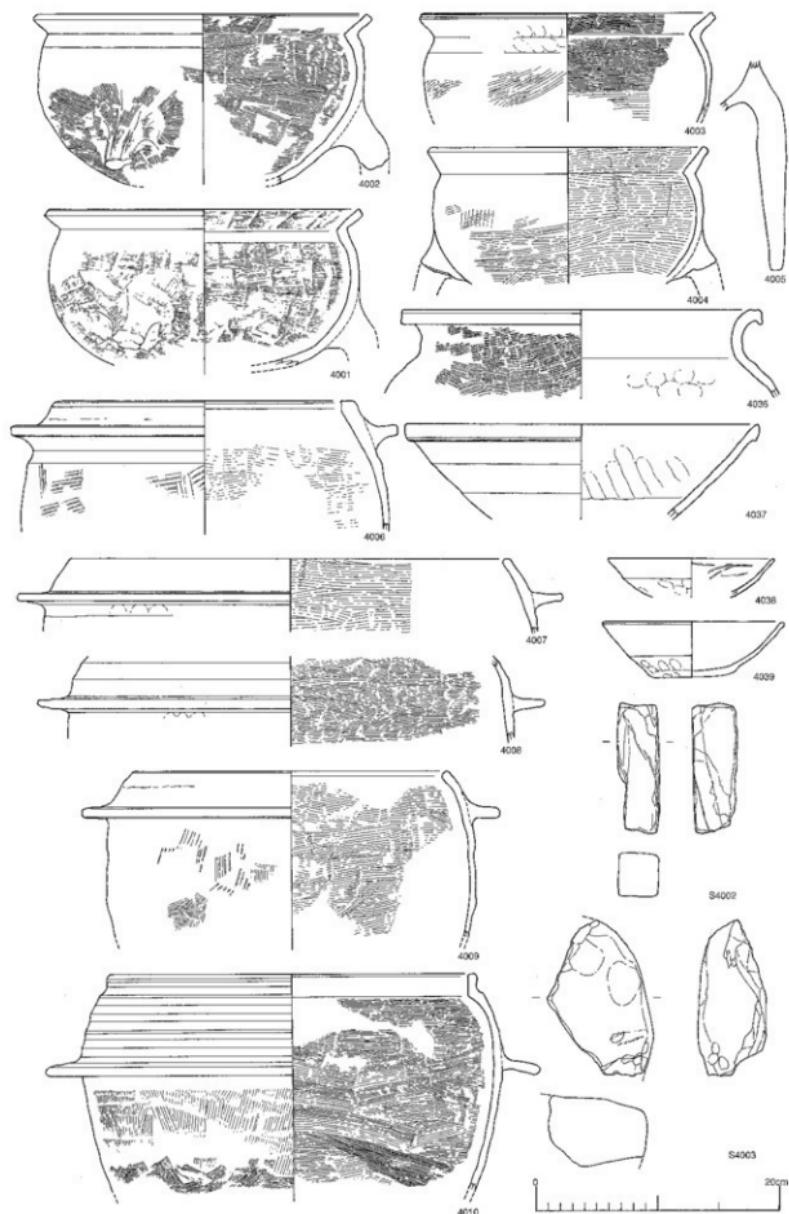


第4面



第5面

1987年度調査遺構図(11) D区4面・5面遺構図

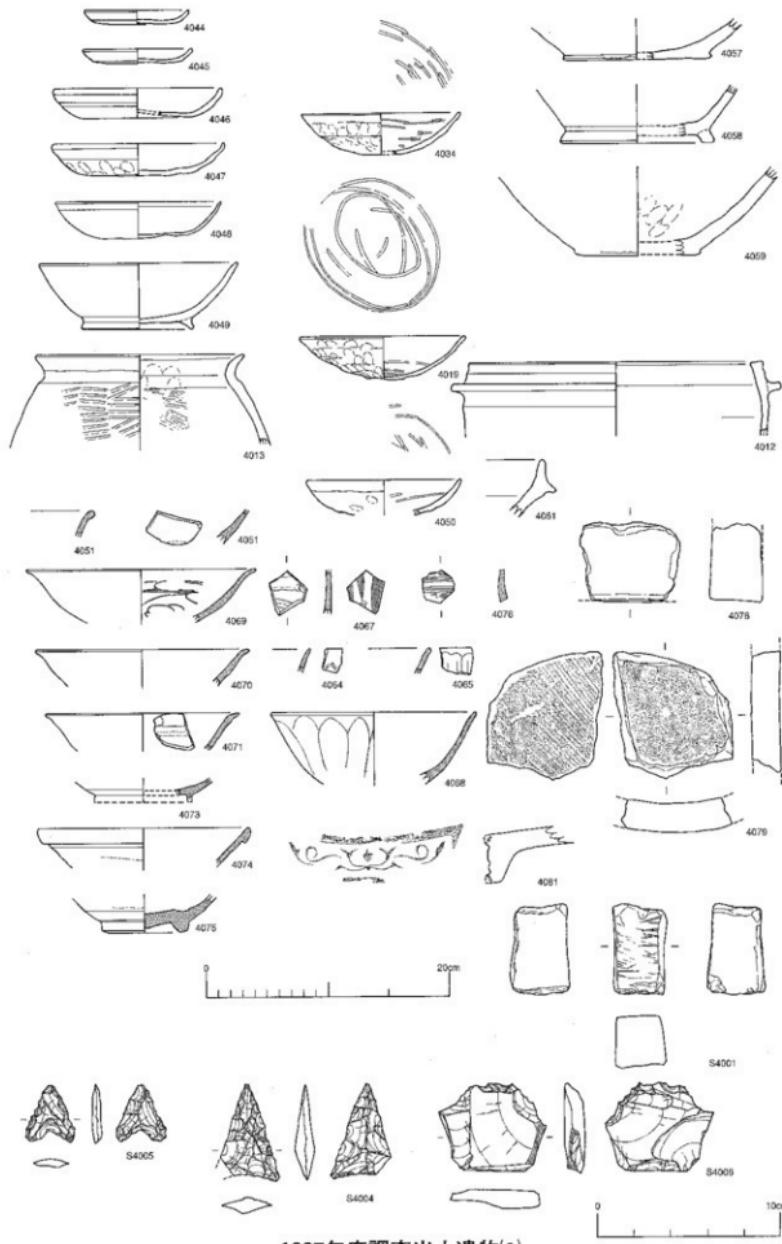


1987年度調査出土遺物(1)

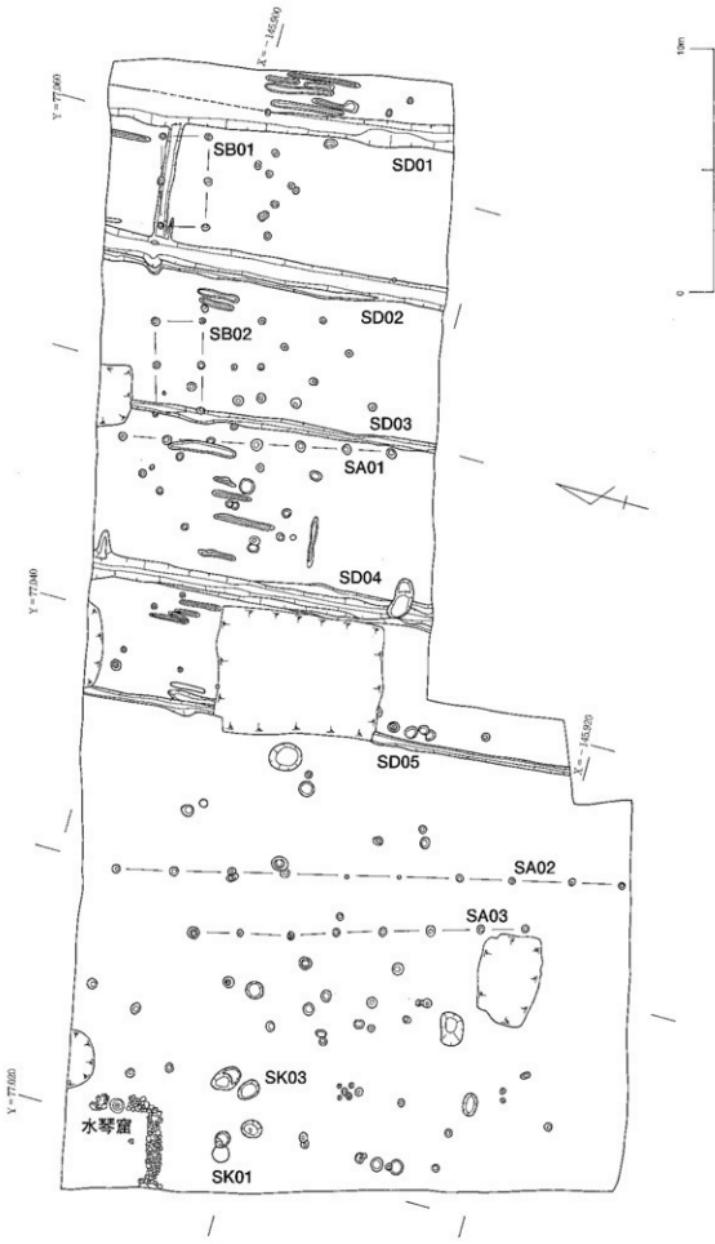
圖版二四



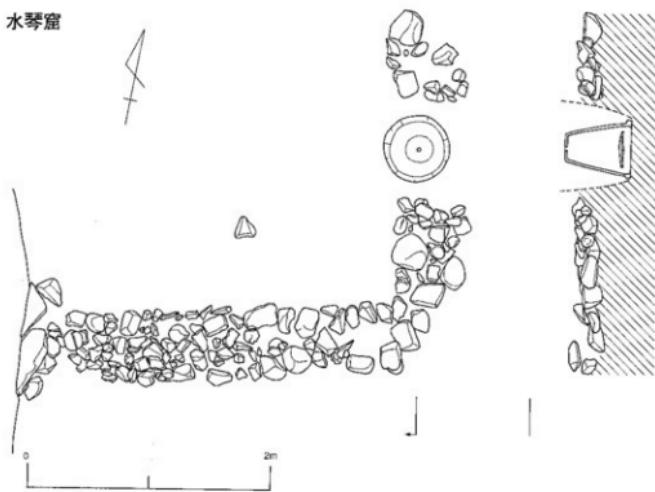
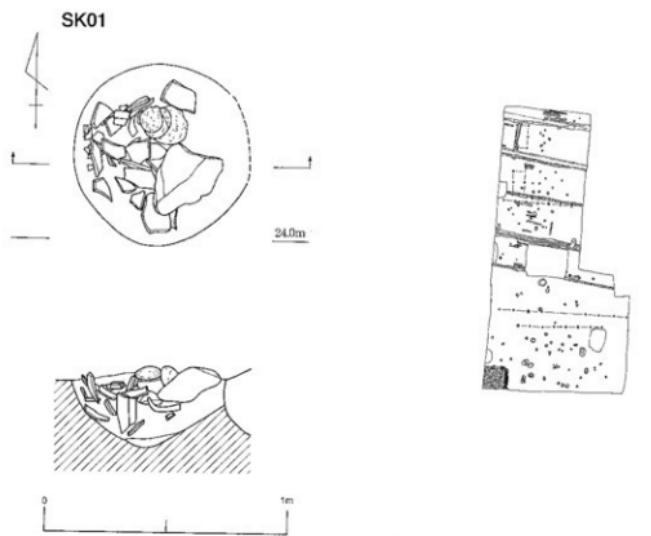
1987年度調查出土遺物(2)



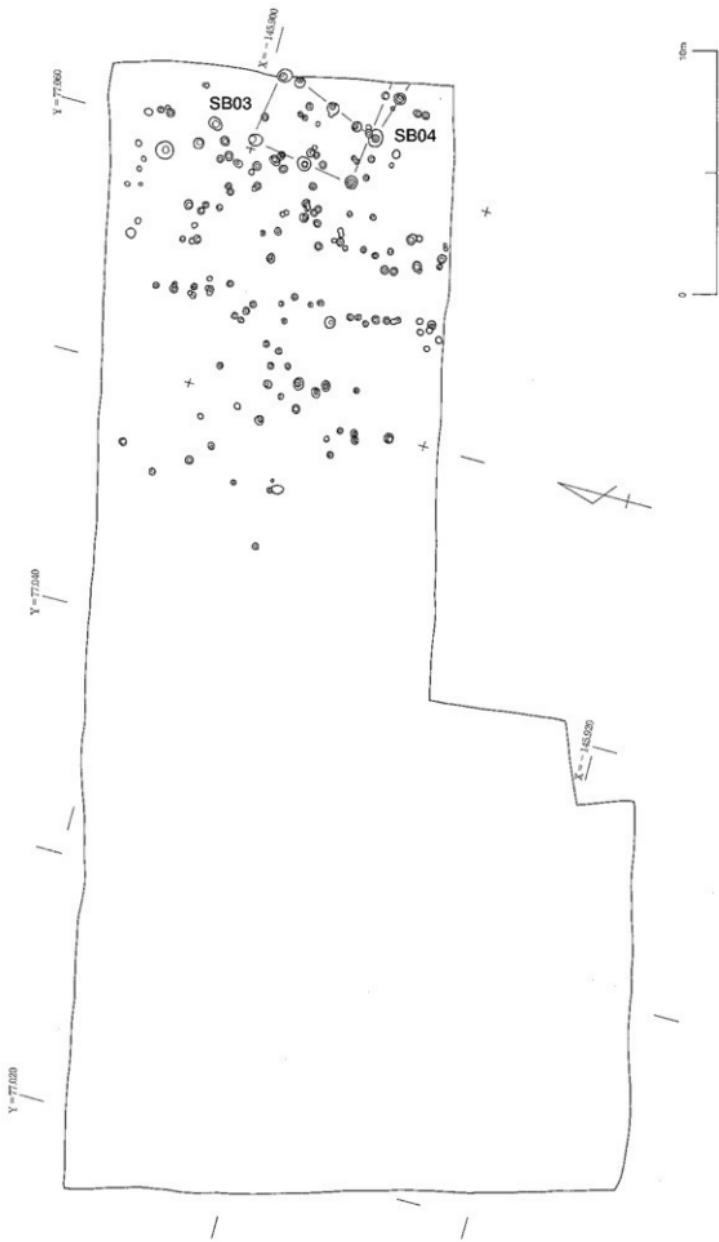
1987年度調查出土遺物(3)



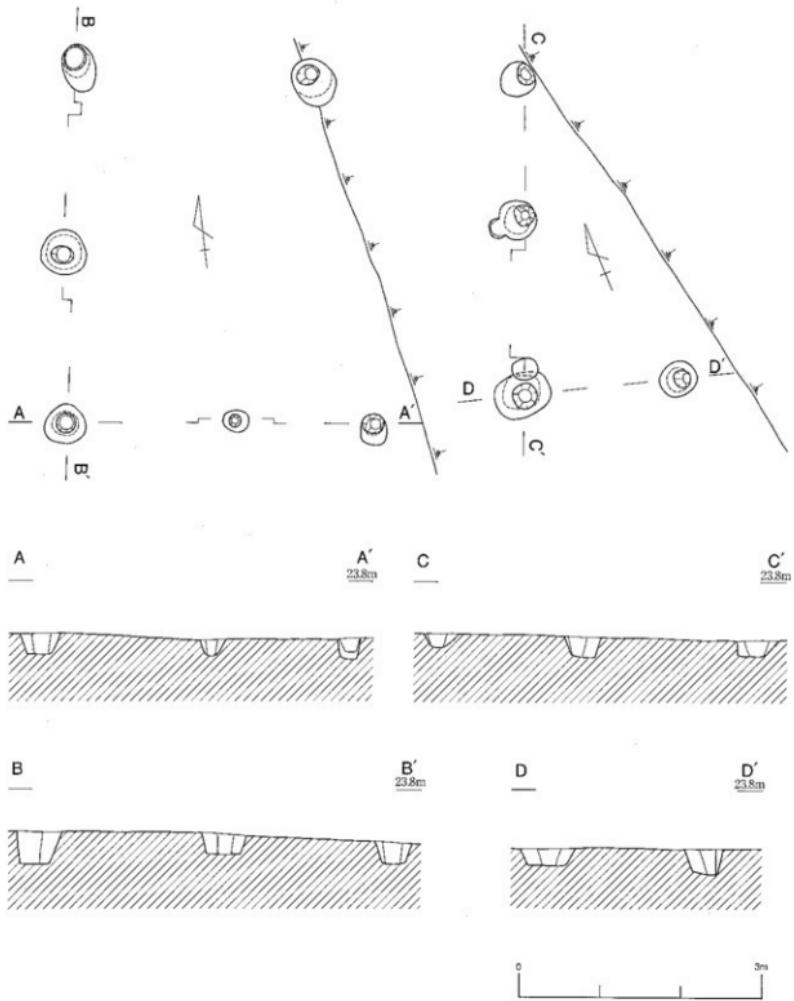
1992年度調査遺構図(1) 第1面全体図



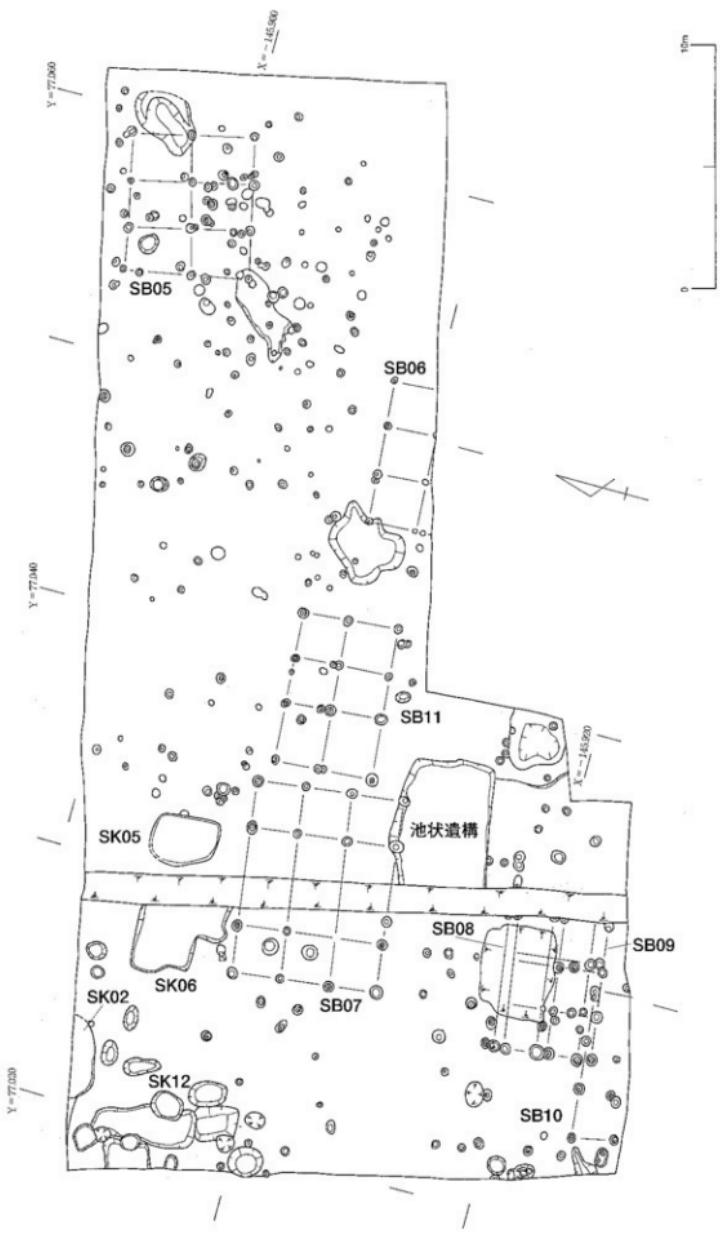
1992年度調査構図(2) 第1面土坑・水琴窟



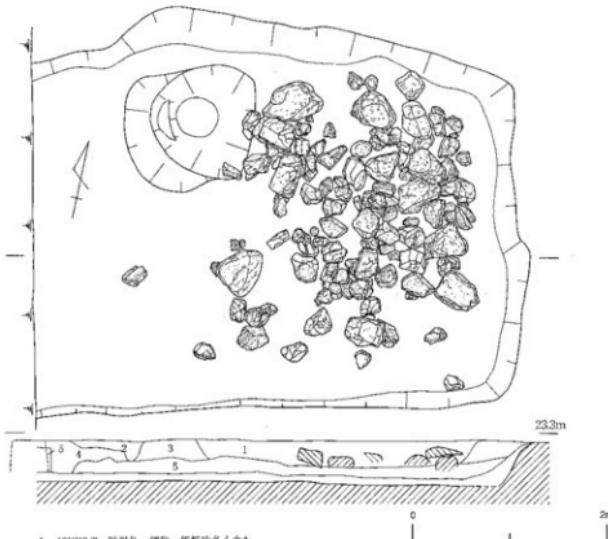
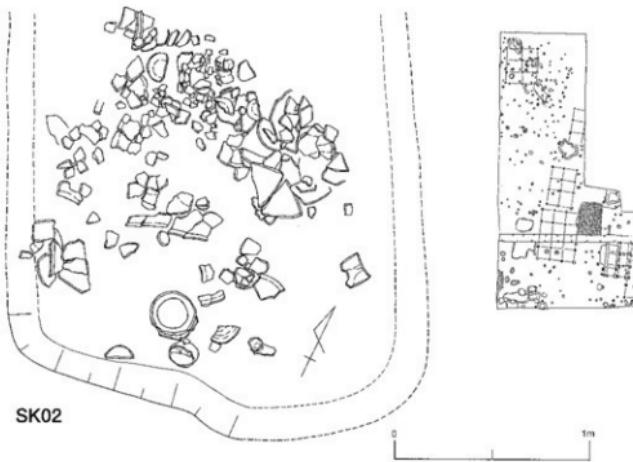
1992年度調査構造図(3) 第2面全体図



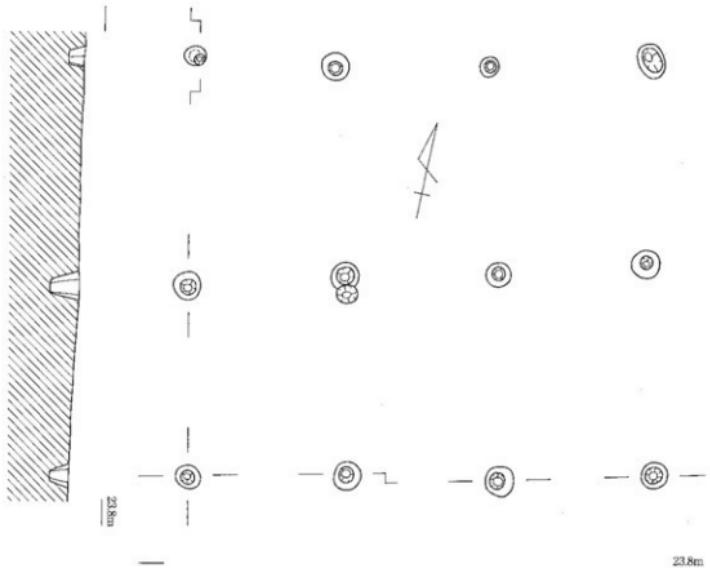
1992年度調査遺構図(4) 第2面掘立柱建物



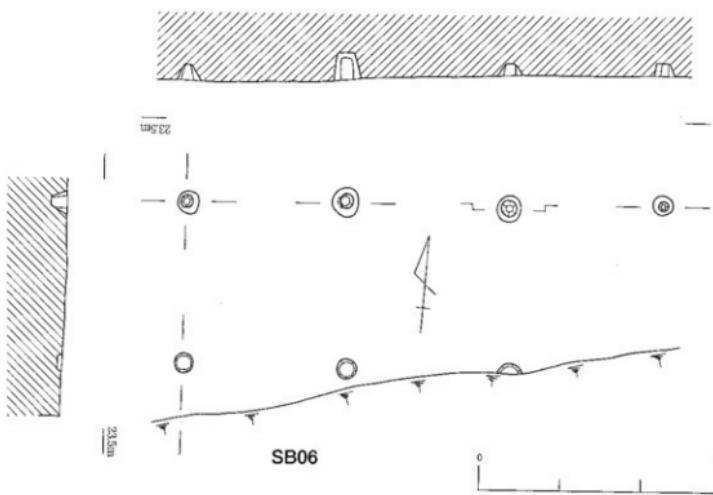
1992年度調査構造図(5) 第3面全体図



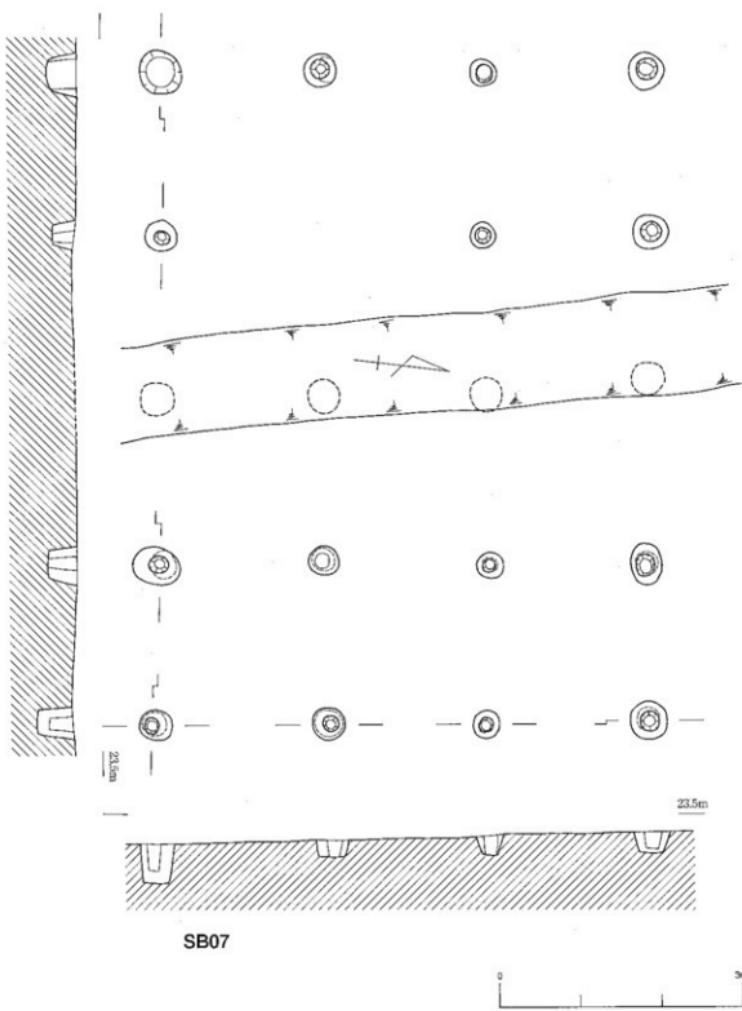
1992年度調査遺構図(6) 第3面土坑・池状遺構



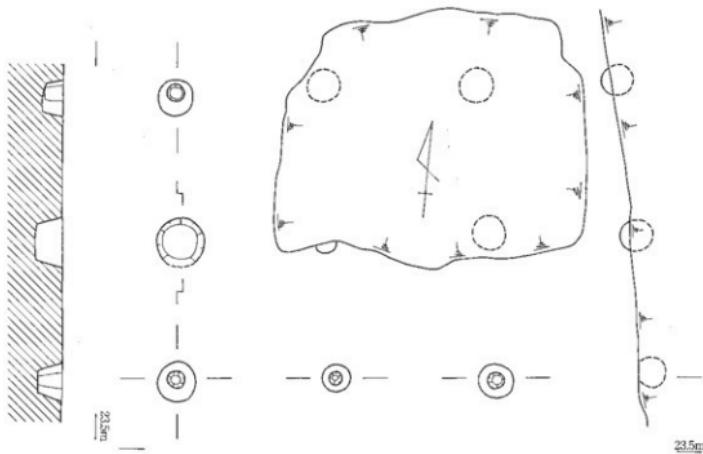
SB05



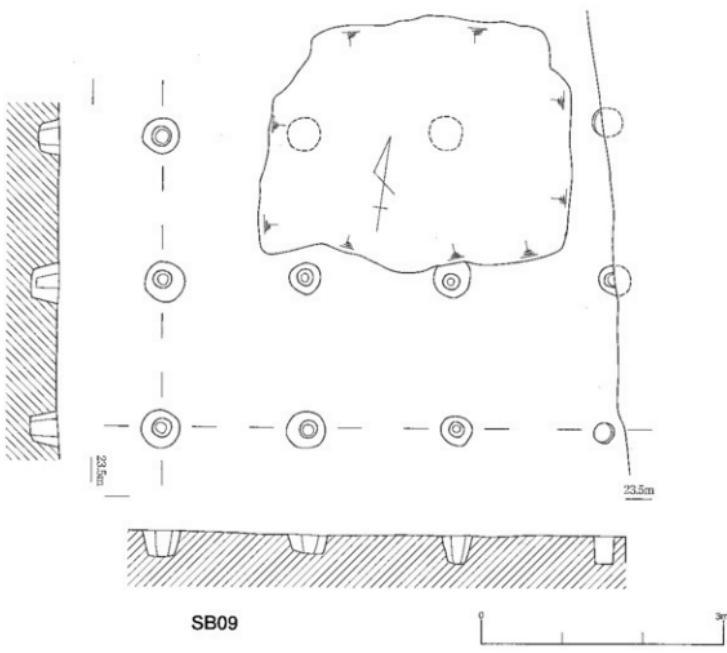
1992年度調査遺構図(7) SB-05・06



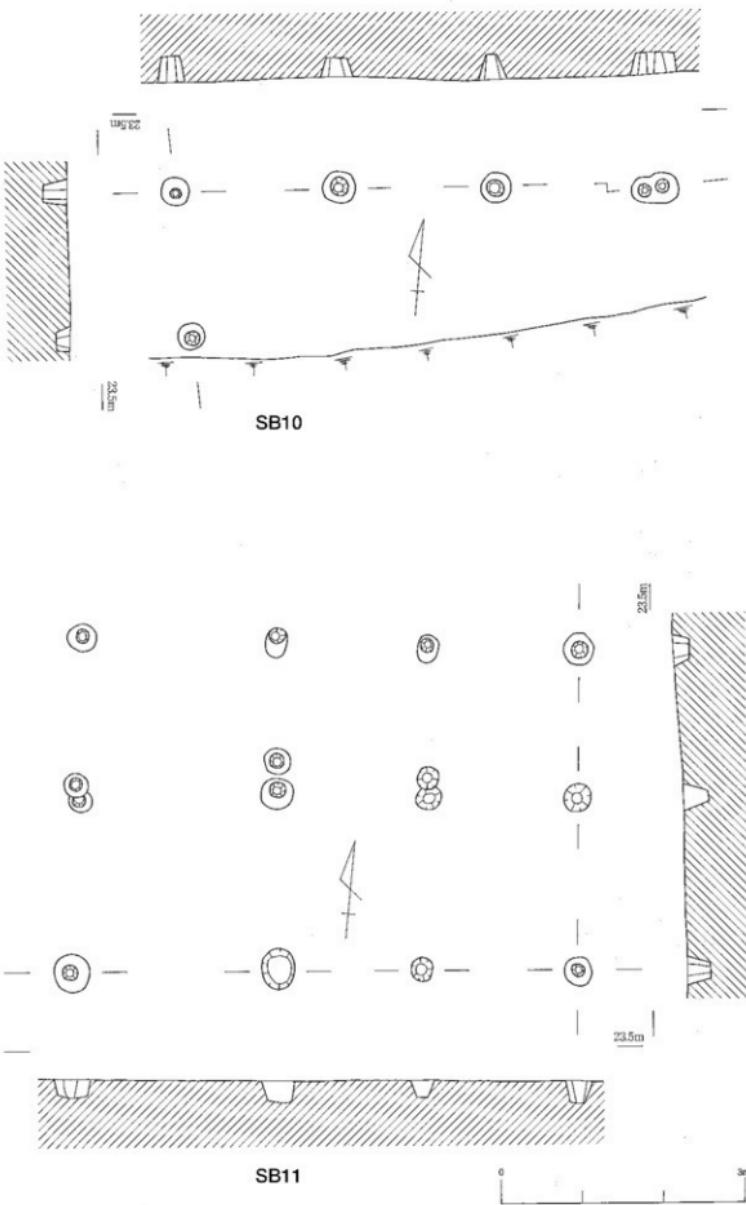
1992年度調査遺構図(8) SB-07



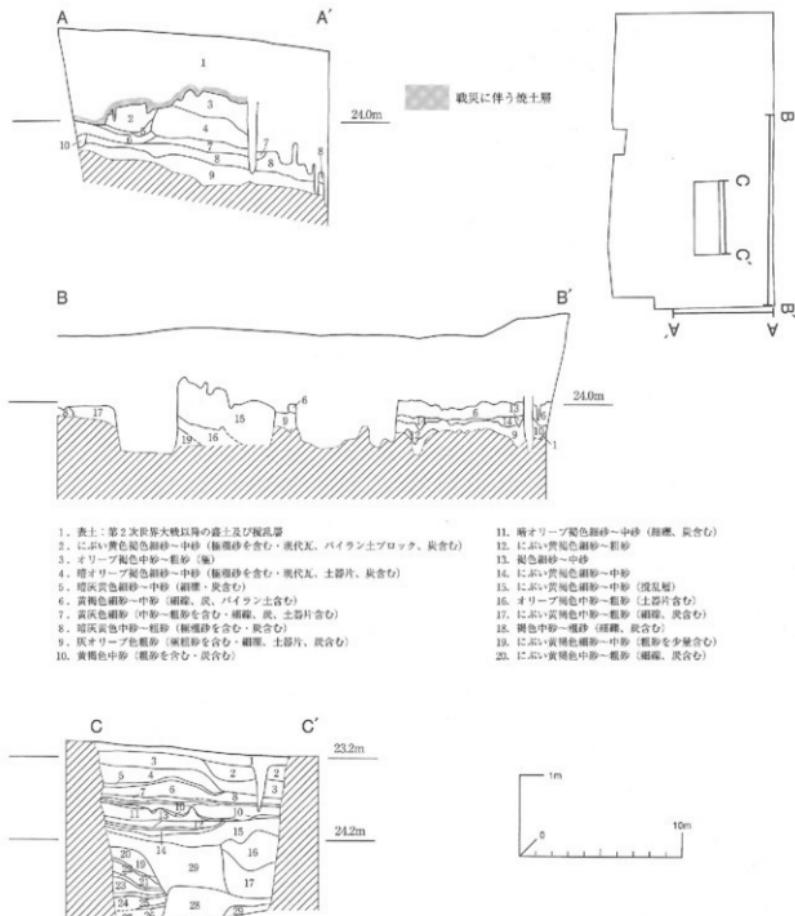
SB08



1992年度調査遺構図(9) SB-08・09



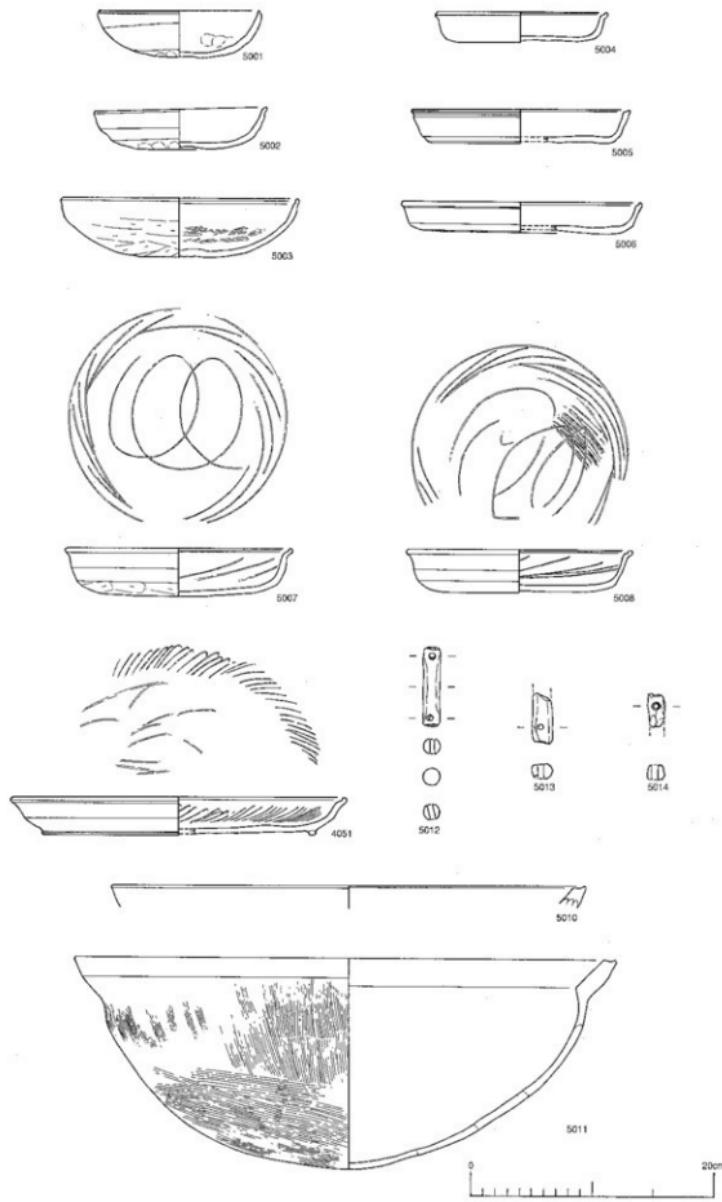
1992年度調査遺構図(10) SB-10・SB-11



1. 黒褐色細砂～中砂 (粗砂を多量に含み、部分的にシート混入)
2. 線状黒褐色細砂 (細砂～中砂を含む)
3. 深オリーブ中砂～粗砂 (シルト質粘土混入)
4. 線状黒褐色中砂 (粗砂を多量に含む)
5. 黑褐色細砂～中砂 (粗砂を部分的に中砂～粗砂混入)
6. オリーブ褐色シルト質粘土～中砂～粗砂
7. 黑褐色中砂～粗砂
8. 線状黒褐色シルト質粘土 (部分的に中砂～粗砂混入)
9. 黑褐色シルト混じ砂～粗砂
10. 線状黒褐色シルト質粘土 (部分的に中砂混入)
11. オリーブ褐色中砂 (粗砂～板根砂を含む)・水田面か?
12. 黑褐色シルト混じ砂～粗砂 (水田面か?)
13. 線状黒褐色シルト質粘土 (中砂～粗砂を含む)
14. 黑褐色シルト混じ砂 (中砂～粗砂を含む) ラミネーション

15. 黑褐色シルト混じ砂～粗砂 (粗砂～板根砂が部分的に混入)
16. 黑褐色シルト混じ砂～粗砂 (粗砂～板根砂を含む)
17. 線状黒褐色シルト混じ砂～粗砂 (礫層・花崗岩バイン土を大量に含む)
18. 黄オリーブ色シルト質粘土 (中砂を含み、部分的に粗砂～板根砂を少量含む)
19. 線状黒褐色シルト混じ砂～粗砂
20. 線状黒褐色シルト混じ砂 (板根砂を含む)
21. 線状黒褐色シルト混じ砂～粗砂
22. 線状黒褐色シルト混じ砂
23. 黑褐色細砂～中砂 (粗砂～板根砂を大量に含む)
24. オリーブ褐色シルト混じ砂～粗砂
25. オリーブ褐色シルト混じ砂 (板根砂を含む)
26. 黄オリーブ色シルト質粘土 (部分的に粗砂が混入)
27. 黄色シルト混じ砂 (部分的に粗砂が混入・ラミネーション)
28. 黑褐色中砂～粗砂 (粗砂～中砂混入)・中層状を呈す河床帯
29. 黄色シルト混じ砂 (板根砂を少量含む)

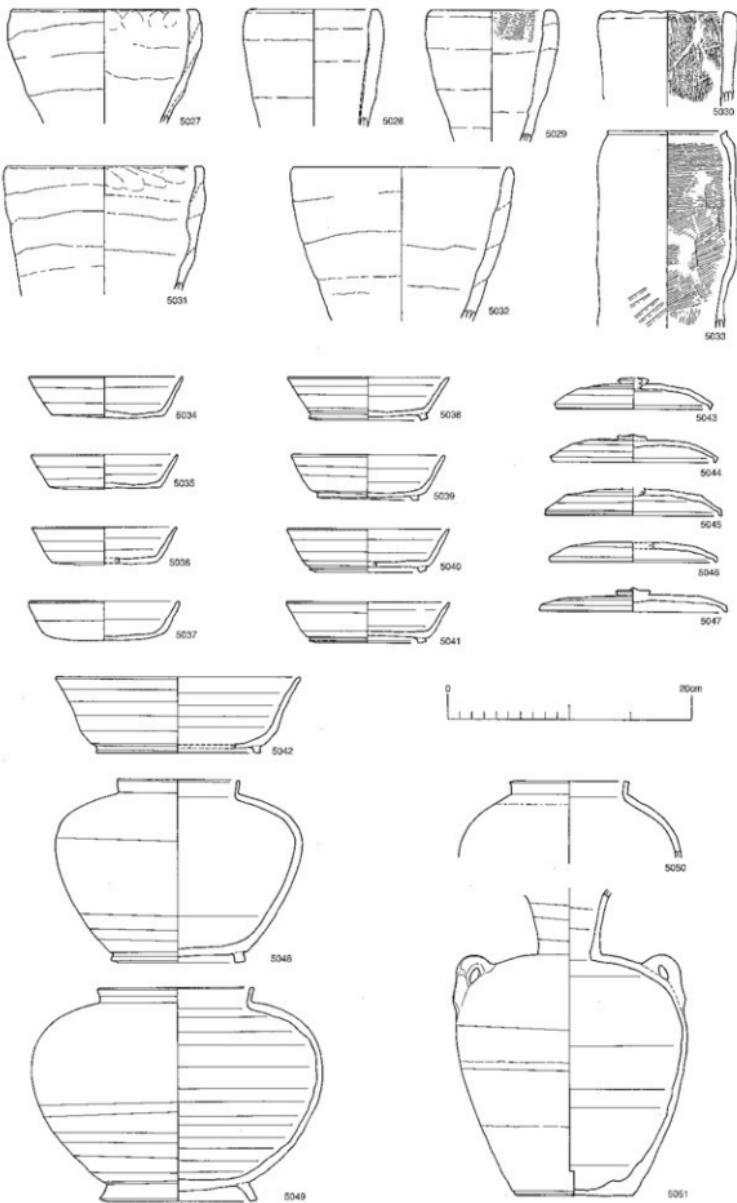
1992年度調査遺構図(11) 調査区及び、調査区内トレンチ断面図



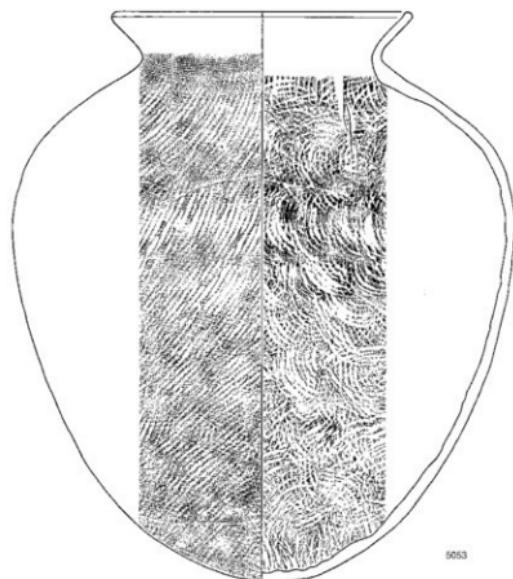
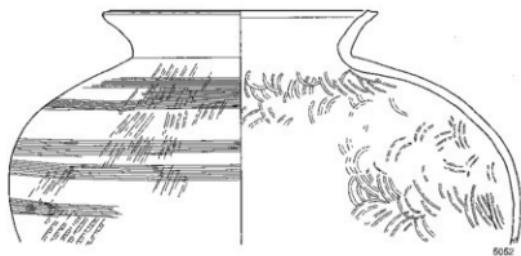
1992年度調査出土遺物(1)



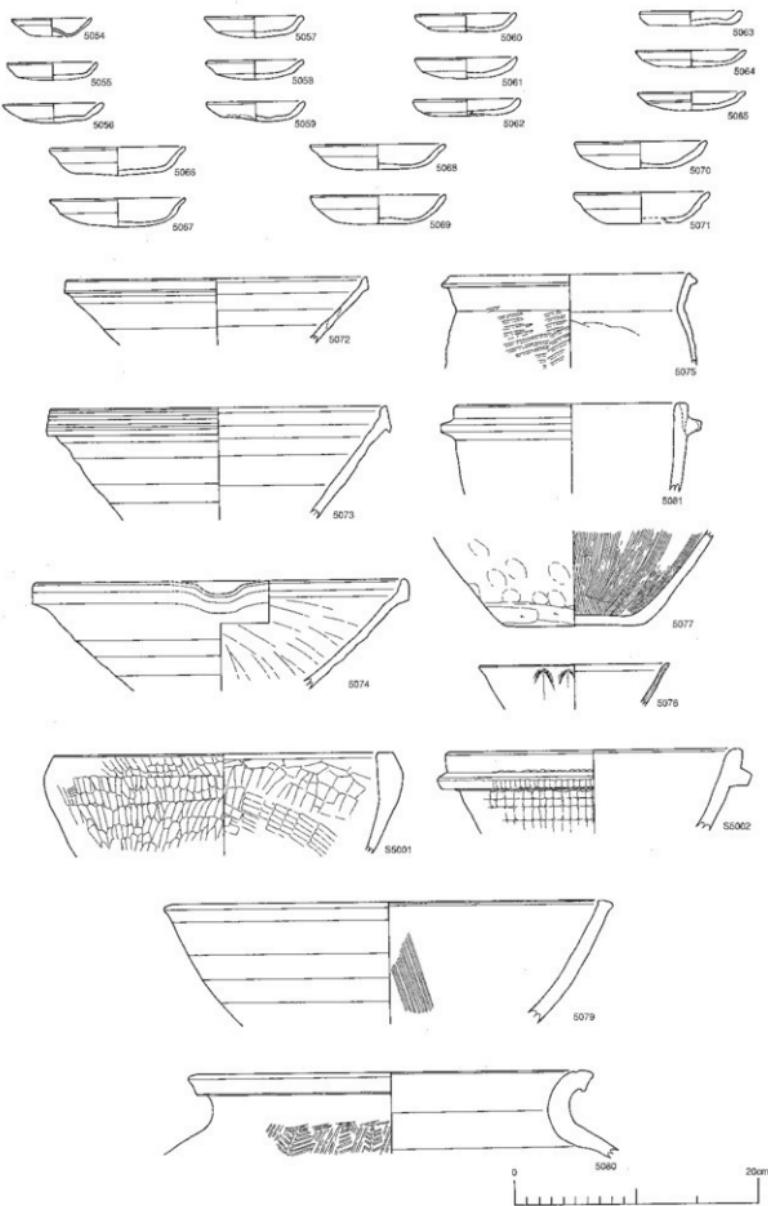
1992年度調査出土遺物(2)



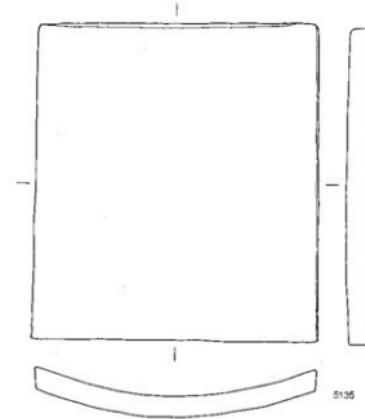
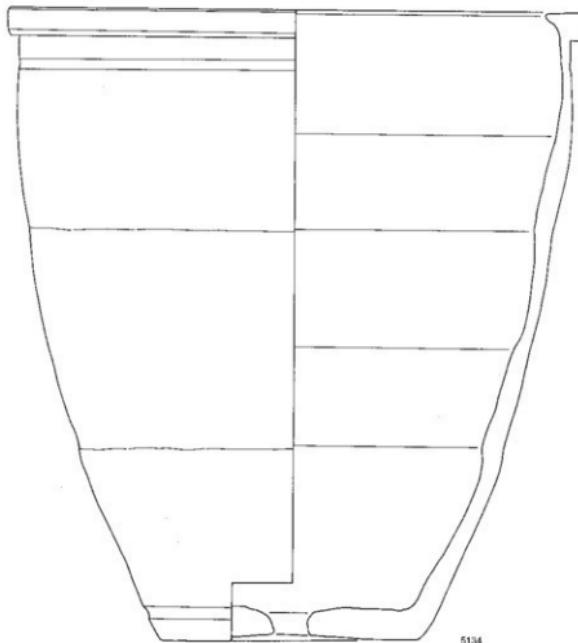
1992年度調査出土遺物(3)



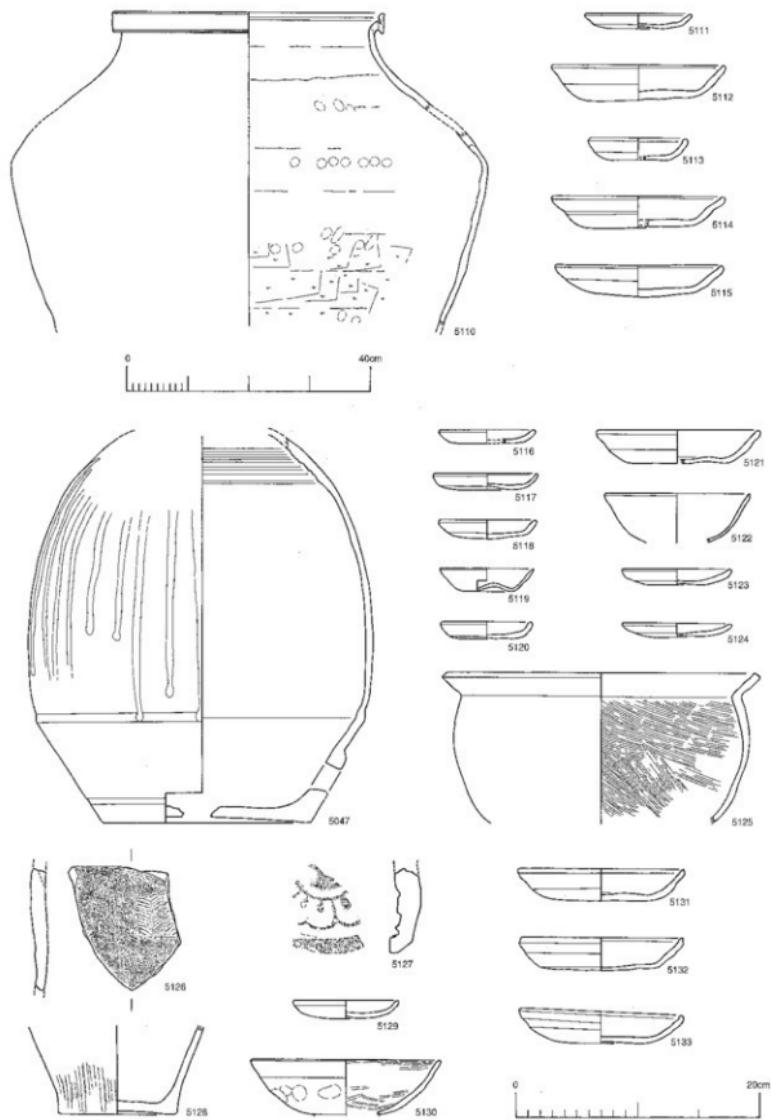
1992年度調査出土遺物(4)



1992年度調査出土遺物(5)

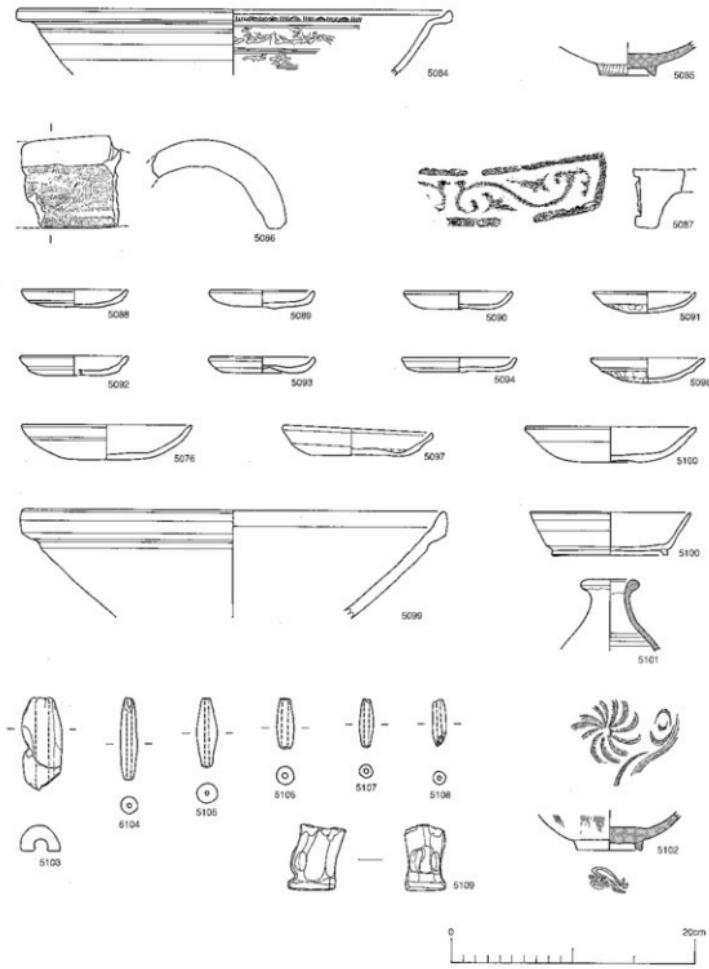


1992年度調査出土遺物(6)

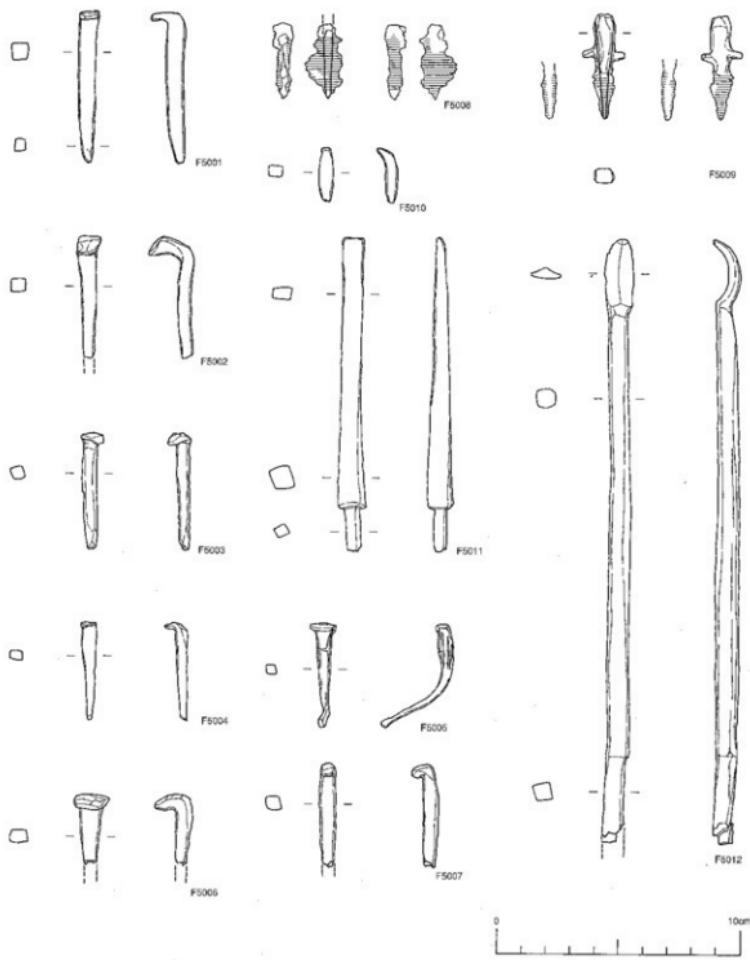


1992年度調査出土遺物(7)

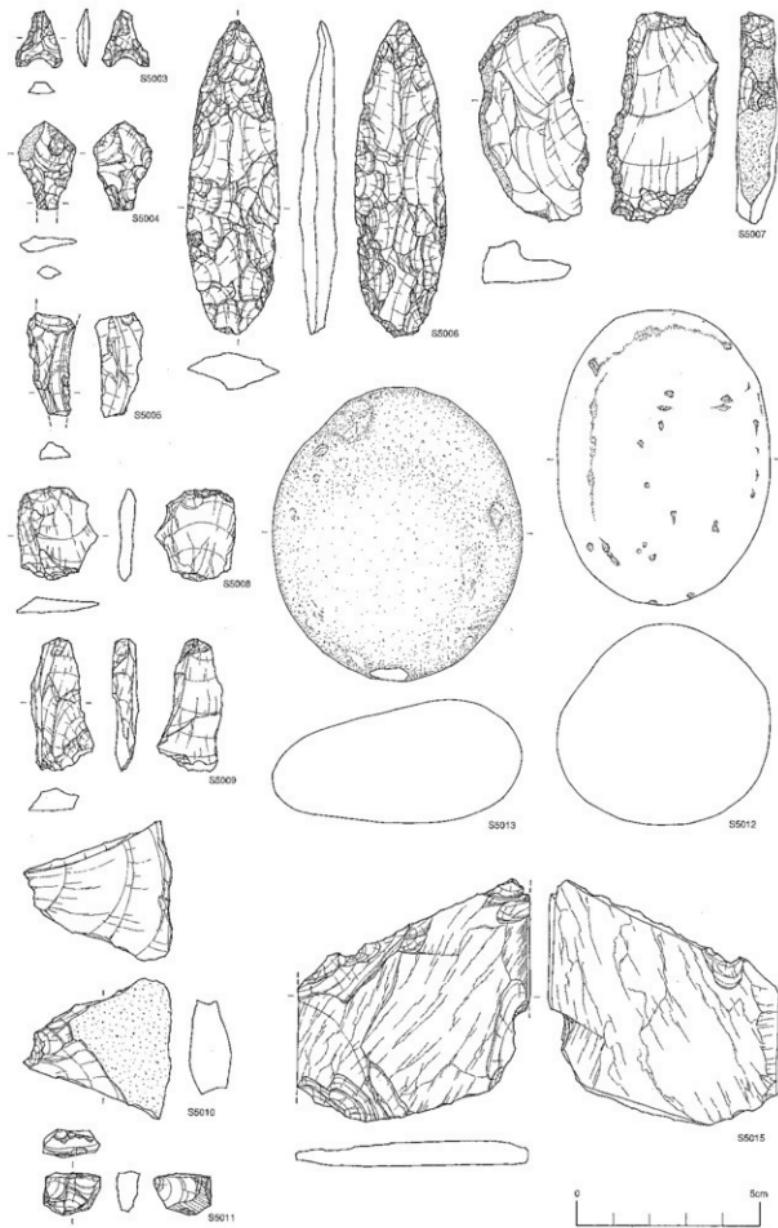
圖版
四四



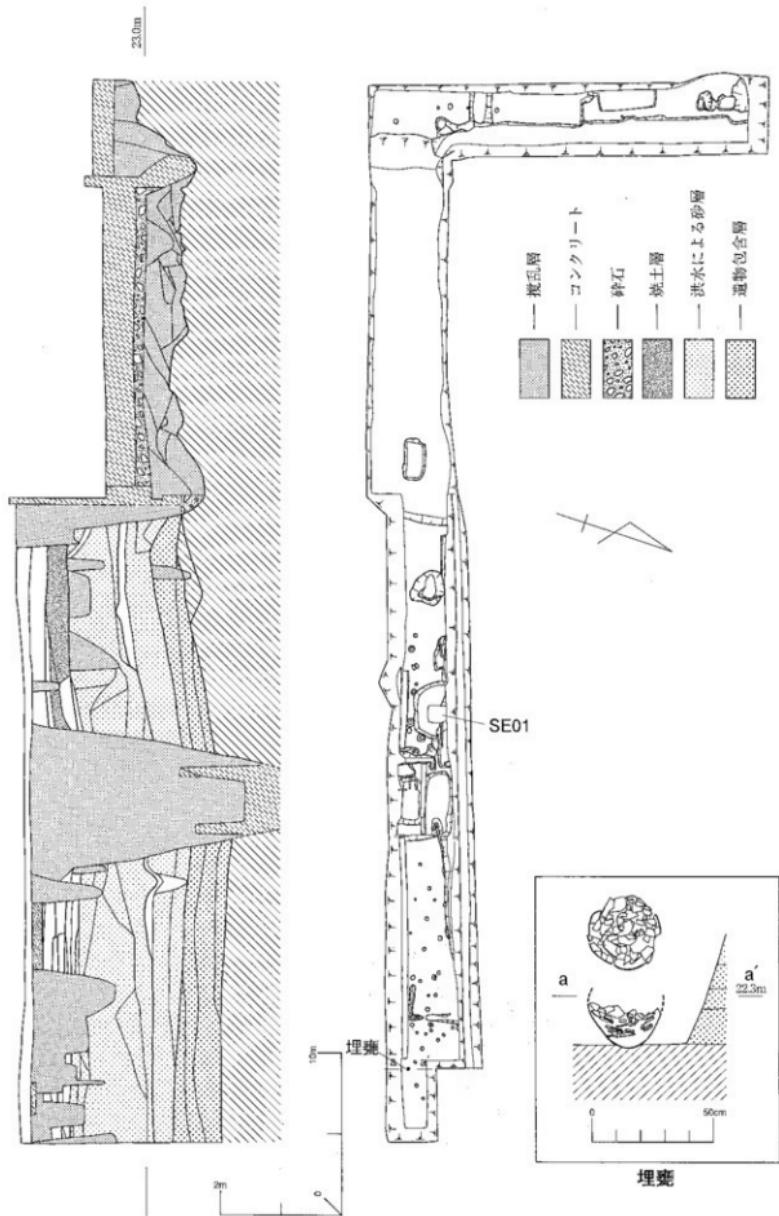
1992年度調査出土遺物(8)



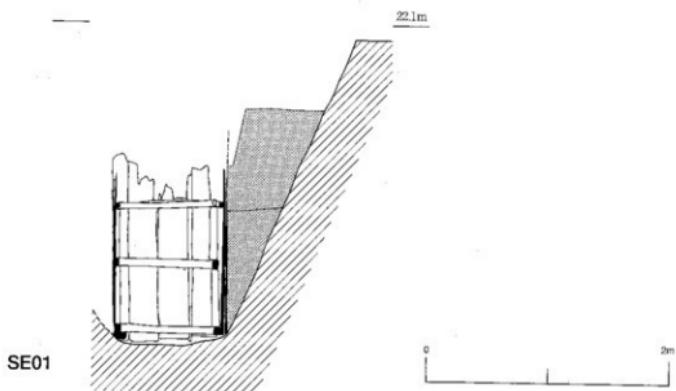
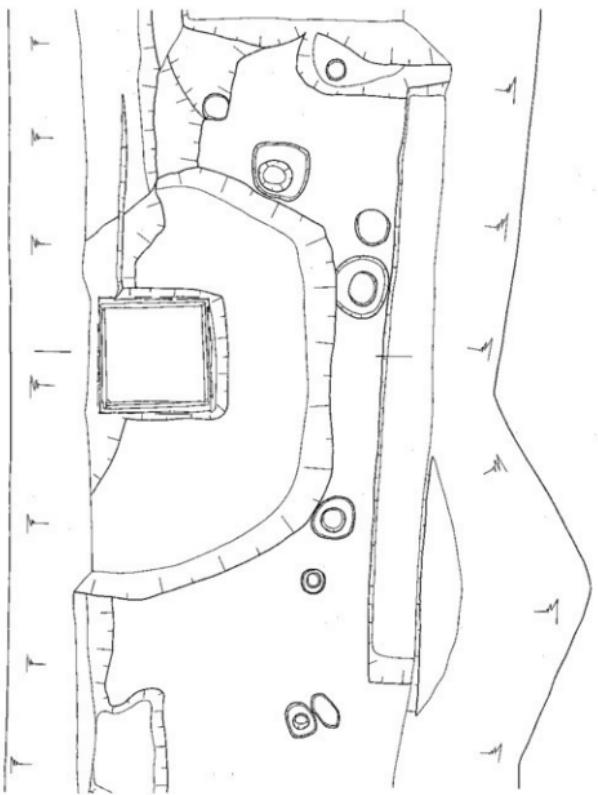
図版
四六



1992年度調査出土遺物(10)

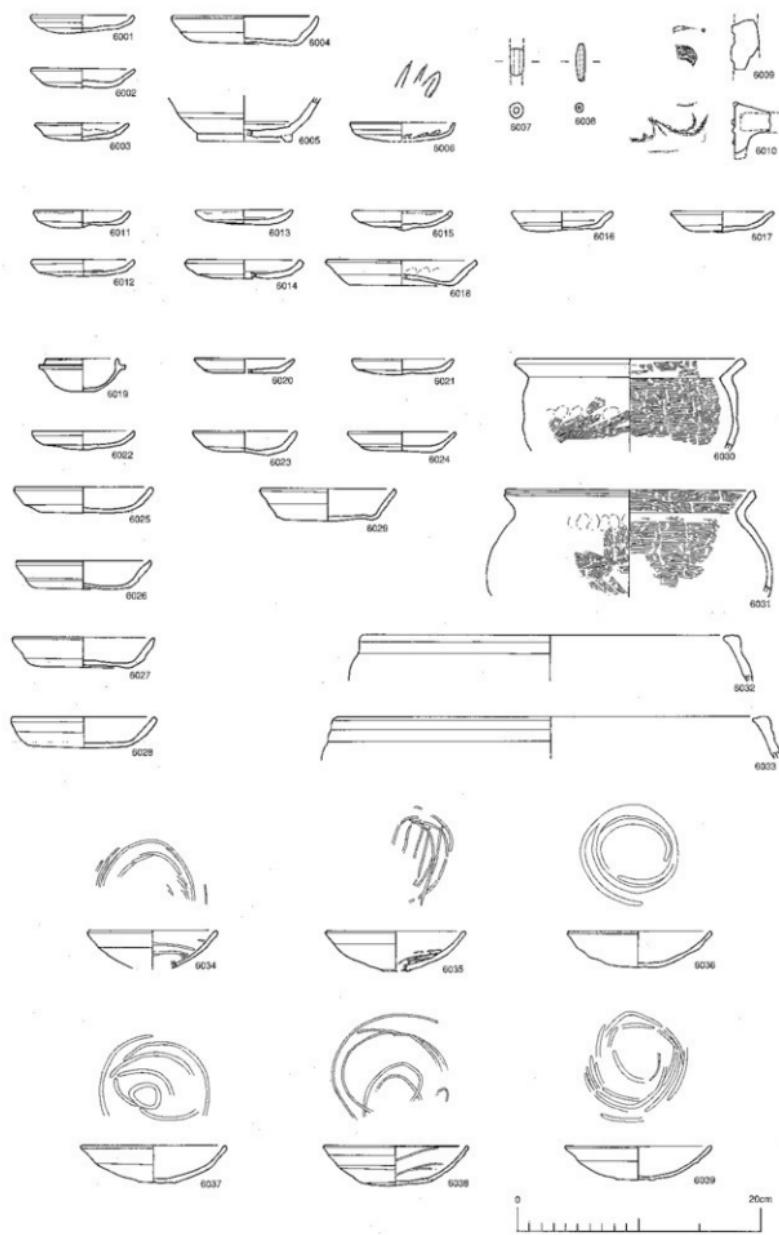


1994年度調査遺構図(1) 全体図・断面図・堀埋

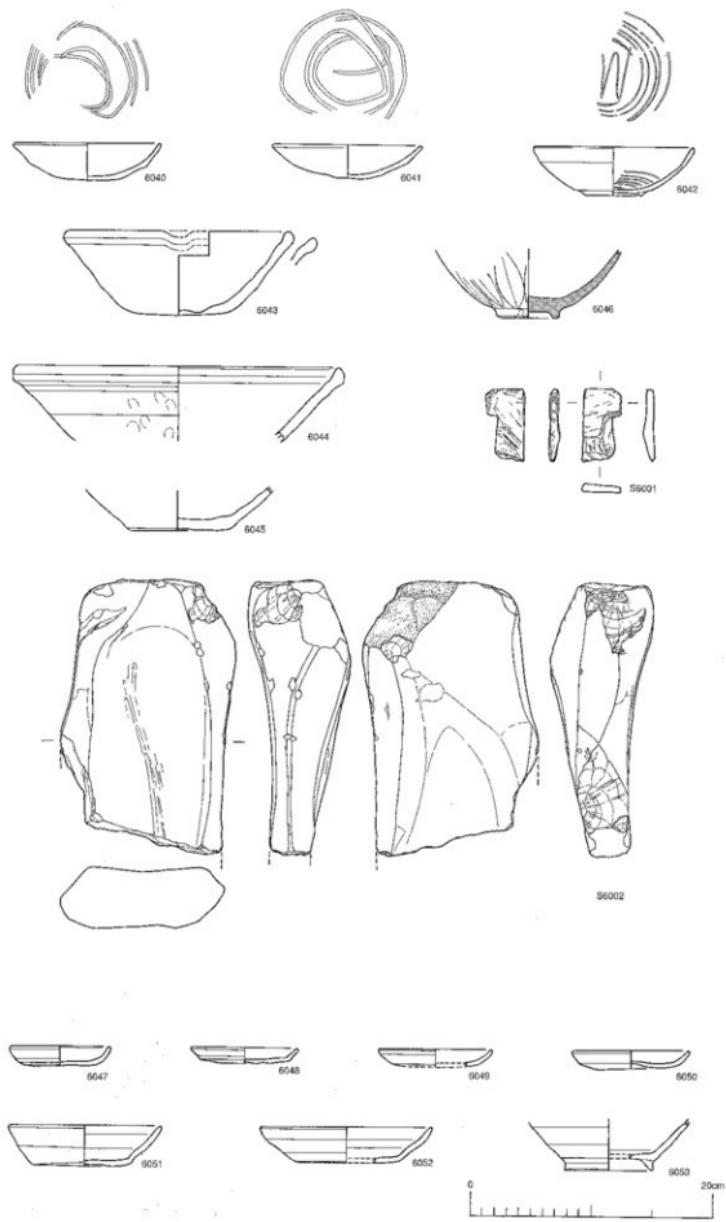


1994年度調査遺構図(2) 井戸

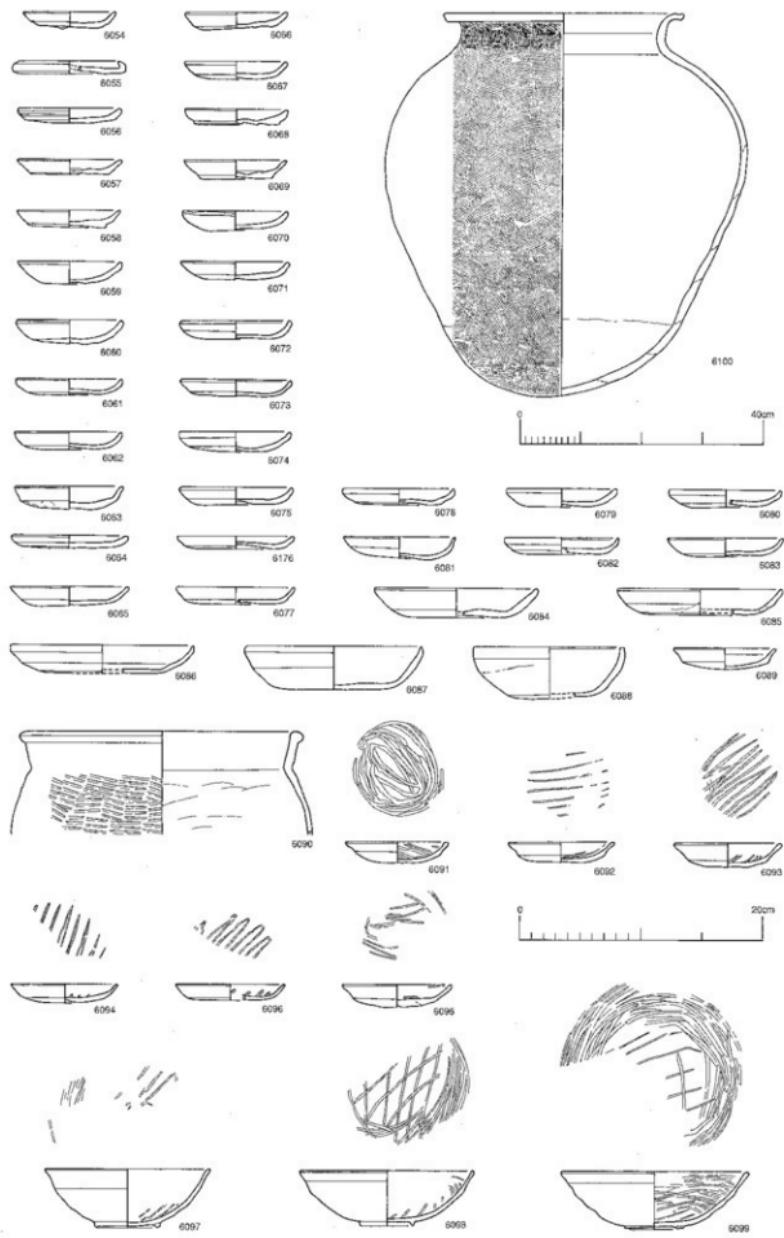
図版 四九



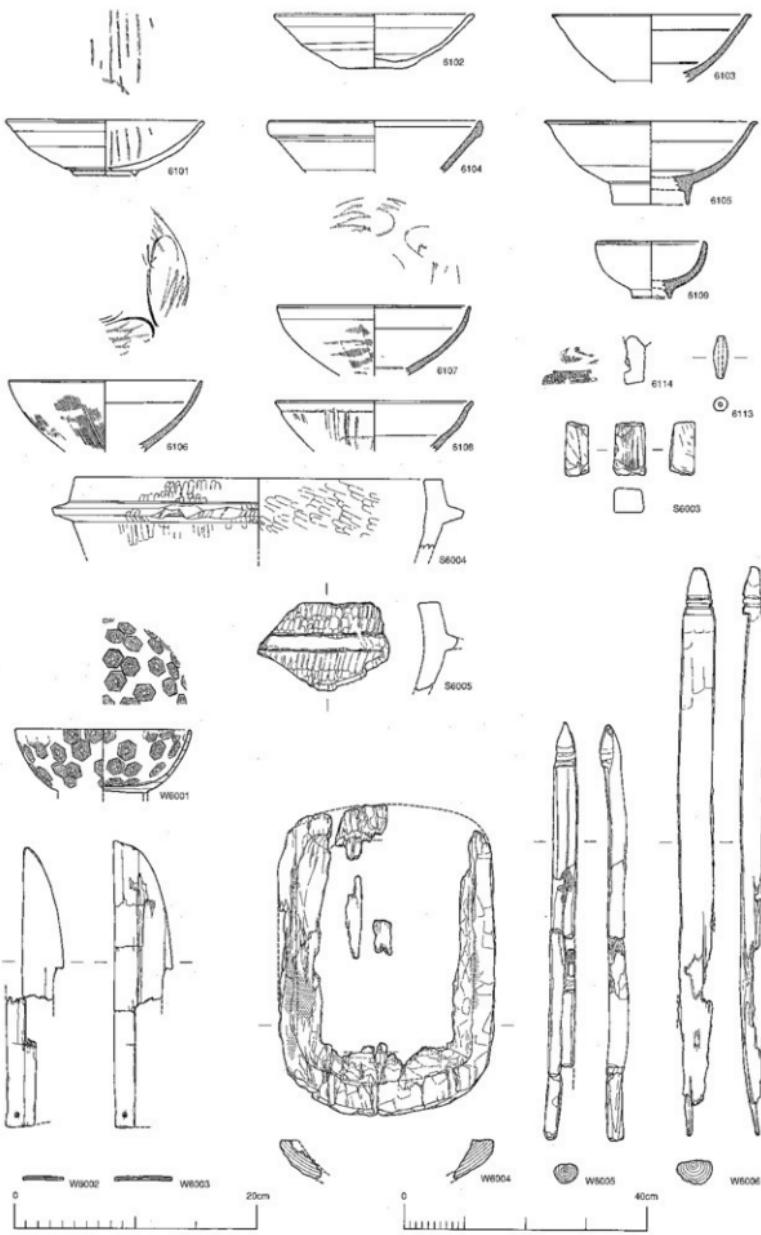
1994年度調査出土遺物(1)



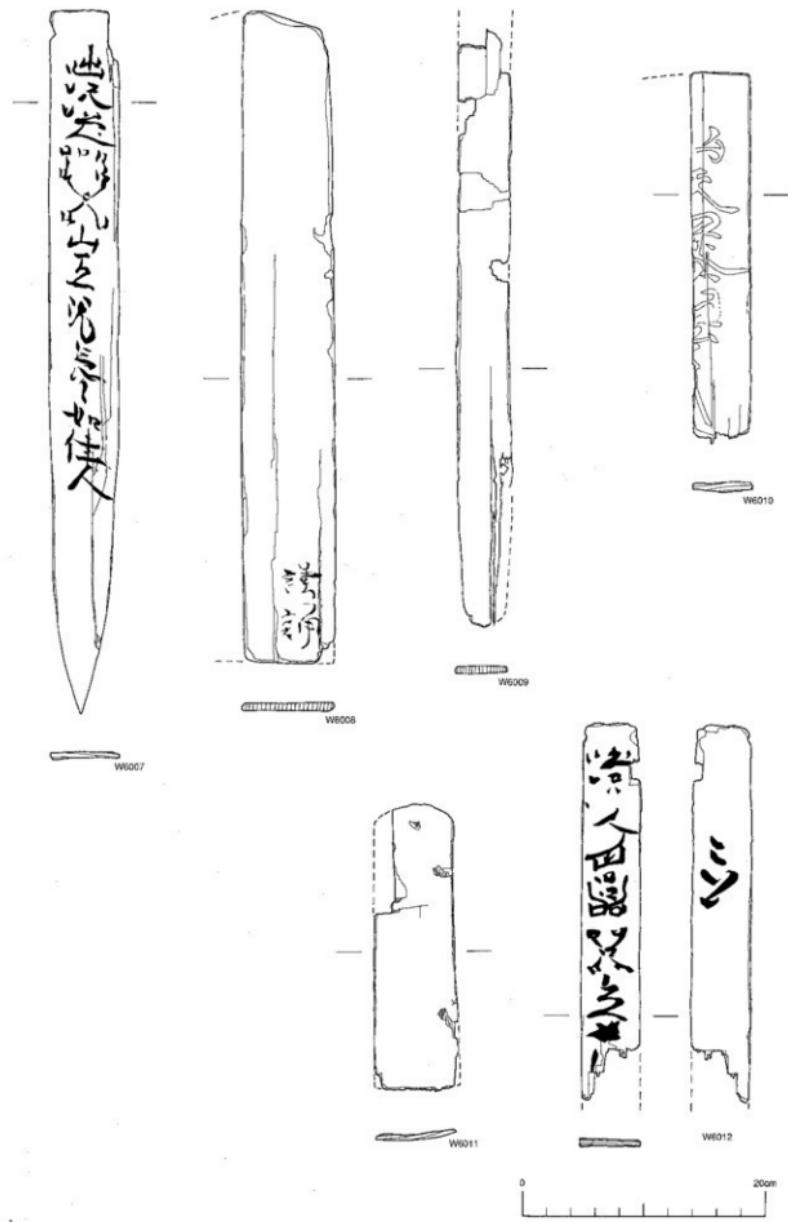
1994年度調査出土遺物(2)



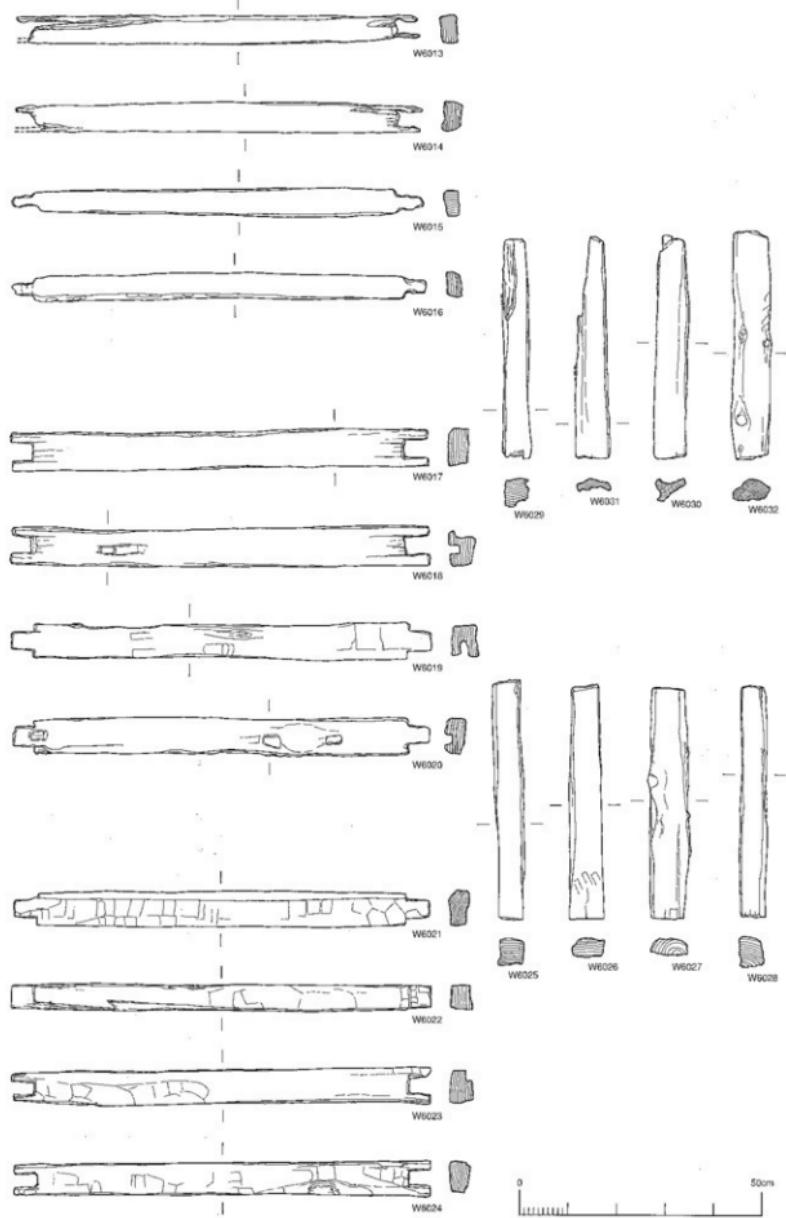
1994年度調査出土遺物(3)



1994年度調査出土遺物(4)



1994年度調査出土遺物(5)



1994年度調査出土遺物(6)

写真図版

図版一 空中写真(一)



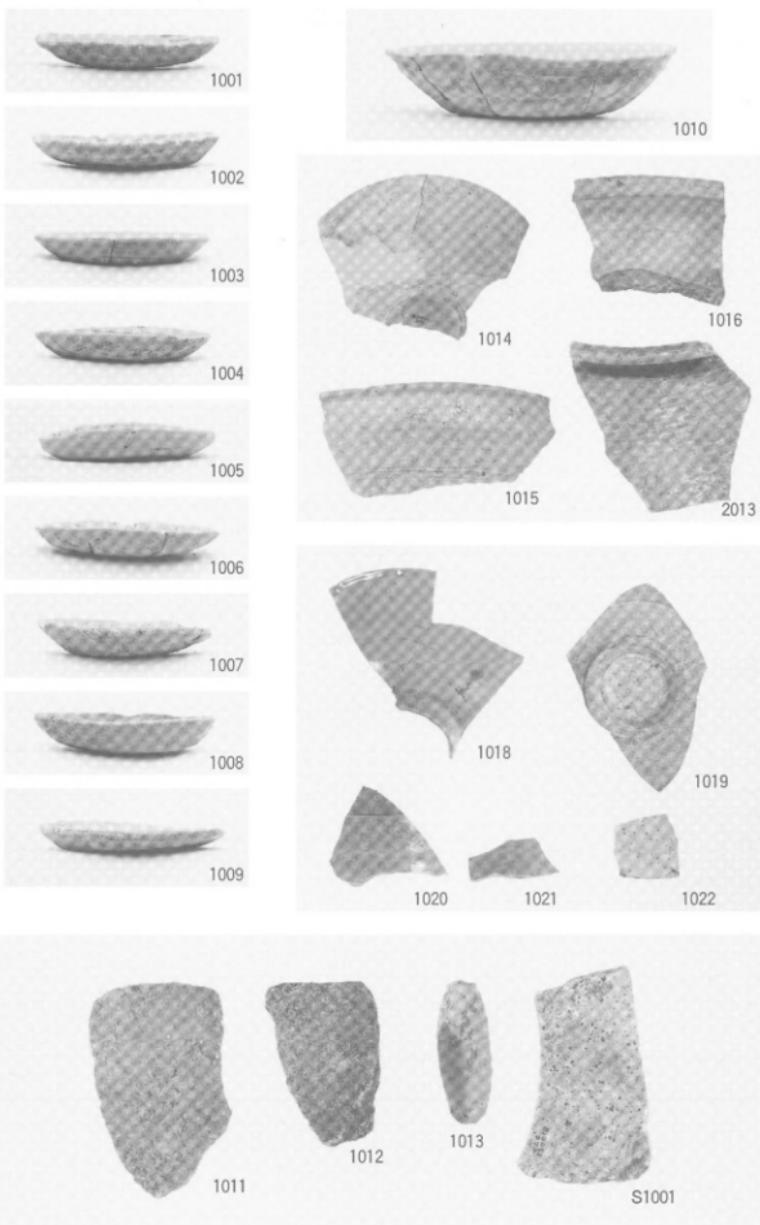
楠・荒田町遺跡周辺 (1. 神戸大学医学部附属病院 2. 兵庫教育委員会埋蔵文化財調査事務所)

図版
二 空中写真(二)

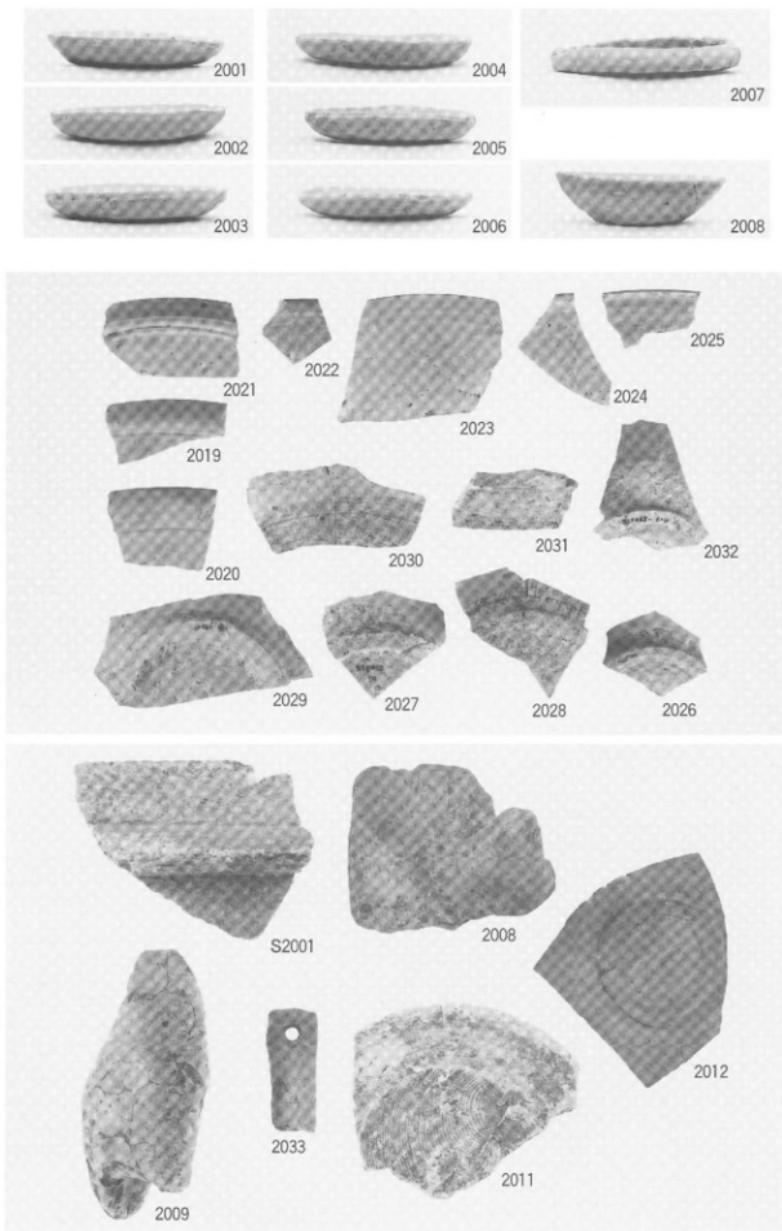


神戸大学医学部附属病院構内遺跡

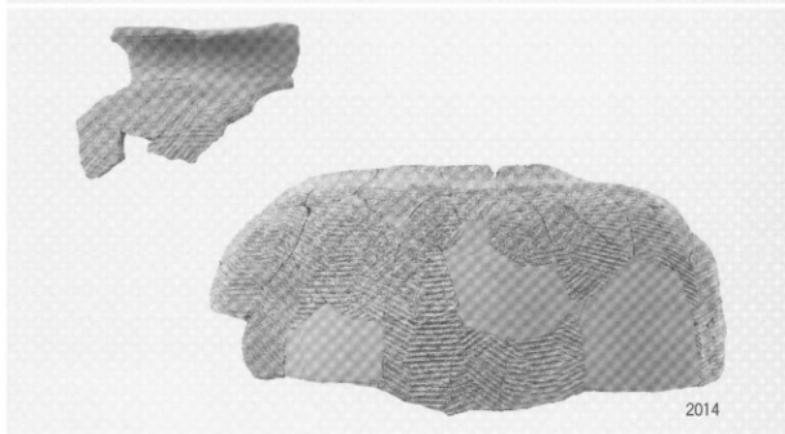
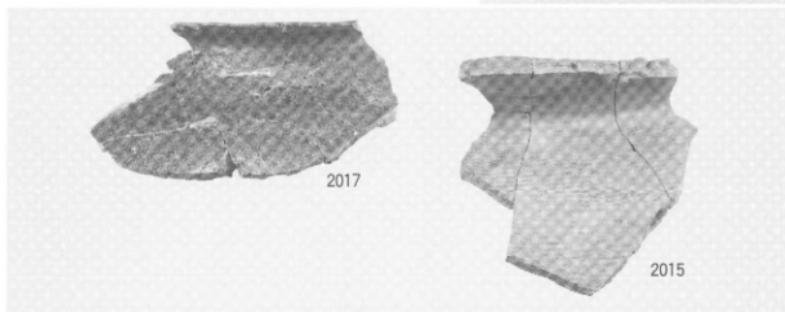
図版 三 一九八一年度調査 遺物



図版
四
一九八二年度調査
遺物（一）



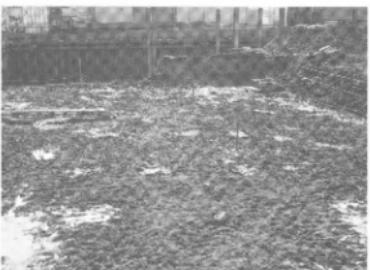
図版 五 一九八二年度調査 遺物(二)



図版 六 一九八五年度調査
遺構（二）



1. 調査区遠景（北上方から）



2. 調査前の状況



3. 調査風景 I



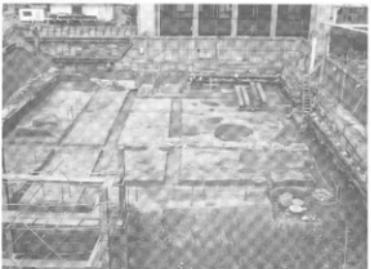
4. 調査全景 II



5. 土層（南から）



6. 拡張区土層断面（東から）

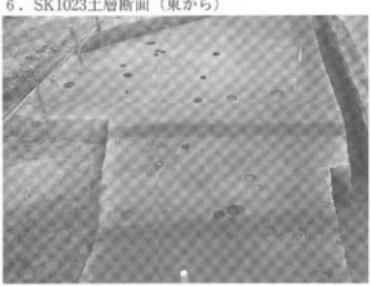
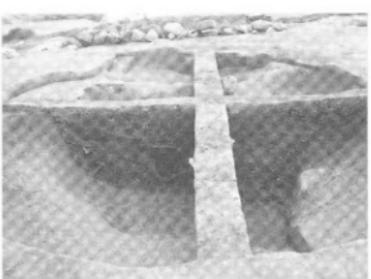
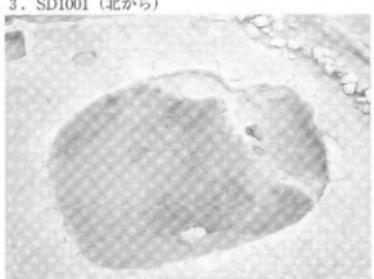
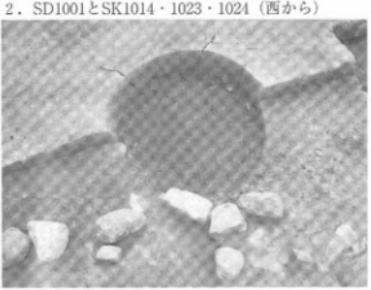
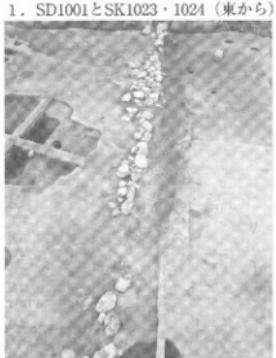
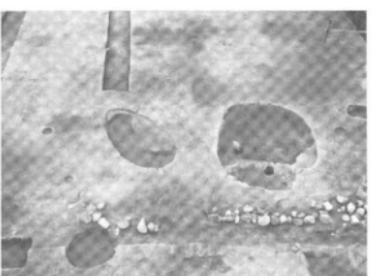


7. 全景 I（西から）

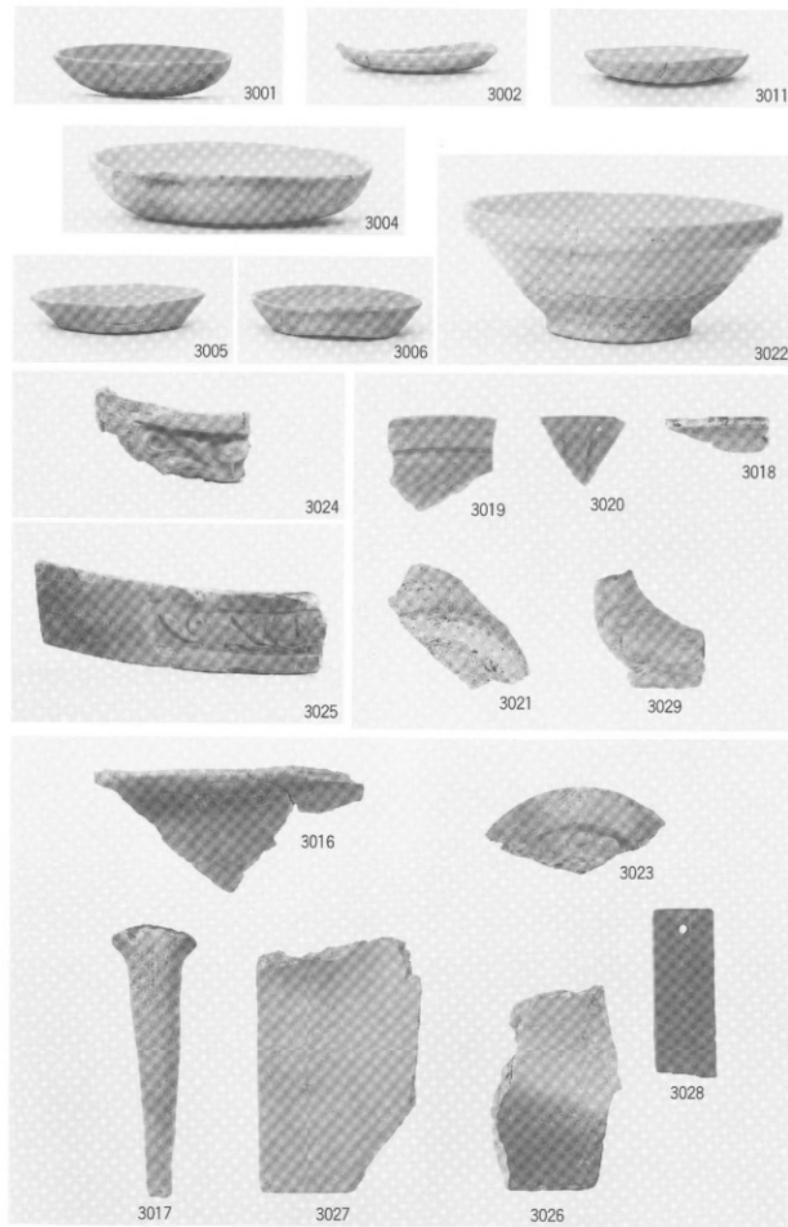


8. 全景 II（東から）

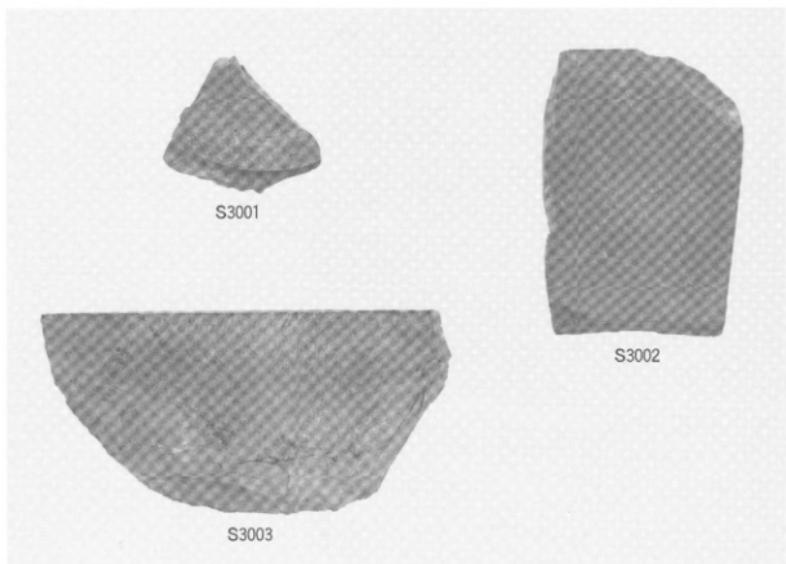
図版 七 一九八五年度調査 遺構(二)



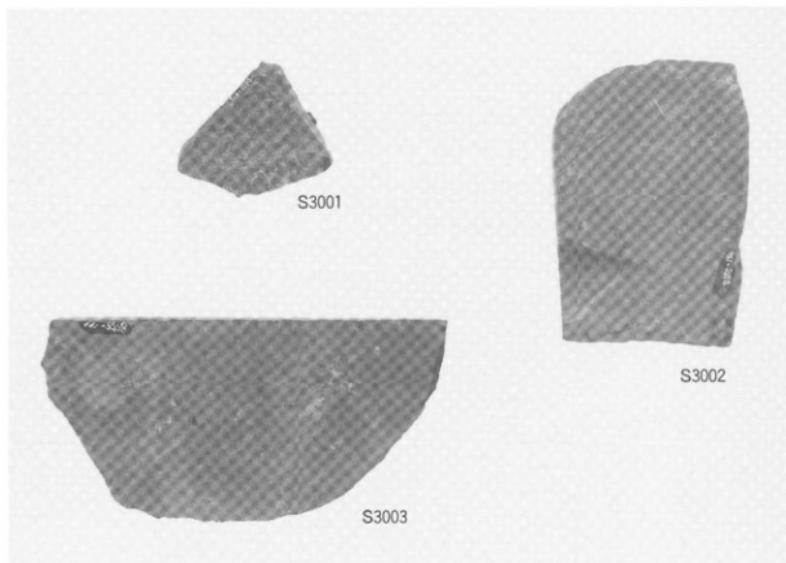
図版
八
一九八五年度調査
遺物（二）



図版 九 一九八五年度調査 遺物(二)



石器(表)



石器(裏)



1. 第5次確認調査全景

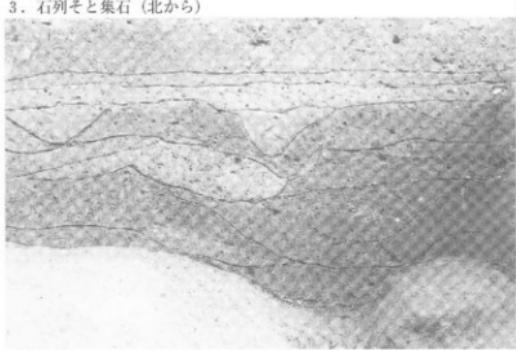


2. B区調査風景

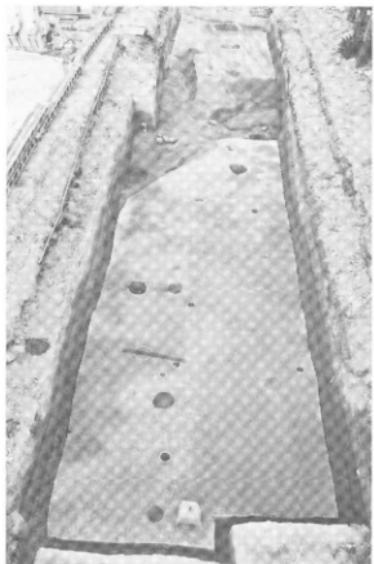


5. A区調査風景

図版
一一一九八七年度調査 遺構(二) A区



図版
一二 一九八七年度調査
遺構(二) A区



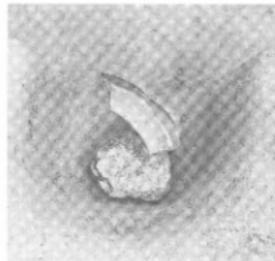
1. 第3面全景（西から）



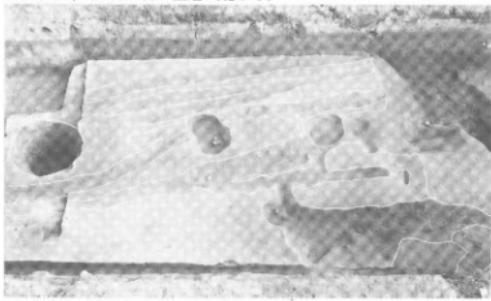
2. SK02 (南から)



3. SE01, SK05・06と土層（北から）

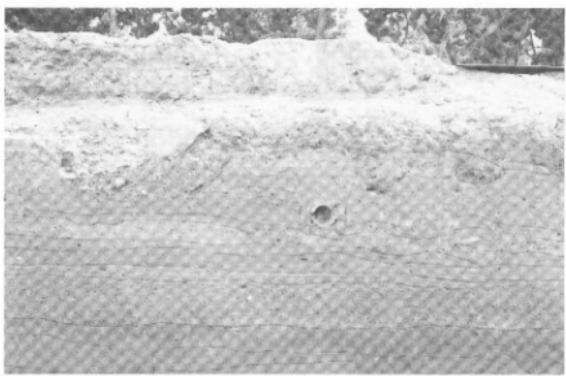


4. SK05 (北から)

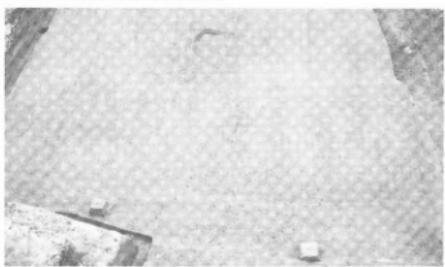


5. SE05, SK02・03他 (北から)

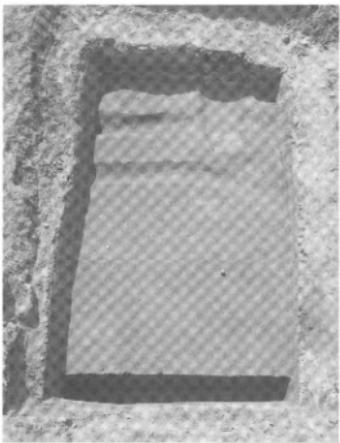
図版 一三 一九八七年度調査 遺構 (II) B・C区 (一)



1. B区土層（南面）



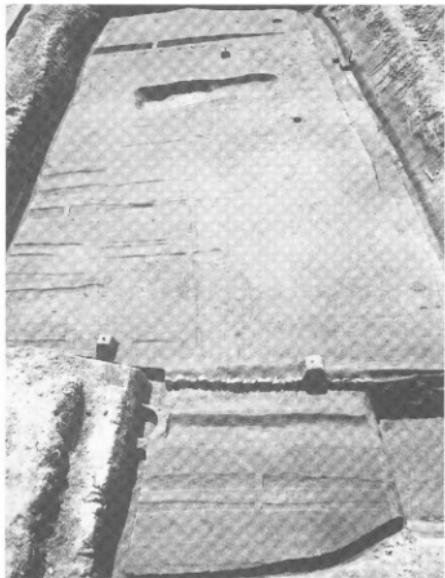
2. 第1面歓検出 (B区)



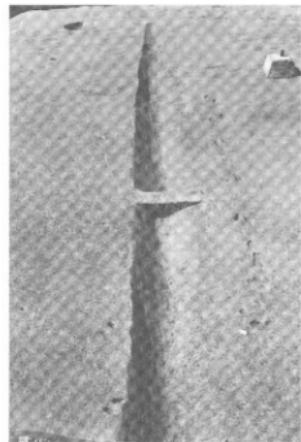
3. C区第1面全景（東から）



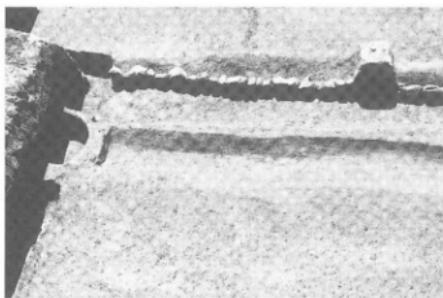
4. B区第1面歓全景（東から）



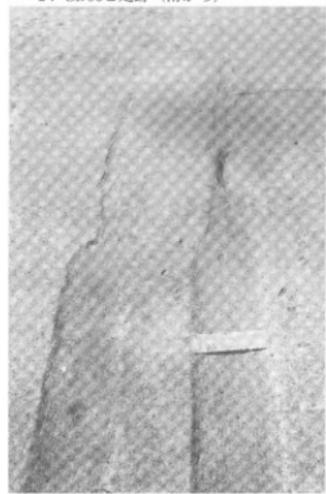
1. 第2面全景（東から）



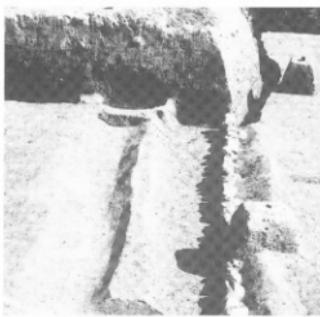
2. SD06と足跡（南から）



4. SD03・04
(東から)

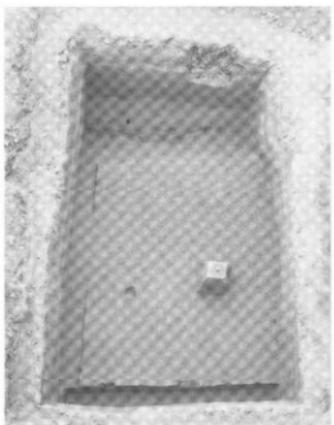


3. SD05他（南から）

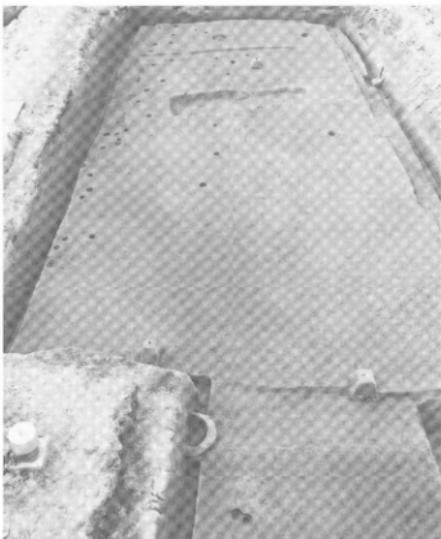


5. SD03・04（北から）

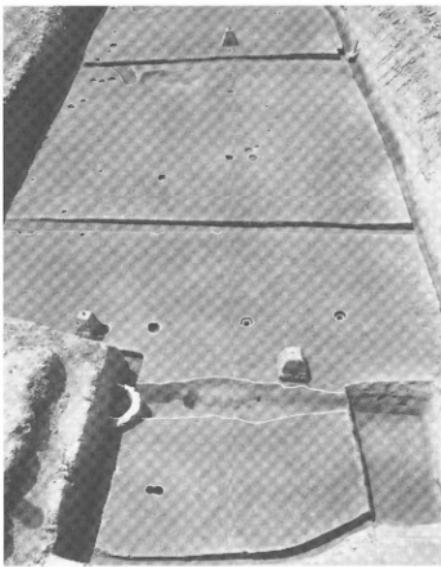
図版 一五 一九八七年度調査 遺構(五) B・C区(三)



1. 第3面C区全景(東から)



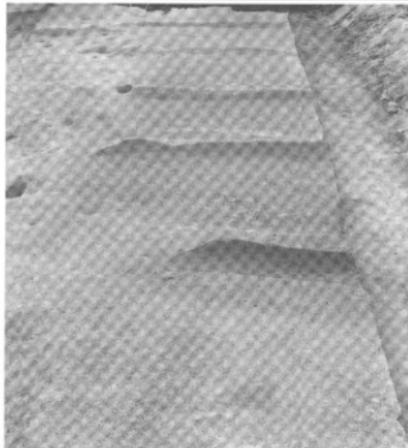
2. 第3面B区全景(東から)



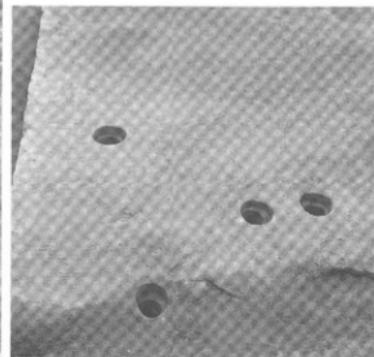
3. 第4面B区全景(東から)



1. 調査風景



1. 第2面歟（北から）

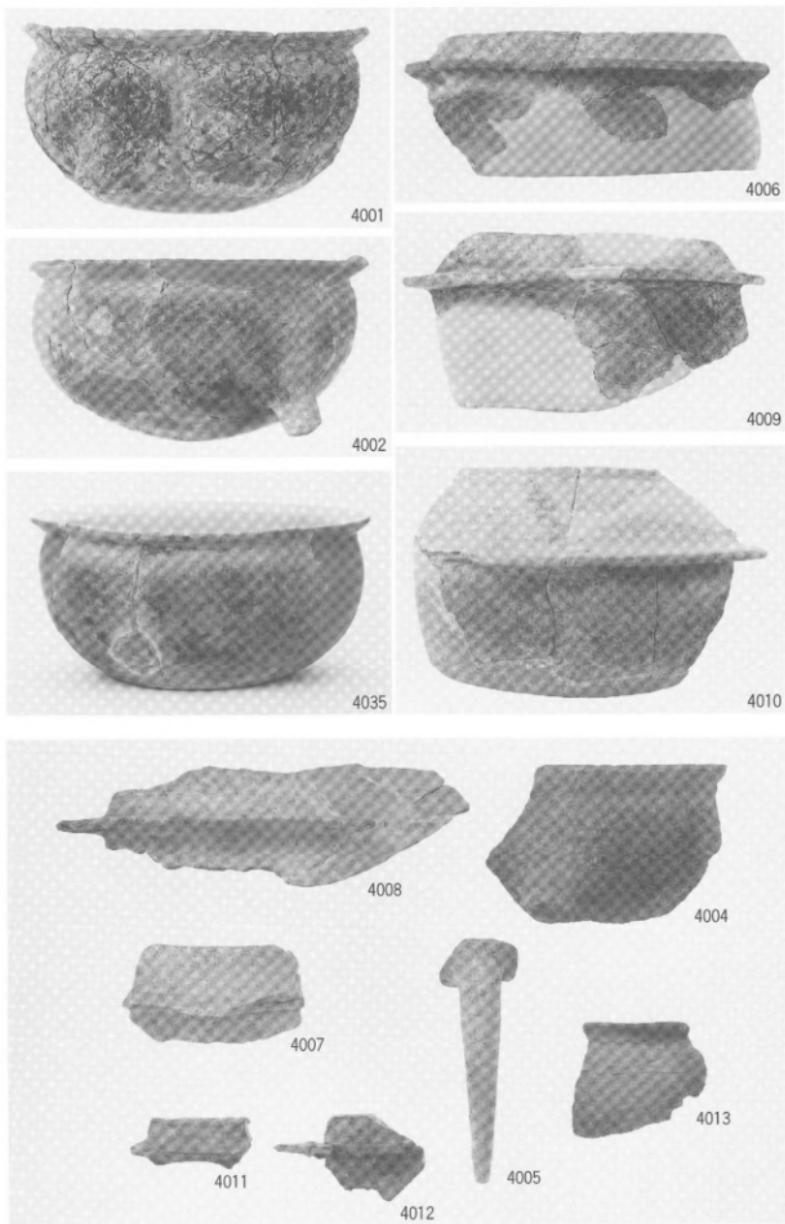


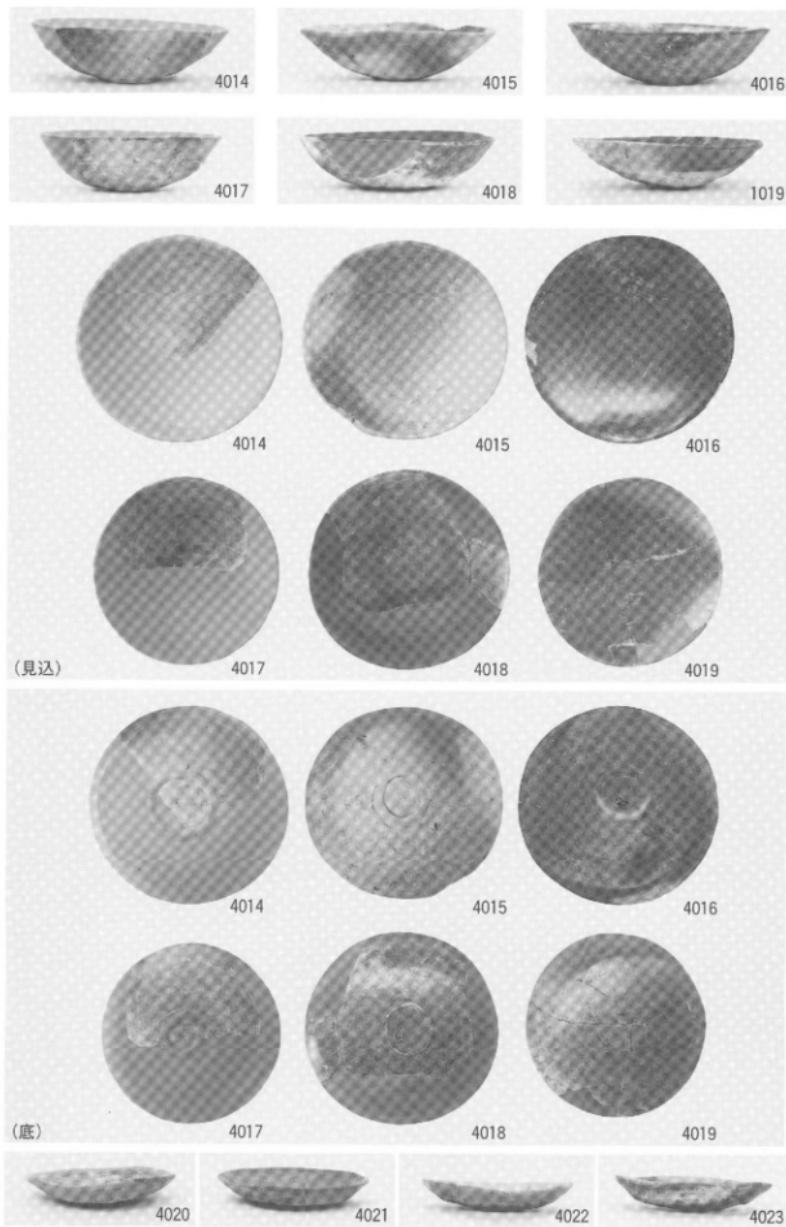
3. 第5面柱穴（東から）



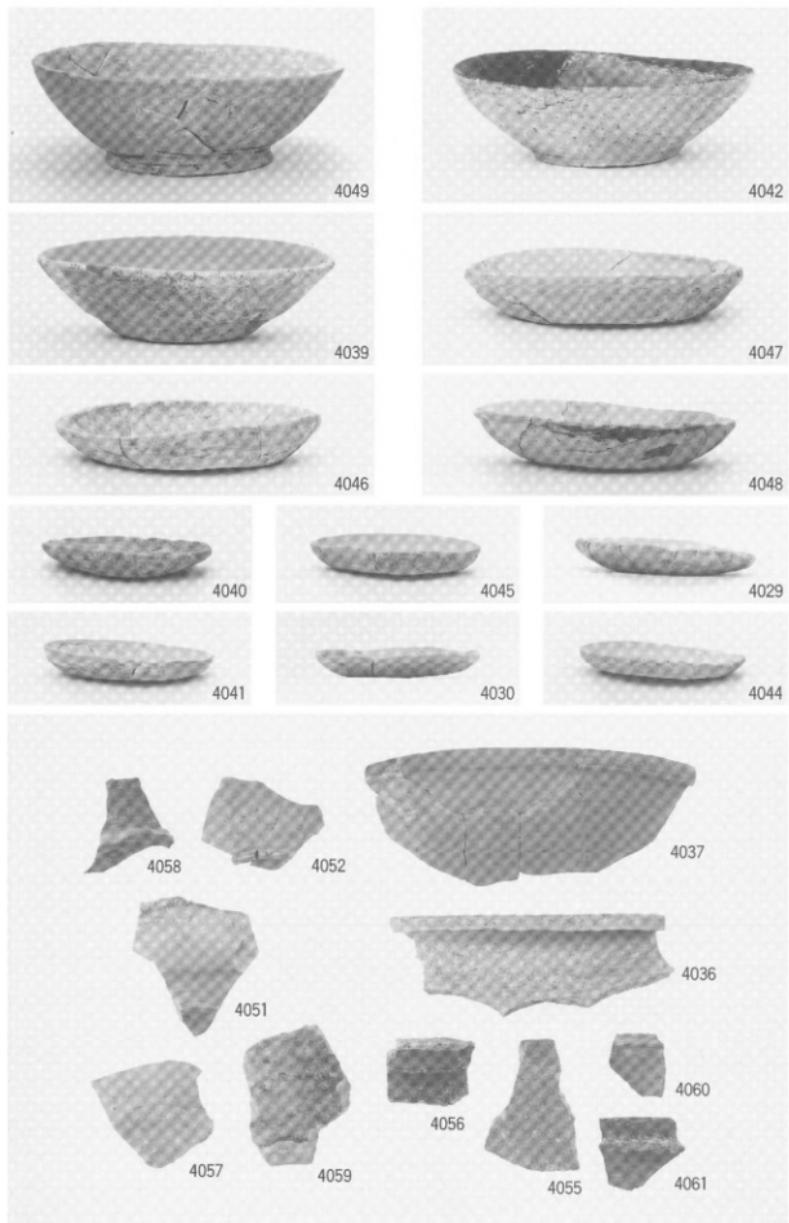
4. 第3～5面全景（北から）

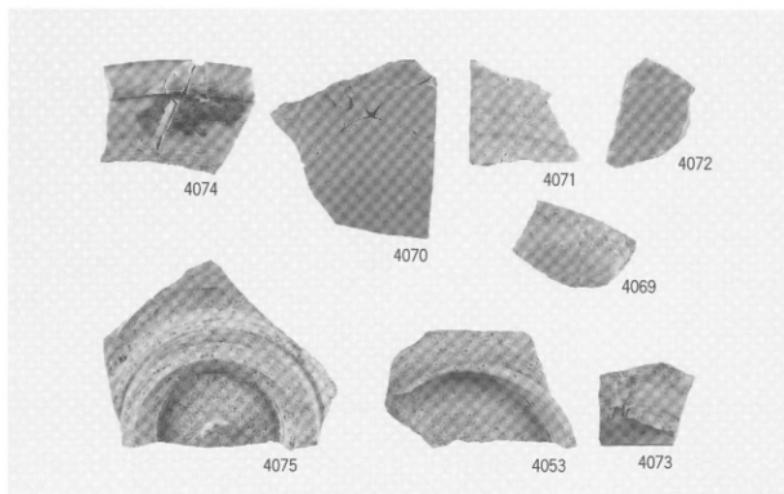
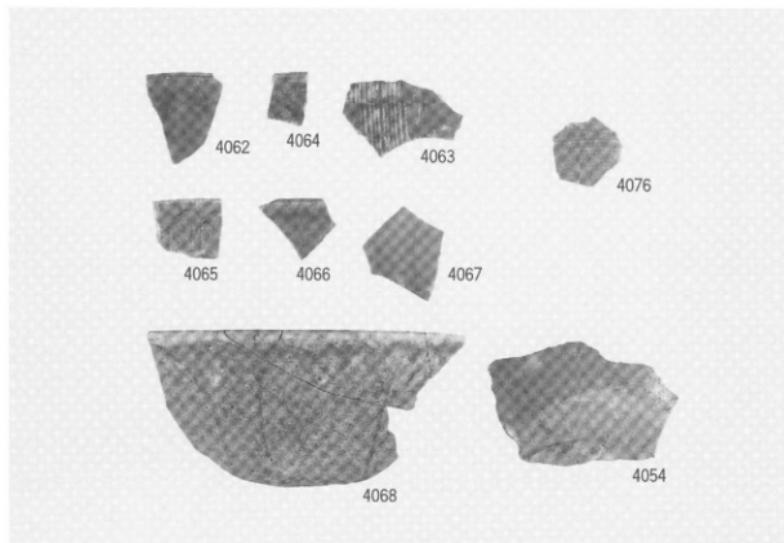
図版 一七 一九八七年度調査 遺物(二)



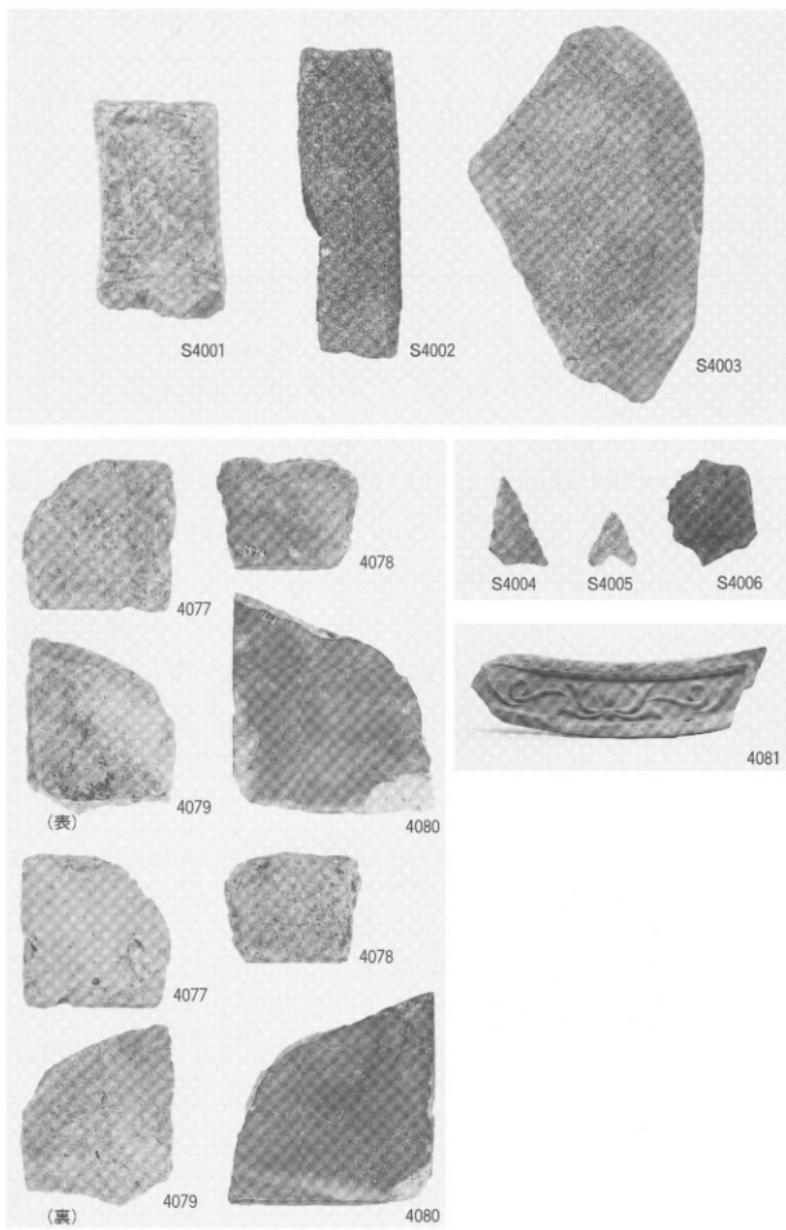


図版 一九 一九八七年度調査 遺物(三)





図版 二一 一九八七年度調査 遺物(五)





1. 第1面全景（東から）



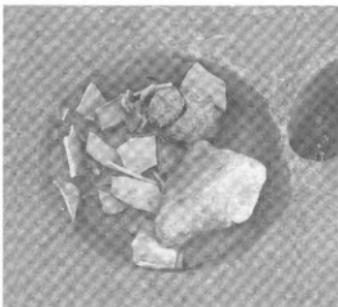
2. SA02・03（北から）



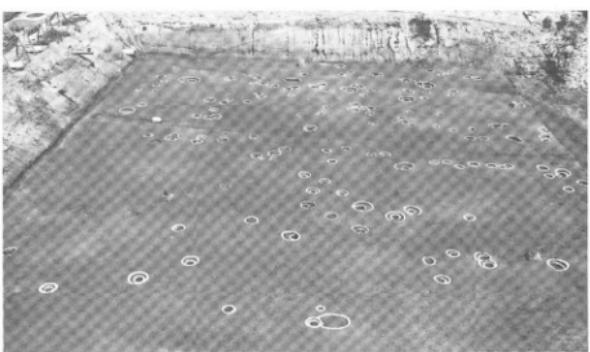
3. 水琴窟（東から）



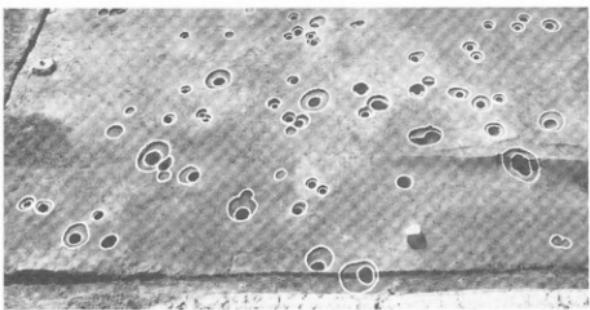
4. SB01・02（東から）



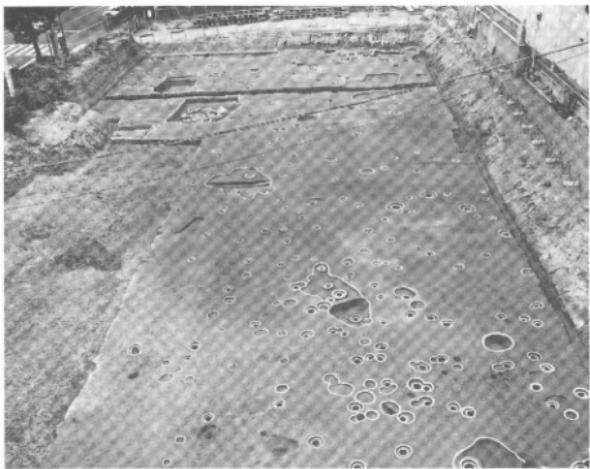
5. SK01（南から）



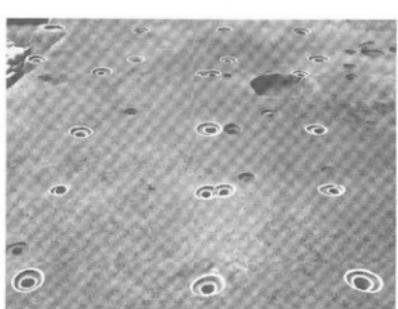
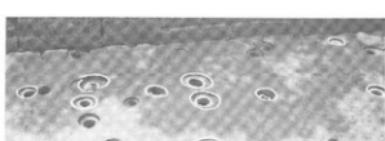
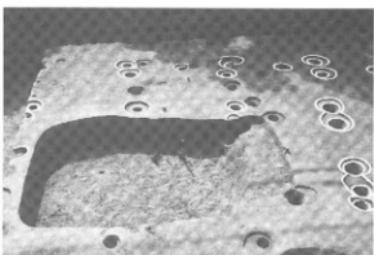
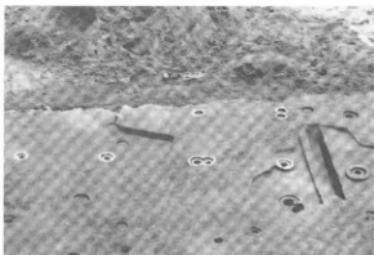
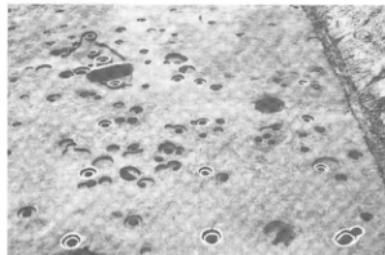
1. 第2面全景(西から)



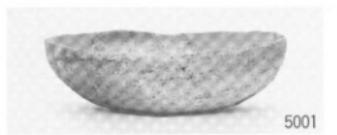
2. SB03・04(北から)



3. 第3面全景(東から)



図版 二五 一九九二年度調査 遺物（二）



5001



5003



5002



5008



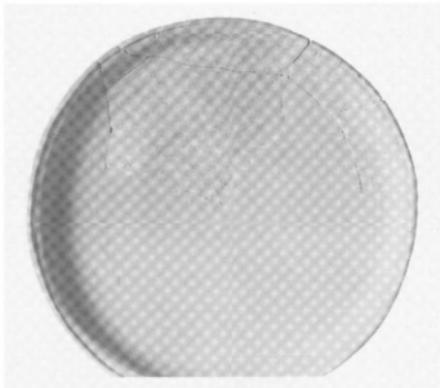
5004



5006



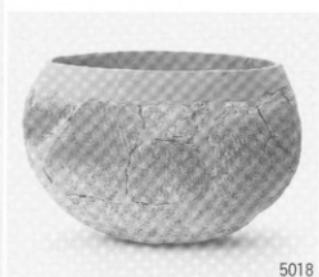
5007



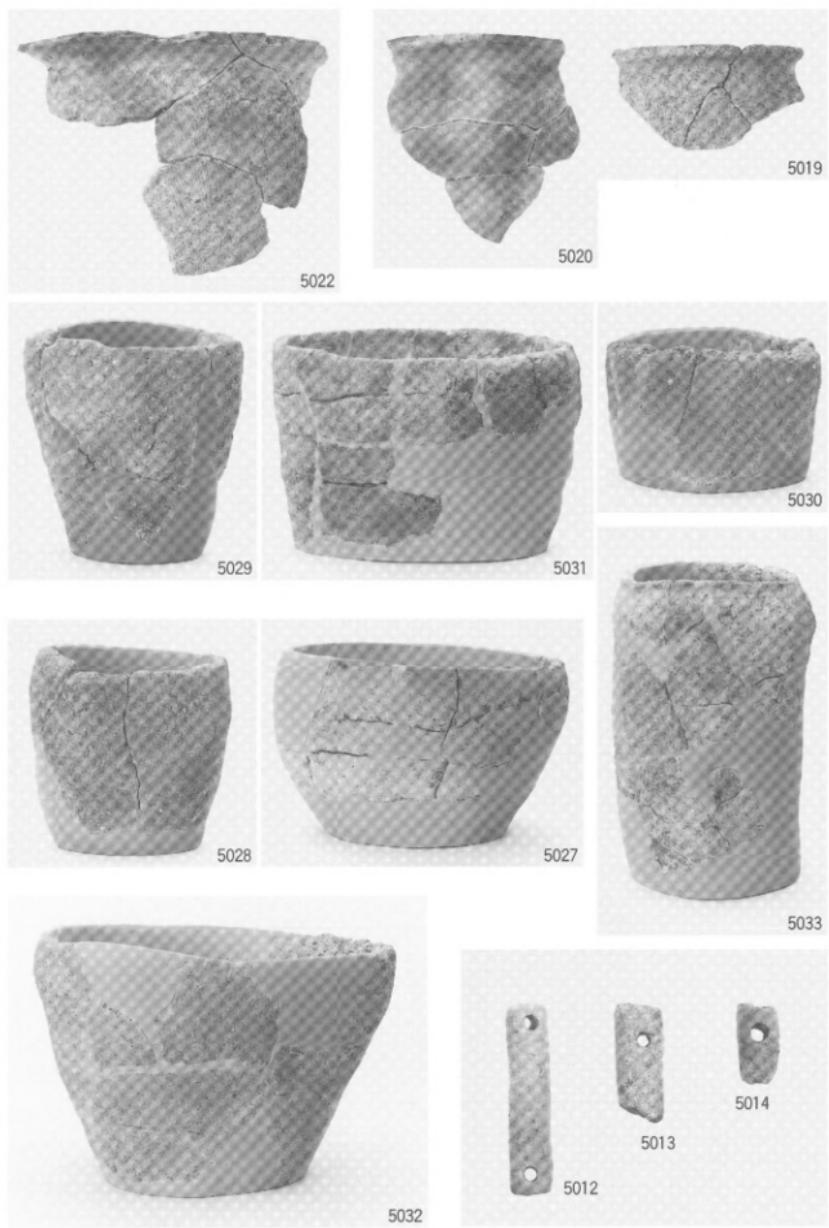
5011



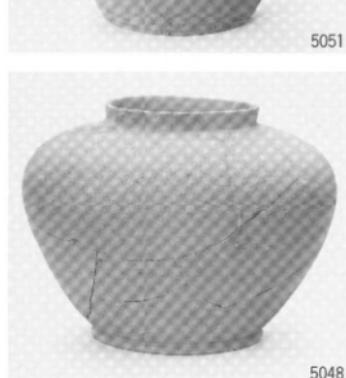
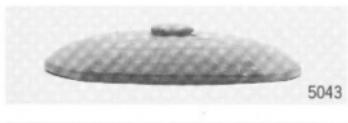
5023



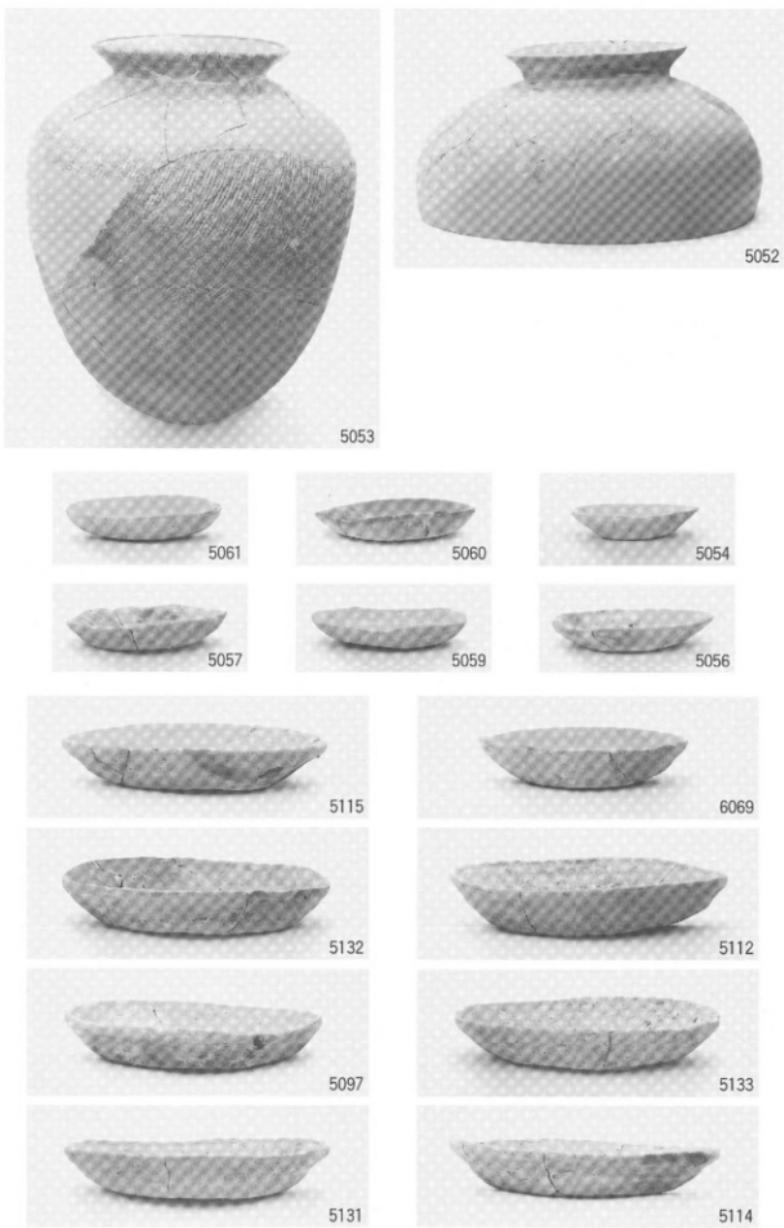
図版二七 一九九二年度調査 遺物(三)



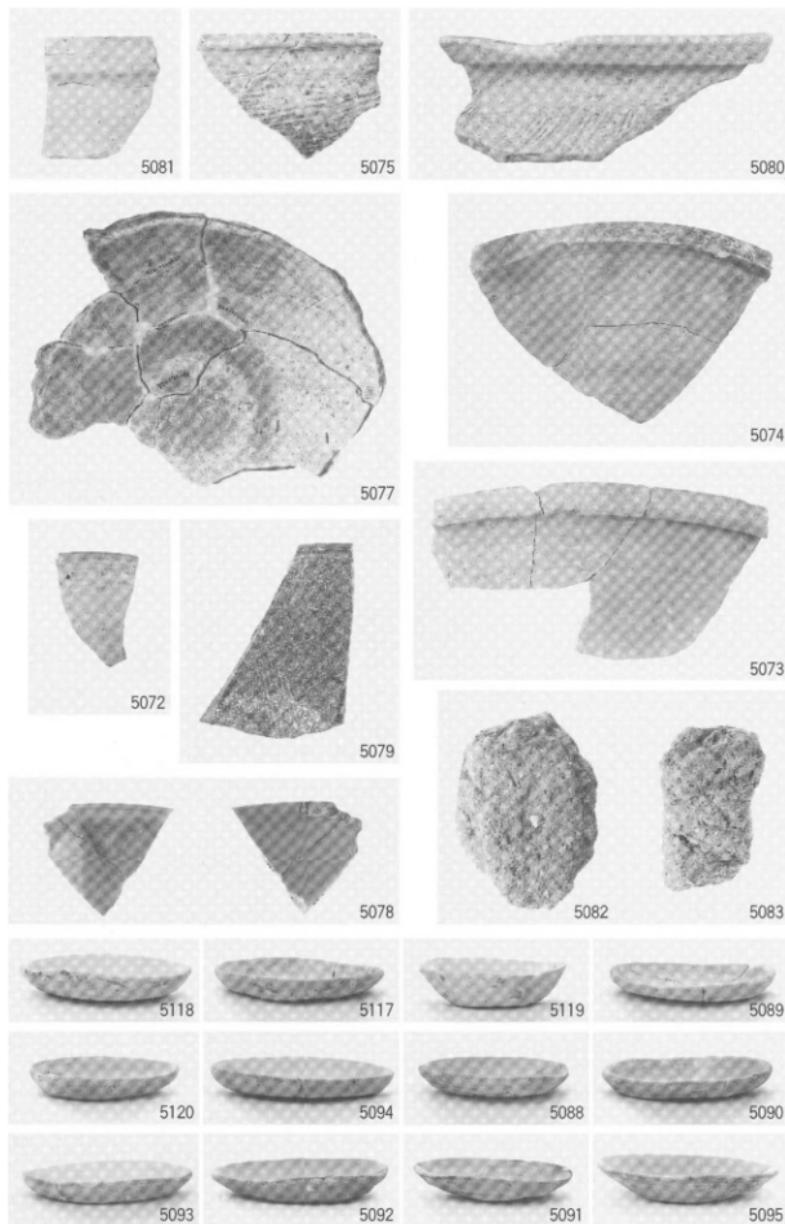
圖版
二八 一九九二年度調查
遺物 (四)



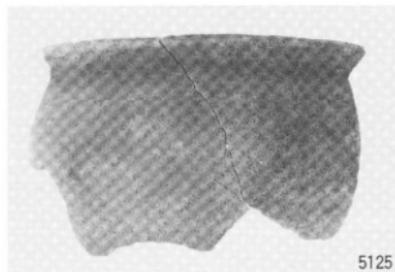
図版 二九 一九九二年度調査 遺物(五)



圖版
三〇
一九九二年度調查
遺物（六）



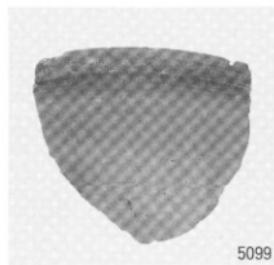
圖版 三一 一九九二年度調査 遺物（七）



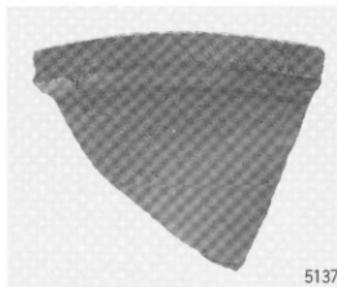
5125



5128



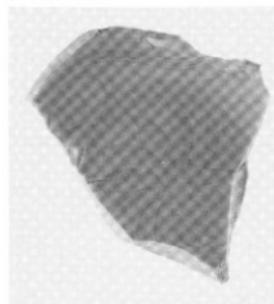
5099



5137



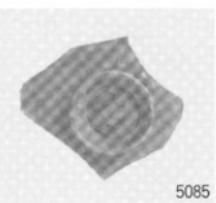
5101



5102



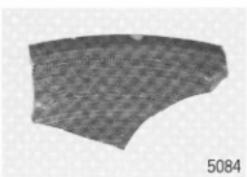
5126



5085

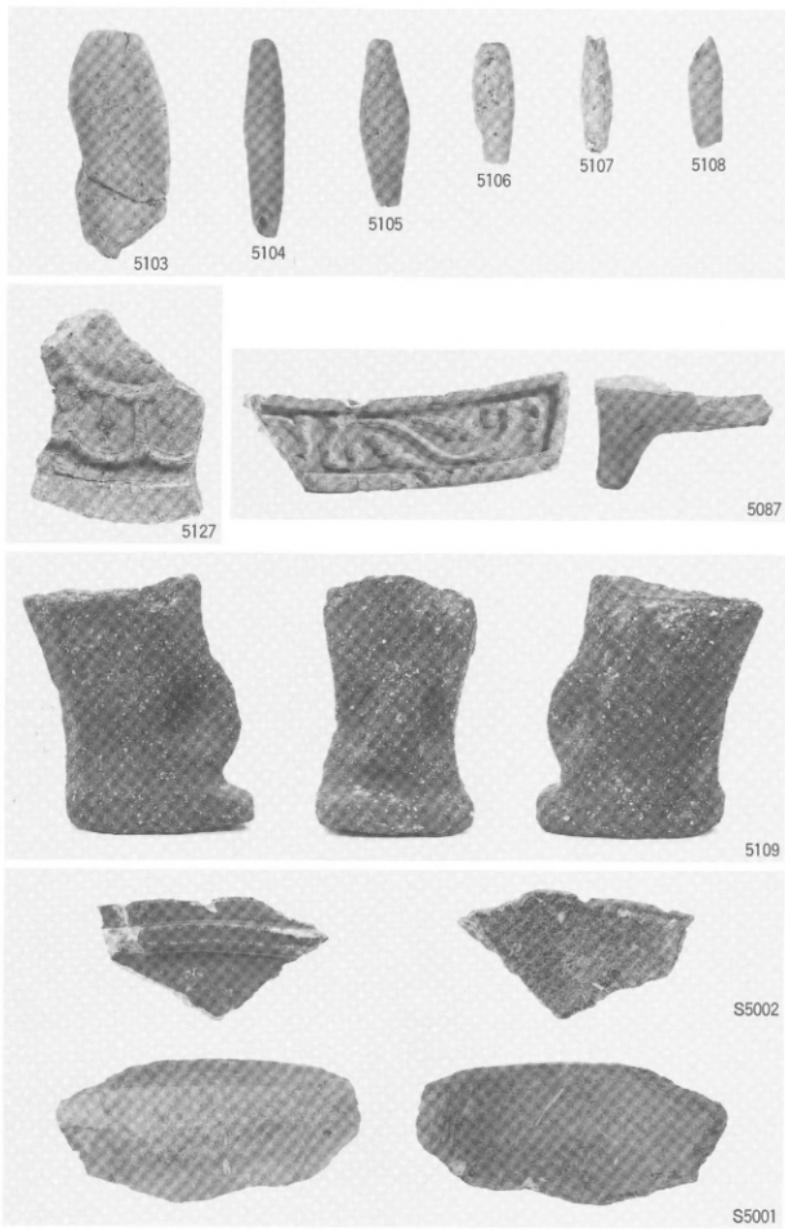


5110



5084

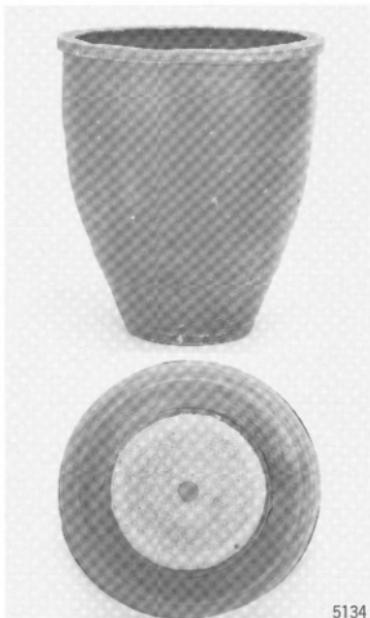
圖版
三二 一九九二年度調查
遺物（八）



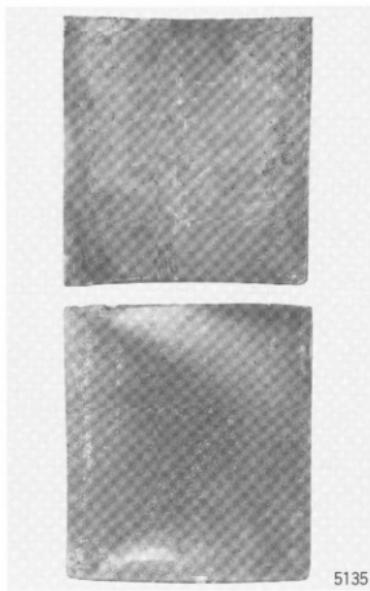
図版 三三 一九九二年度調査 遺物（九）



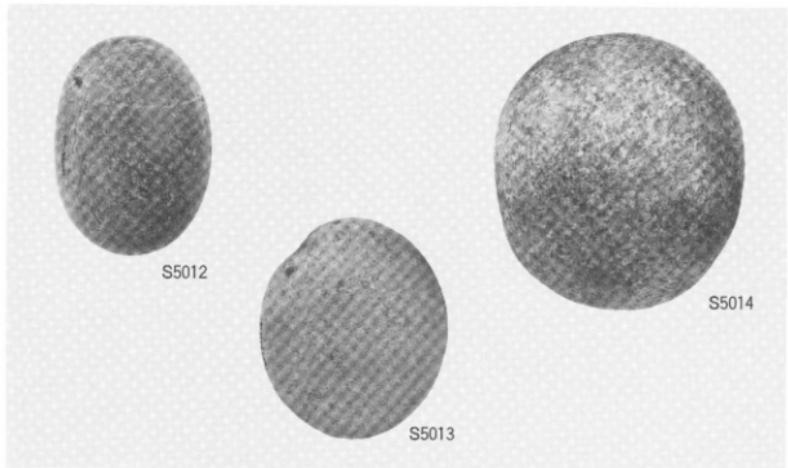
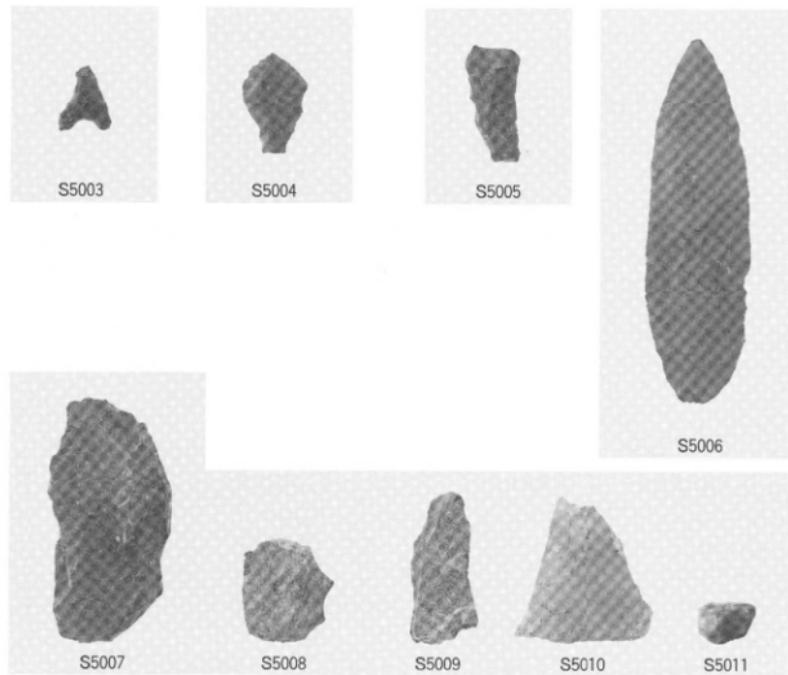
5136



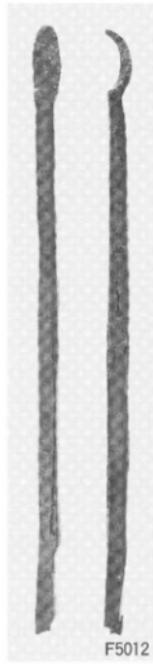
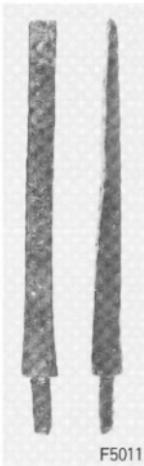
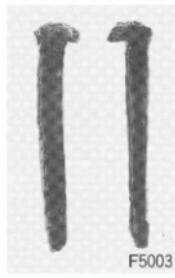
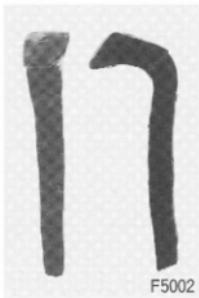
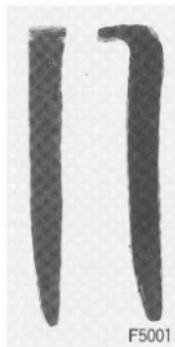
5134



5135

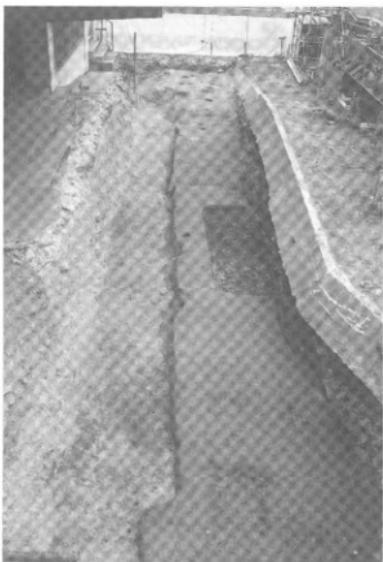


図版 三五 一九九二年度調査 遺物(一一)

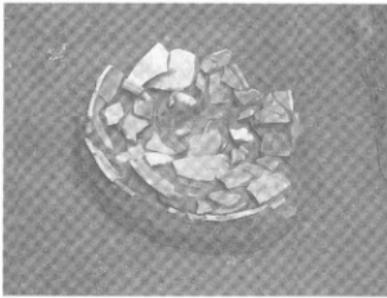
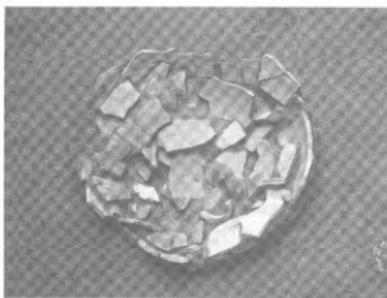




1. A区全景（西から）



2. B区全景（北から）

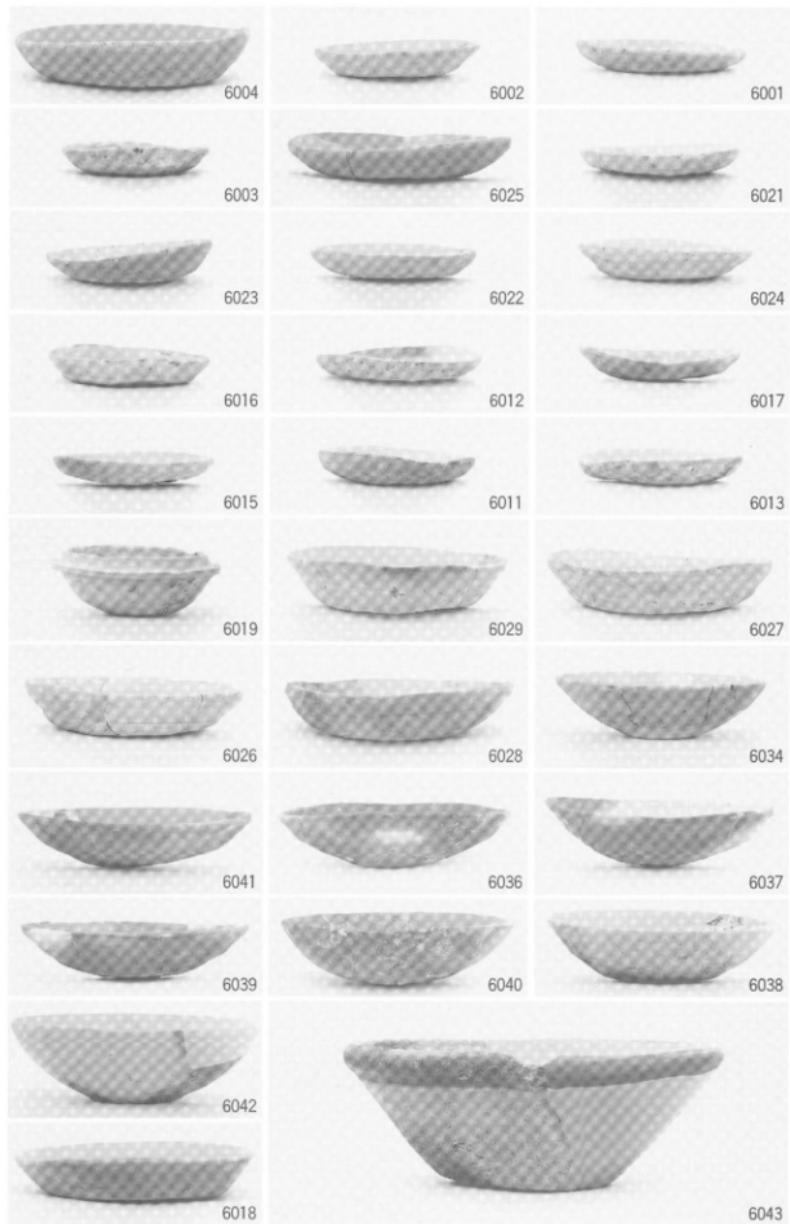


3. 埋甕（6097）出土状況（A区）〈上下〉



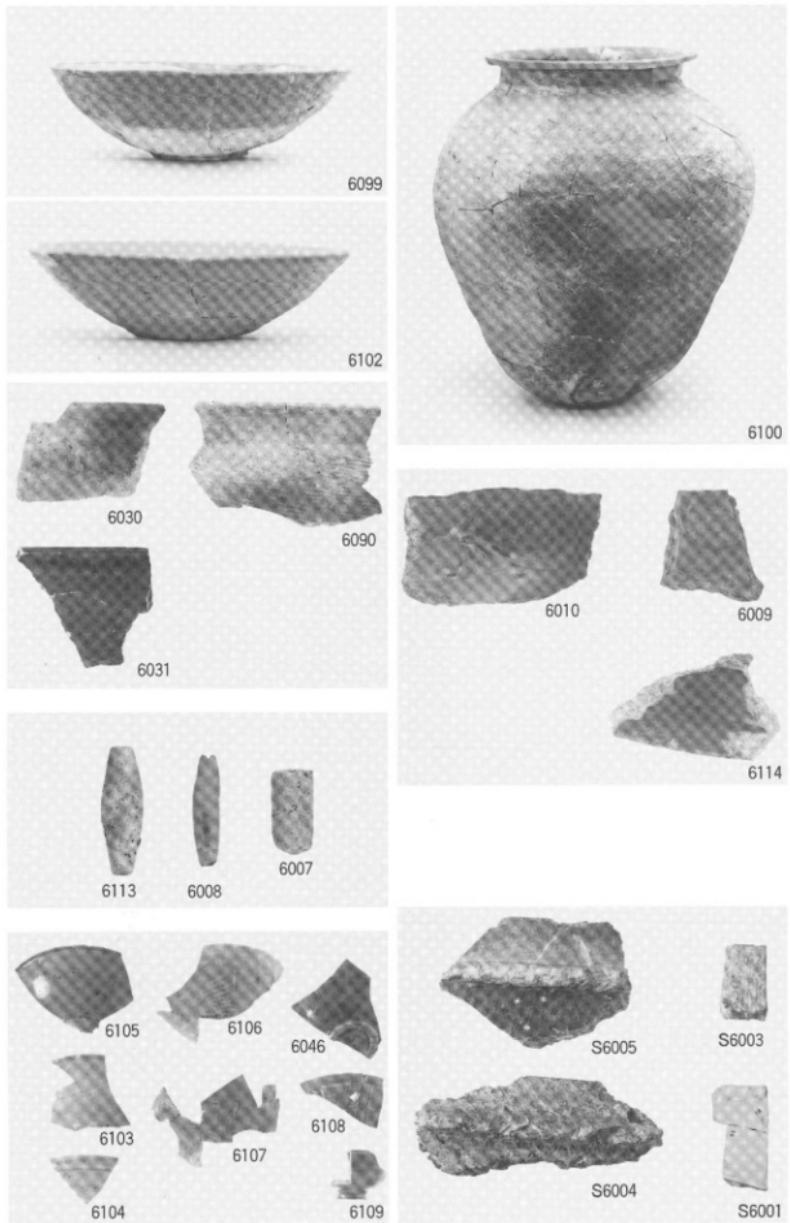
4. 作業風景（A区）〈上下〉

図版 三七 一九九四年度調査 遺物（二）

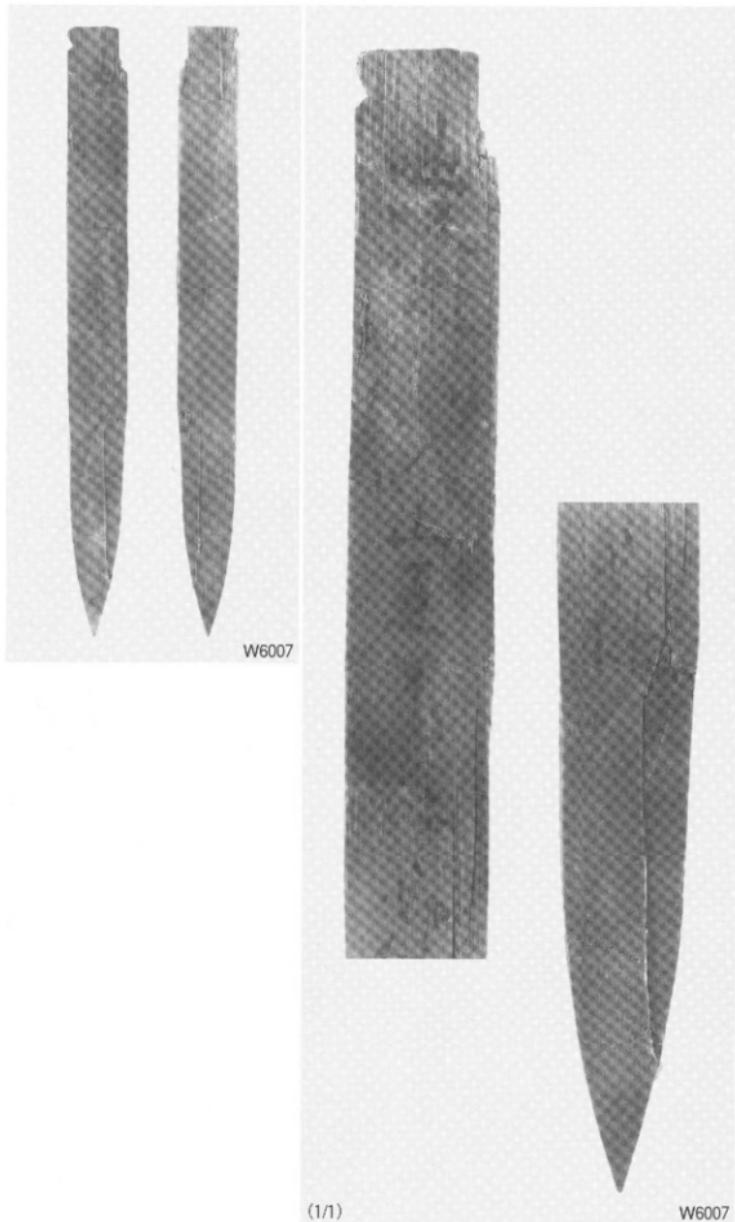


 6051	 6064	 6050
 6082	 6063	 6081
 6054	 6070	 6062
 6060	 6059	 6083
 6056	 6079	 6061
 6068	 6058	 6055
 6057	 6066	 6065
 6075	 6072	 6071
 6073	 6080	 6074
 6084		 6087
 6088	 6089	 6091
 6093	 6092	 6095

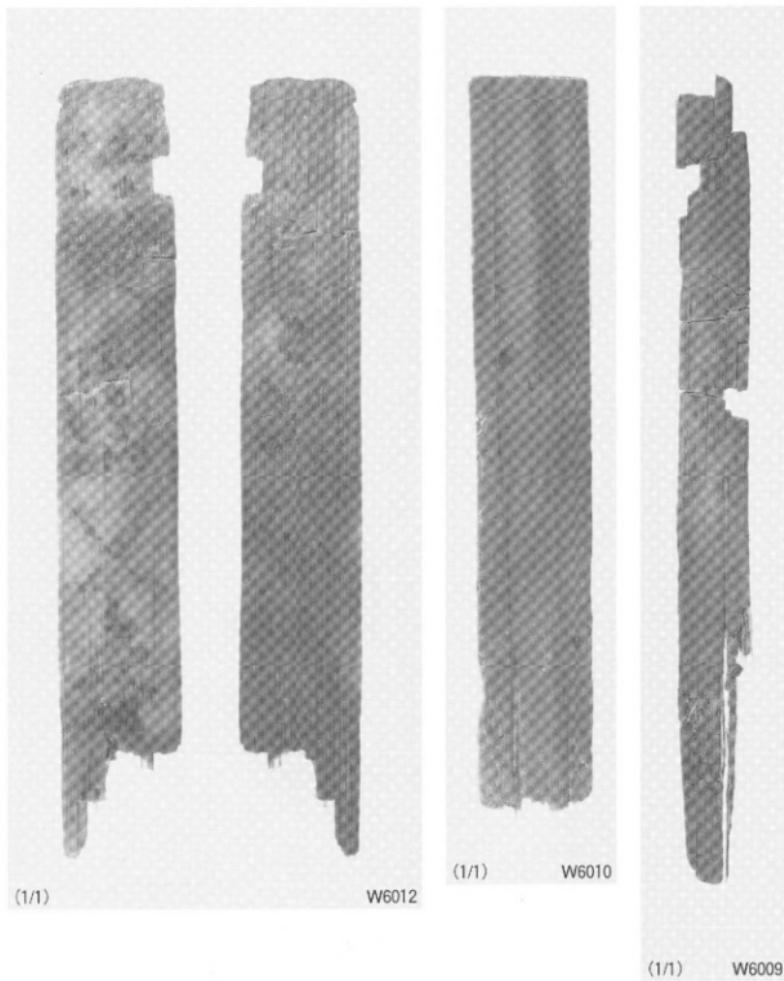
図版 三九 一九九四年度調査 遺物(三)



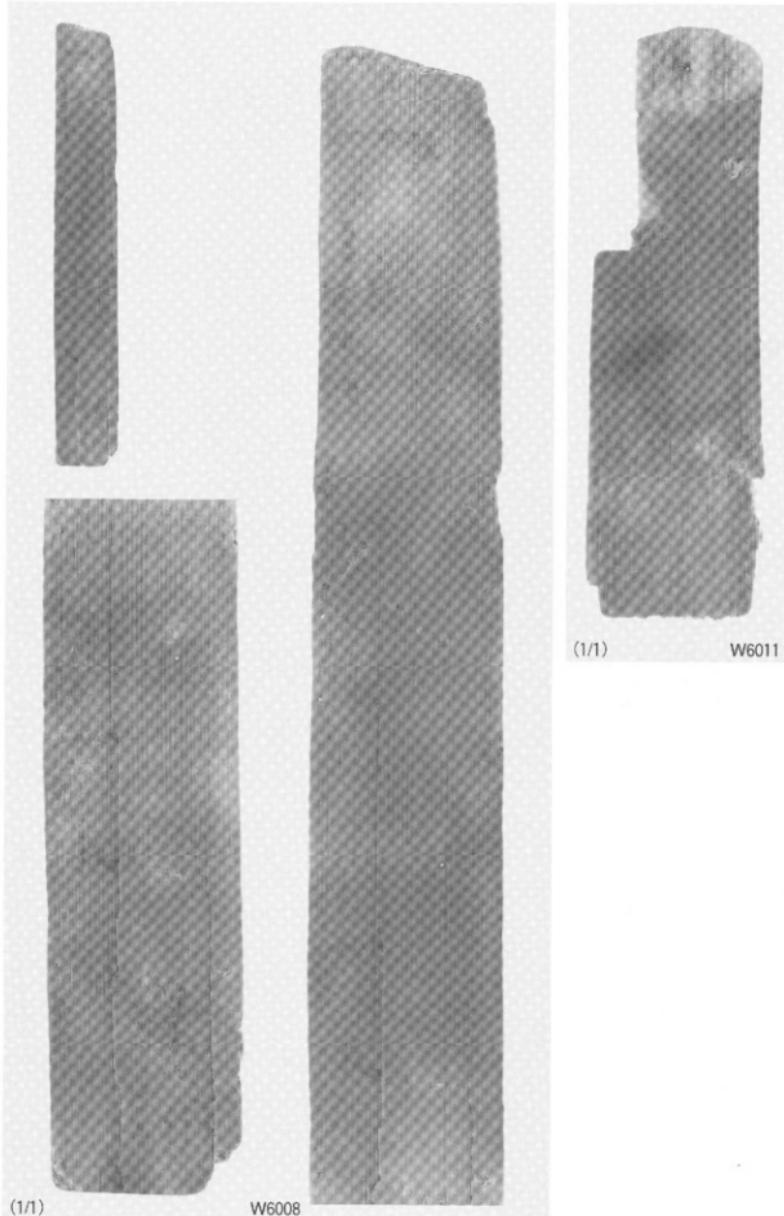
圖版 四〇 一九九四年度調查 遺物（四）



図版 四一 一九九四年度調査 遺物(五)



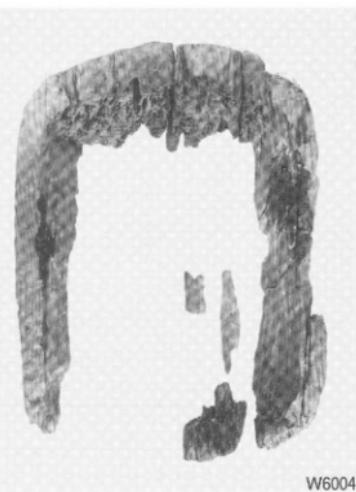
圖版 四二 一九九四年度調查 遺物（六）



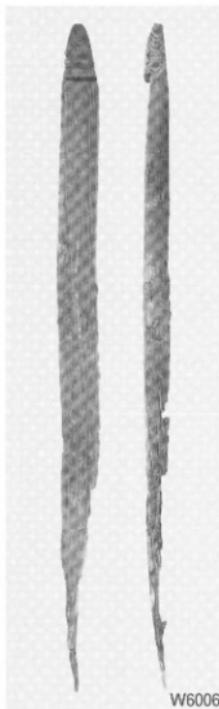
図版 四三 一九九四年度調査 遺物(七)



W6001



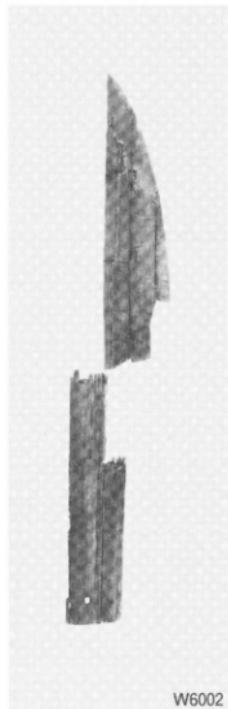
W6004



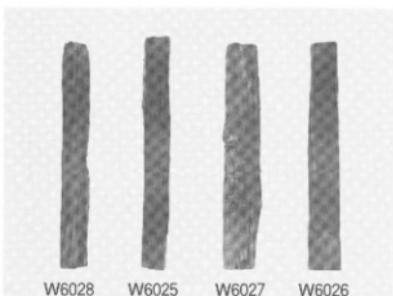
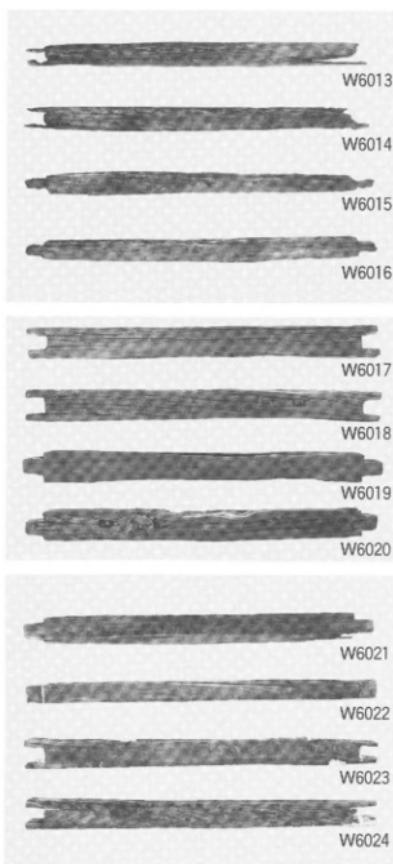
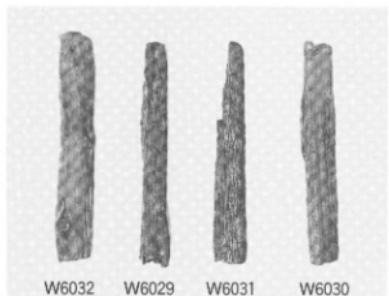
W6006



W6003



W6002



報 告 書 抄 錄 (Outline of the Report)

よみがな		くすのきあらたちょういせき		About The Report		
書名		楠・荒田町遺跡		KUSUNOKI - ARATACHO Site		
副書名		神戸大学附属病院構内遺跡		loc. Hospital of KOBE UNV.		
巻次		なし		Report of the Archaeological Propreties		
シリーズ名		兵庫県文化財調査報告書		HYOGO Pref. Vol.162		
シリーズ番号		第162冊		Author / Editor		
編著者名		岡田章一・久保弘幸・深江英憲		SYOICHI Okada, HIROYUKI Kubo, HIDENORI Fukae		
調査機関		兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所		Hyogo Pref. Center for Archaeology		
所在地		所在地 神戸市兵庫区荒田町2-1-5		2-1-5 Arata-cho, Hyogo-ward, Kobe-city,		
発行年月日		1998年3月31日		Hyogo-Pref. Japan		
ふりがな		コード		北緯	東経	
所取遺跡名		市町村	遺跡番号	north latitude	east longitude	
くすのきあらたちょう 楠・荒田町遺跡						
調査番号		調査期間		調査面積	調査原因	
850055		1985年5月20日～7月4日		780m ²	神戸大学医学部附属病院 施設新営事業に伴う調査	
870031		1987年10月12日～10月16日		1203m ²		
920174		1992年7月7日～10月30日		1251m ²		
940257		1994年10月24日～12月7日		392m ²		
遺跡の種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
集落遺跡	绳文時代・奈良時代	掘立柱建物跡		石器		
	平安時代末～鎌倉時代	溝・土坑		土師器		
	室町時代・江戸時代	井戸・耕作遺構		須恵器		
	近代	埋甕		陶磁器		
		水琴窟		漆器		
Sort of the site		Ruins		Remains		
Village	Jomon	Pits of structures		Stone tools		
	Nara	Ditches		Haji ware,		
	late Heian and Kamakura	Wells		Sue ware		
	Muromachi	Holes for waste		Porcelains		
	Edo and Modern age					

兵庫県文化財調査報告 第162冊

楠・荒田町遺跡

—神戸大学附属病院構内遺跡—

平成9年3月31日 発行

編 集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5

発 行 兵庫県教育委員会
〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10-1

印 刷 株式会社 関西廣済堂 神戸支店
〒657 神戸市灘区泉通6丁目2-15
